

和　歌　山　城　跡

—和歌山地家簡裁序舎建設に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

和　歌　山　城　跡

—和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う発掘調査報告書—

2015年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

卷頭図版 1



3区第3面全景（東から）



3区第3面柱列7（南東から）

卷頭図版 2



3区第4面中世土壙墓 421（南西から）



刀装具の小柄



三葉葵紋鬼瓦



黒釉鳥形香合



煎茶道具

序 文

和歌山城の所在する和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し古くから紀伊国を中心として栄えてきました。紀ノ川が紀伊水道へと流れ込む河口部にあたり、交通の要衝の地として重要な位置を占めています。

和歌山城周辺は近世以前の様相があまり分かっていませんでしたが、今回の調査では古墳時代の埴輪や室町時代の土壙墓、安土桃山時代の桑山家の家紋瓦などがわずかながらも確認され、和歌山城東側の土地利用の状況が判明しました。

本書の掲載対象となる発掘調査は、和歌山地方・家庭・簡易裁判所の建替え工事に先立つもので、近世の武家屋敷地4区画にあたる範囲を対象としています。江戸時代前期の屋敷地に伴う遺構は繰り返し行われた整地によりほとんど残存していませんでしたが、整地土中から出土した陶磁器類から当時の生活の様子がうかがえます。刀装具や文房具、煎茶道の道具や喫煙具など、紀州藩士の生活を反映した出土遺物のほか、窯道具や瑞芝焼など在地の焼き物に関連する遺物が多数出土したこと、重要な成果といえるでしょう。

本書が和歌山城跡、ひいては和歌山県全域の歴史を知る上で重要な資料となることを期待します。

最後に、発掘調査及び本書の作成に際して、ご指導・ご協力いただいた方々に感謝の意を表したいと思います。

平成27年3月

公益財団法人和歌山県文化財センター

理事長 工 樂 善 通

例　　言

1. 本書は和歌山市二番丁に所在する和歌山城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は和歌山地方・家庭・簡易裁判所の庁舎新設工事に伴うもので、平成23年度に発掘調査業務、平成26年度に出土遺物整理業務を実施した。
3. 業務は和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘調査（平成23年度）

事務局	理事長 鈴木 嘉吉
	専務理事 白藤 正和
	事務局長 田中 洋次
	管理課長 富加見泰彦 主査 松尾 克人
埋蔵文化財課 課長	村田 弘 副主査 丹野 拓
	専門調査員 山野 晃司 専門調査員 森原 聖

出土遺物整理（平成26年度）

事務局	理事長 工楽 善通
	専務理事 里森 修
	事務局長 嶋田 文紀 主査 松尾 克人
	参与 村田 弘
埋蔵文化財課 課長	井石 好裕 主査 丹野 拓

4. 本書は第2章の執筆を村田、その他の執筆及び編集は丹野が行った。
5. 遺構の写真は丹野及び森原が撮影し、出土遺物の写真撮影は土器の一部を山本光俊が、その他を丹野が行った。
6. 木製品のうち報告書番号1058・1062・1063については、株式会社吉田生物研究所に委託して保存処理を行った。
7. 発掘調査の際に出土した人骨の取上げについては阿部みき子氏（大阪市立大学）、出土遺物整理の際の陶磁器の产地・年代確認については松尾信裕氏（大阪城天守閣）にご教示・ご協力をいただいた。また、発掘調査及び遺物整理において、当センター・県教育委員会・裁判所関連の職員のほか、下記の方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。
(以下、敬称略)
井馬好英・奥村薫・北野隆亮・藤敷勝則（和歌山市都市整備公社）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、岩本二郎・小原正顕・小坂晃・竹中利明・吉田誠（和歌山県立自然博物館）、大河内智之（和歌山県立博物館）、中村貞史
8. 当業務で作成した図面・写真・台帳類は当センターが保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会が所蔵している。

凡　　例

1. 発掘調査及び出土遺物整理は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）を基準とし、数値はm単位で表示している。また、図示した北は座標北を指す。
3. 発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を基準とした。
4. 土色は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2003年版を基準とした。
5. 発掘調査で使用したコードは以下のとおりである。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用いて管理している。

11-011・375 (2011年度和歌山市和歌山城跡発掘調査)

6. 発掘調査区のうち1・2区については、掘削深度の異なる細かい調査区が指定されていたため、調査区細分名称（グリッド名・トレント名）を付けて、細かく管理した。3区については、武家屋敷の区画のある時期の遺構については、必要に応じて北西・北東・南西・南東の4区画の屋敷地に分割して整理した。

遺構番号は、1・2区では細分した調査区別に遺構番号を設定した。3区は調査区全体を通して番号で付けた。遺構名は三桁の数字に統けて遺構の性格を表す語句を入れ、033溝・209土坑などとした。なお、大型の穴を土坑、小型の穴をピットとし、これらのうち柱列を構成するか、断面で柱痕が確認できるものを柱穴と表現した。いくつかの個別遺構を統合した遺構については、遺構の性格を表す語句の後ろに通し番号を付け、柱列1などとした。

7. 出土遺物の登録番号は、1区で001～、2区で2001～、3区で3001～と通し番号を付けた。
8. 遺構図の縮尺は基本的に1/40を多用したが、必要に応じて異なる縮尺を用いており、図ごとに縮尺を表示している。遺物実測図の縮尺は基本的に1/4であるが、瓦は1/6、貨幣は1/2とした。
9. 土器は煤及び墨書を網ふせ、釉薬の表現は一点鎖線で範囲を示し、図化の困難なもの及び染付紋様等については写真を貼りつけた。個別詳細については遺物観察表を参照されたい。

目 次

巻頭図版・序・例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 出土遺物整理の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 周辺の遺跡	5
第4節 調査地点の環境及び屋敷地の変遷	6
第5節 既往の調査	7
第3章 調査の方法	11
第1節 調査の方法	11
第2節 地区割りと座標	11
第3節 基本層序と遺構面	14
第4章 遺構	16
第1節 1区	16
第2節 2区	31
第3節 3区	33
第5章 出土遺物	62
第1節 1区出土土器	62
第2節 2区出土土器	74
第3節 3区出土土器	79
第4節 墓輪	118
第5節 瓦	119
第6節 石製品	127
第7節 金属製品・貨幣	131
第8節 木製品	135
第9節 その他の遺物	137
第6章 総括	138
遺物観察表	142
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 業務経緯と経過の概要	1	図39 3区第3面検出遺構5	53
図2 調査対象地の概要	1	図40 3区第4面検出遺構平面図	56
図3 和歌山の地形環境・中世	3	図41 3区第4面検出遺構1	57
図4 周辺の遺跡	5	図42 3区第4面検出遺構2	58
図5 和歌山城下町絵図	6	図43 3区第4面検出遺構3	59
図6 星敷地変遷図	7	図44 3区第5面検出遺構平面図	60
図7 既往の調査区	8	図45 3区第4・5面検出遺構	61
図8 県1次調査第1遺構面	9	図46 1区北半(北西星敷地)出土土器1	66
図9 調査区名の設定状況	12	図47 1区北半(北西星敷地)出土土器2	67
図10 座標と大区画・小区画の設定状況	13	図48 1区北半(北西星敷地)出土土器3	68
図11 調査区土層柱状図	15	図49 1区北半(北西星敷地)出土土器4	69
図12 1区北半グリッド平面図	17	図50 1区北半(北西星敷地)出土土器5	70
図13 1区①・③・⑫グリッド壁面土層図	18	図51 1区北半(北西星敷地)出土土器6・南半 (南西星敷地)出土土器1	71
図14 1区北半トレンチ平面図	21	図52 1区南半(南西星敷地)出土土器2	72
図15 1区北半遺構集中部平面図	22	図53 1区南半(南西星敷地)出土土器3 他	73
図16 1区北半遺構図1	23	図54 2区北半(北西・北東星敷地)出土土器1	75
図17 1区北半遺構図2	24	図55 2区北半(北東星敷地)出土土器2	76
図18 1区北半遺構図3	25	図56 2区北半(北東星敷地)出土土器3	77
図19 1区北半遺構図4	26	図57 2区北半(北東星敷地)出土土器4・南半 (南東星敷地)出土土器	78
図20 1区南半トレンチ平面図	28	図58 3区第1面・第2面検出遺構出土土器1	88
図21 1区南半遺構集中部平面図	29	図59 3区第2面検出遺構出土土器2	89
図22 1区南半遺構図	30	図60 3区第2面検出遺構出土土器3	90
図23 2区トレント平面図	32	図61 3区第2面検出遺構出土土器4	91
図24 3区第1面検出遺構平面図	34	図62 3区第2面検出遺構出土土器5	92
図25 3区調査区壁面土層	35	図63 3区第2面検出遺構出土土器6	93
図26 3区第2面検出遺構平面図	38	図64 3区第2面検出遺構出土土器7	94
図27 3区星敷地境界の基礎地形跡	39	図65 3区第2面検出遺構出土土器8	95
図28 3区第1・2面検出遺構1	40	図66 3区第2面検出遺構出土土器9	96
図29 3区第2面検出遺構2	41	図67 3区第2面検出遺構出土土器10	97
図30 3区第2面検出遺構3	42	図68 3区第2面検出遺構出土土器11・第3面検出遺 構出土土器1	98
図31 3区第2面検出遺構4	43	図69 3区第3面検出遺構出土土器2	99
図32 3区第2面検出遺構5	44	図70 3区第3面検出遺構出土土器3	100
図33 3区第2面検出遺構6	45	図71 3区第3面検出遺構出土土器4	101
図34 3区第3面検出遺構平面図	48	図72 3区第3面検出遺構出土土器5	102
図35 3区第3面検出遺構1	49	図73 3区第3面検出遺構出土土器6	103
図36 3区第3面検出遺構2	50		
図37 3区第3面検出遺構3	51		
図38 3区第3面検出遺構4	52		

図74	3区第3面検出遺構出土土器7	104	表5	瓦観察表	156
図75	3区第3面検出遺構出土土器8	105	表6	石製品観察表	158
図76	3区第3面検出遺構出土土器9	106	表7	金属製品観察表	158
図77	3区第3面検出遺構出土土器10	107	表8	貨幣観察表	159
図78	3区第3面検出遺構出土土器11	108	表9	木製品観察表	160
図79	3区第3面検出遺構出土土器12・ 第4面検出遺構出土土器1	109			
図80	3区第4面検出遺構出土土器2	110			
図81	3区第4面検出遺構出土土器3・ 第5面検出遺構出土土器1	111			
図82	3区第5面検出遺構出土土器2・ I層及び搅乱出土土器	112			
図83	3区II層及び第2面整地土出土土器1	113			
図84	3区II層及び第2面整地土出土土器2	114			
図85	3区II層及び第2面整地土出土土器3・ 第3面整地土出土土器	115			
図86	3区III層出土土器	116			
図87	3区IV層・第5面出土土器	117			
図88	埴輪	118			
図89	瓦1(軒丸瓦)	121			
図90	瓦2(軒丸瓦)	122			
図91	瓦3(軒平瓦・滴水瓦)	123			
図92	瓦4(軒平瓦・滴水瓦・丸瓦)	124			
図93	瓦5(平瓦・棟瓦)	125			
図94	瓦6(道具瓦他)	126			
図95	石製品1(石臼)	128			
図96	石製品2(硯)	129			
図97	石製品3(砥石・碁石他)	130			
図98	金属製品1(刀装具・煙管・飾金具・匙・ 吊手金具)	132			
図99	金属製品2(吊手金具他)	133			
図100	金属製品3(貨幣)	134			
図101	木製品	136			
図102	調査区の概要	139			
表1	1区出土土器観察表	142			
表2	2区出土土器観察表	145			
表3	3区出土土器観察表	146			
表4	埴輪観察表	156			

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

和歌山城に関連する遺跡は、内堀の中の天主・本丸・二の丸を含む範囲が史跡和歌山城として指定されており、その北と東に面する家臣の屋敷地が立ち並ぶ三の丸が埋蔵文化財包蔵地の和歌山城跡とされている。調査地は三の丸の武家屋敷地跡が連なる一角にあたる。

最高裁判所事務総局で和歌山地方・家庭・簡易裁判所の庁舎新営工事が計画されたが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である和歌山城跡の範囲内であるため、和歌山県教育委員会と保存協議のうえ、発掘調査が行われることとなった。和歌山県教育委員会文化遺産課では平成22年1月29日から2月4日まで試掘調査を行った。裁判所敷地の中央と中庭東側に幅2m、長さ10mの南北方向のトレンチを設定し、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチとした。

調査の結果、標高3.1mから1.6mまでの間に4～5面の遺構面が存在することが確認された。両トレンチとも第1面は19世紀以降、第2・3面は18世紀頃、第4・5面はそれ以前と考えられたが、土色や遺構面の高さは第1トレンチと第2トレンチでは異なっており、複雑な様相がうかがわれた。

以上の試掘成果に基づき、裁判所調査本部については、標高1.6mまで遺構面4～5面の調査を行い、周辺の配管部等については構造物が埋設される遺物包含層直下の遺構面までを対象に調査を行うこととした。発掘調査は和歌山県教育委員会の指導のもと、当センターが現地調査を担当することとなった。

平成23年6月17日付けで最高裁判所事務総局と当センターで発掘調査の契約を締結し、平成24年3月30日までに発掘調査業務を行った。現地作業期間は平成23年7月19日から平成24年2月29日までである。



図1 業務経緯と経過の概要



図2 調査対象地の概要

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は調査準備及び現況測量後に開始した。発掘調査は工事請負方式で実施し、掘削作業は株式会社畠中産業に、基準点測量および航空撮影・写真測量図化は国際航業株式会社に委託して行った。調査面積は約 2,760 m²である。

調査区は 1～3 区に分け、3 区は 5 面に分けて掘削を行い、3 回の空撮と 5 回の空測を行った。調査は 7 月 19 日に開始し、第 1 回空撮は 1 区北半の①～⑤・⑪・⑫を対象に 8 月 22 日、第 2 回空撮は 1 区南半及び 2 区南半を対象に 9 月 10 日、第 3 回空撮は 1 区北半及び 2 区北半を対象に 10 月 17 日に行つた。第 4 ～ 第 8 回目の撮影は空測であり、3 区の第 1 面から第 5 面までを対象に、11 月 12 日・12 月 5 日・12 月 23 日・1 月 24 日・2 月 10 日に実施した。現地調査は 2 月 29 日に終了し、和歌山地裁職員の現地確認を受けた。

第3節 出土遺物整理の経過

発掘調査で出土した遺物及び写真・図面について、応急整理作業及び整理作業を行つた。

応急整理作業は、発掘調査と同じ年度に実施し、現地調査事務所および一時保管場所において実施した。作業は遺物の水洗、台帳登録・コンテナ収納を行つた。また、玉類・骨片・炭化物などの微細な遺物を採集する必要性から、一部の遺構の埋土を持ち帰り、水洗を行つた。

整理作業は平成 26 年 4 月 2 日から平成 27 年 2 月末日まで、当センターの貴志川整理事務所において実施し、3 月に発掘調査報告書を刊行した。これらの遺物は洗浄・注記・接合を行い、必要に応じて補強・復元・実測・トレースして報告書に掲載した。遺跡写真と図面はファイルに入れ、出土遺物はコンテナ約 600 箱に再収納した。

出土遺物については事業完了後に和歌山県教育委員会に移管し、調査・整理業務で作成した写真及び図面については当センターにて保管している。



写真 1 調査前の測量



写真 2 表土掘削



写真 3 遺物包含層の掘削



写真 4 遺構の掘削



写真 5 遺構図の作成



写真 6 出土遺物の整理

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

和歌山市の地質は中央構造線が東西に走り、この大断層を境として北と南で大きく異なっている。北側は、礫岩・砂石・泥岩等の堆積岩層で構成される和泉層群、南側は結晶片岩を主体とする三波川変成帶である。

紀ノ川は、この中央構造線に沿うように西流して紀伊水道に注ぎ、河口域に和歌山平野を形成している。和歌山平野は縄文時代前期（約6000年前）頃の縄文海進頂期には、奥深い内湾となっていました。紀ノ川は日前宮の東にある岩橋付近で海に注いでいた。また、縄文海進以降から約2000年前にかけて、磯の浦付近から南東の雑賀方面にかけて砂州が形成され、湾の口は和歌浦付近で開くようになる。

この砂州はのちに現在の和歌山市街地の基盤をなすもので、規模は最大で幅約2km、延長10km以上にわたって確認されている。縄文海進以降、海面の低下とともに紀の川の堆積作用が進み、湾であった部分が陸化され三角州が発達する。古代までの紀ノ川の本流は、梶取付近で蛇行して現在の土入川・和歌川に沿うようなかたちで和歌浦付近に注ぐようになったとされる。これに伴って、沿岸には新たな砂州が形成され海岸線は西側に寄るが、これが昭和40年頃まであった水軒浜の原形となる。

古代から中世頃になると、紀ノ川の本流は先に形成された砂州を突き抜けて、雑賀先北側の大浦付近に注ぐようになる。この名残が現在の水軒川で、当時の河道は、明治期の地図を参照すれば河口付近から水田となっている箇所をたどることで復元することができる。中世後半頃になると、紀ノ川は海岸部の砂州を突破して、ほぼ現在の位置になったとされる。

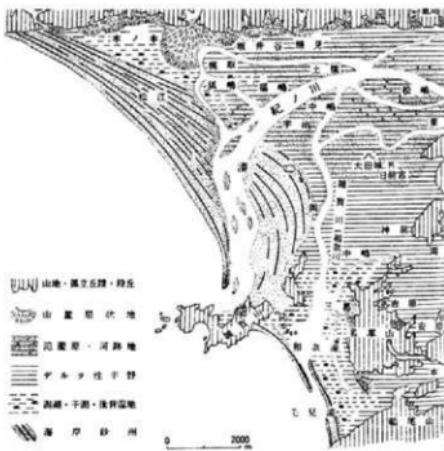


図3 和歌山の地形環境・中世（註1）

第2節 歴史的環境

和歌山城は、和歌山平野のはば中央部、和歌川左岸の岡山を中心に所在している。この岡山は、三波川変成帶の岩山であり、標高およそ45mの独立した丘陵状をなしている。和歌山城の中核となる天守閣および本丸は、この丘陵部に置かれ、周囲の砂丘部分を形成して二の丸、西の丸、砂の丸、南の丸などを配し、北から東側の砂丘および砂丘後背地に三の丸を置いている。各区画は高い石垣や堀を巡らせて防衛しており、三の丸の外堀に繋がる和歌川や紀ノ川も堀の機能

を担っていたと考えられる。さらに城の南側には寺町を置き、手薄となるこの方面的防御としている。

城下町の町割りは正方形を基本に行われており、城下町の範囲としては、紀ノ川一真田堀一和歌川一新堀川に囲まれた地域がおおよその範囲と考えられる。

なお、和歌山城の名は、城のある岡山がなまつとも、古代よりの景勝地である和歌浦と岡山を合わせたとも伝えられている。

この地に城が築かれるのは、天正 13 年 (1585) の羽柴（豊臣）秀吉の紀州攻めを契機としてのことである。同年 4 月、秀吉は紀州攻めを無事終え、大阪に帰還していったが、弟・秀長に命じて和歌山城の普請に取り掛からせた。その際、太田城の水攻めのための築堤に動員された近在の百姓一万人が、そのまま城普請にかりだされたと言わわれている。

秀長はその後、四国に出陣して、さらに大和郡山城に入ったため、築城後の和歌山城には家臣の桑山重晴が城代として在城した。

この桑山氏時代の城郭についての史料はないが、現在の本丸・二の丸部分に見られる緑泥片岩を用いて野面積みをしている部分が、その草創期のものと考えられている。

その後、慶長 5 年 (1600) に閑ヶ原の戦いで軍功のあった浅野幸長が入城する。幸長は、三十七万石の大名にふさわしい居城とするため、和歌山城の大改修に取りかかった。

これまで青石（緑泥片岩）を用いていた石垣も強固で見栄えのよい和泉砂石とし、天守も基壇上に大天守・小天守・角櫓・多聞櫓を並べる連立式の天守閣とした。また、二の丸・三の丸大手道をつくるなど城郭全体の改修をおこなうとともに城下町を整備するなど、その後の和歌山城の原形をつくったと言われている。

この浅野氏の在城期間は短く、元和 5 年 (1619) に安芸（広島）に転封となり、かわって家康の十男徳川頼宣が新しい紀州藩主として入城する。頼宣は、幕府から特に城の増築を許可されて、城を南方と西方に拡張するとともに、本丸の拡充や庭園を作るなど名実ともに和歌山城を紀州徳川家繁栄の礎とした。こうした中で、城下町もしだいに整備され、当初、町屋と武家地が混在していたものが、元禄年間までに大きく八区域に分かれ、宇治・広瀬・吹上・岡といった武家屋敷地と大部分が町屋となる内町・北新地・新町・湊となって完成する。また、諸方へ通じる街道も京橋北詰を基点として整備された。城下町の人口について言えば、前述の浅野氏時代では二万人ほどであったと推定されているが、元禄年間には六万人余り、幕末には 9 万人余りと推定されており、徳川御三家のお膝元として繁栄していたことがうかがわれる。

この和歌山城も諸藩の例に漏れず、明治 4 年の廃城令によって城内のほとんどの建物が解体され、城城は官地となるか民間に払い下げられた。ただ、天守閣や一部の門は残され、明治 34 年 (1901) 以降は本丸、二の丸一带は和歌山城公園として一般に公開されるようになった。

第二次世界大戦中の昭和 20 年 (1945) 7 月 9 日夜、アメリカ軍による大規模な戦略爆撃（和歌山空襲）によって和歌山市街地の大部分とともに天守閣も消失した。現在の天守閣は昭和 33 年 (1958) に復興再建されたものである。

第3節 周辺の遺跡

紀ノ川左岸の和歌山平野にある原始・古代の遺跡は、ほとんどがJR和歌山駅から東側の平野部から岩橋山塊にかけて展開している。縄文時代の遺跡としては、中期から晩期にかけての貝塚で、国指定史跡となっている鳴神貝塚がよく知られている。弥生時代になると遺跡の数も多くなり、それらの中でも大規模な環濠集落と考えられている太田・黒田遺跡は、和歌山平野の拠点的な集落として位置づけられている。

古墳時代に入ると、岩橋山塊には多くの古墳が築かれるようになり、岩橋千塚古墳群・花山古墳群・井辺前山古墳群などの大古墳群を形成している。これらの古墳は、紀ノ川下流域で勢力を誇っていた豪族・紀氏の墓であると理解されており、山麓に展開する鳴神地区遺跡群などとの関わりが考えられる。

古代では、先述した太田・黒田遺跡や鳴神地区遺跡群で多くの遺物が出土しており、遺物の特異性などから、官衙的な施設があったと考えられている。

鎌倉時代から室町時代にかけても、太田・黒田遺跡や鳴神遺跡群のほか秋月遺跡などから当該期の遺物が多数出土している。戦国期になると、太田党が太田城を築き、紀ノ川下流域の土豪集団である雜賀衆が和歌川河口から雜賀崎にかけて多くの砦を構えたとされる。これらの中で、土橋氏が構えた吹上砦が、後に和歌山城が築かれる岡山の地にあったとする説がある。本願寺と結



図4 周辺の遺跡（註2）

んで織田信長や羽柴秀吉に敵対した太田党・雜賀衆であるが、天正13年には秀吉の紀州攻めにより太田城が水攻めされることになる。この時に秀吉が築いた堤とされているのが、出水に残されている。

江戸時代になると歴代の紀州藩主は、和歌山城下に清遊の場あるいは隠殿としての館を設けており、これらには湊・浜・吹上・西浜御殿がある。

和歌山城下町の南端は、狭義の解釈では新堀川までと考えられるが、広義の解釈をすれば和歌川河口の和歌浦まで広げることができる。ここは東西にのびる天神山などが和歌山平野の南を塞いでおり、その南麓には徳川家康を祀る紀州東照宮や徳川家以前に紀州藩主であった浅野幸長が再興した和歌浦天満宮が鎮座している。

城下の西は海となるが、江戸時代になり海岸線に沿って水軒堤防が築かれる。この堤防は、近年の発掘調査により精巧な技術でつくられた石積み堤防であることが判明している。防潮・防波の目的でつくられた堤防とされるが、城の石垣を劈開させる様は、城下の西端を守り、海上を行き交う船上人を威圧するものであったと理解することもできる。

第4節 調査地点の環境及び屋敷地の変遷

和歌山城の本丸・二の丸等の中核部分とそれらを囲む内堀の範囲は、昭和6年に国史跡に指定されており、家臣の屋敷地である三の丸や昭和になって埋め立てられた外堀（西汐入川・広瀬川）

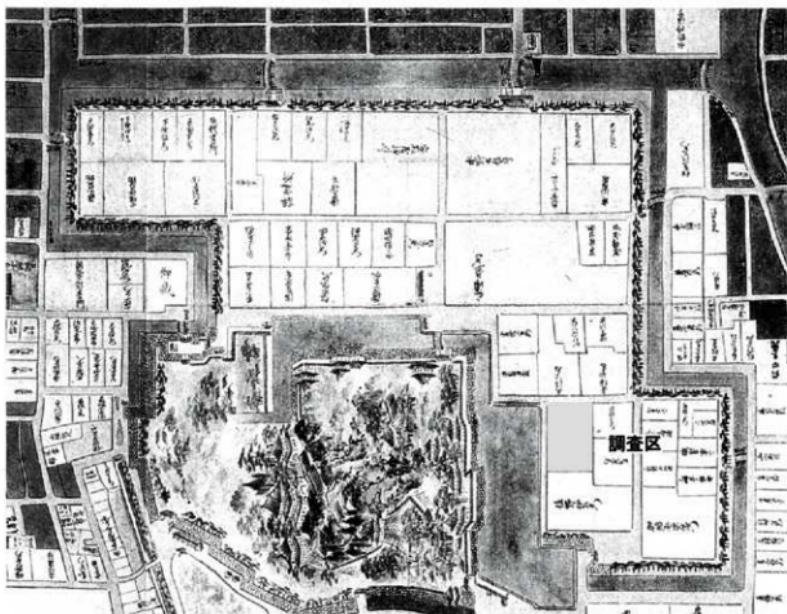


図5 和歌山城下町絵図（註3）

までの範囲については、周知の埋蔵文化財包蔵地「和歌山城跡」とされている。

三の丸は和歌山城の北側から東側にかけて位置し、紀ノ川と和歌川を結ぶ運河である堀川、西汐入川、広瀬川からなる外堀と内堀に囲まれている。江戸時代の絵図や「紀伊続風土記」などから外堀の内側に沿って松を植えた土塁が巡っていたことが窺われる。

三の丸の地形は西側が高く、東側が低くなってしまっており、現地表面における比高差は約3mを測る。この高低差は三の丸が砂丘のピークから後背地にかけて立地することに起因し、三の丸造成前の高低差が度々おこなわれる整地によっても大きく改められるることはなかったようである。

城下と三の丸との出入り口としては、京橋口、湊橋口、広瀬口、北中橋口、三木橋口、東中橋口があり、それぞれに城門がおかれていた。三の丸と城の中核部との行き来は、二の丸間を繋ぐ一の橋のみとなっている。初期の城正面は、城の南東部にあったとされるが、その後、北側の京橋口が正面となり、一の橋が大手門となる。京橋口から一の橋にかけては、紀州徳川家の御付家老で新宮藩主水野氏・田辺城主安藤氏や、家老である三浦氏の大きな屋敷地が配置されている。

今回の調査区は、三の丸の南東部、内堀を挟んだ本丸の東側に位置する。調査区の大部分は、江戸時代に描かれた絵図からうかがうと、武家屋敷地4区画に該当する。各屋敷地の大きさは、江戸期を通して大きな変化は認められないが、当然ながら当主は変わっており、江戸時代の各期に描かれている絵図を参照にすれば、図6として明示したような変遷を辿ったことが判明している。また、幕末期の該当当主の俸禄もわかつており、それによれば300石から500石取りであり、有力家臣の屋敷地であったと言えよう。

第5節 既往の調査

これまでの史跡和歌山城の発掘調査は、和歌山市教育委員会（以下、「市教委」）・和歌山市文化体育振興事業団・財団法人和歌山市都市整備公社（以下、「市事業団」）で37次にわたって行われ、和歌山城跡の発掘調査としては、市教委・市事業団で19次、当文化財センターで5次にわたっておこなわれている。このほか和歌山城下町の調査としては、「鷺ノ森遺跡」の範囲内で市事業団によって13次にわたって実施されている。

和歌山城跡の発掘調査は、市教委・市事業団・当文化財センター

17世紀中頃

加納十兵衛	三浦助左衛門
伊藤久兵衛	山名八左衛門



18世紀初頭頃

水野次郎右衛門	加納兵左衛門
伊藤楠之丞	山名八左衛門



18世紀末～19世紀初頭頃

向笠伴右衛門	岡部小左衛門
伊藤又兵衛	豊崎五郎左衛門



19世紀初頭頃

向笠三之助	岡部小左衛門
伊藤久兵衛	豊崎半之丞

図6 屋敷地変遷図

によりこれまで3,000 m²ほどの範囲で実施されているが、総面積（約430,000 m²）に比べれば極わずかにすぎず、その内容についてはそれほど解明されていないと言える。

以下、和歌山城跡についての既往の調査概要をまとめておくが、市教委・市事業団については「市」、当文化センターについては「県」として次の表記をおこなう。また、市教委・市事業団の調査概要については、既に公刊されている17次までの収録であることをあらかじめことわつておく。

市1次：1991年度に砂の丸の北側にある勘定門の北方で、ビル建設にともない市教委によって調査がおこなわれた。調査面積は10 m²。遺構は検出されなかつたことから、埋め立てられた外堀・西汐入川に相当するものと考えられる。

市2次：1991年度に市1次調査の東隣で、公共施設の建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は24 m²で、市1次と同様に遺構は検出されず、調査区が堀内に相当するものと考えられる。

市3次：1994年度に和歌山城の南東で、車両入口造成に伴って市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は30 m²で、屋敷地を画すると考えられる石組み溝が検出されている。江戸時代に描かれた絵図では、調査区付近に百軒長屋が存在したことがうかがえ、『紀伊名所図会』にある「岡口御門辺の図」では百軒長屋らしき敷地を画する石組溝が描かれている。調査で見つかった溝は、これに相当すると考えられている。

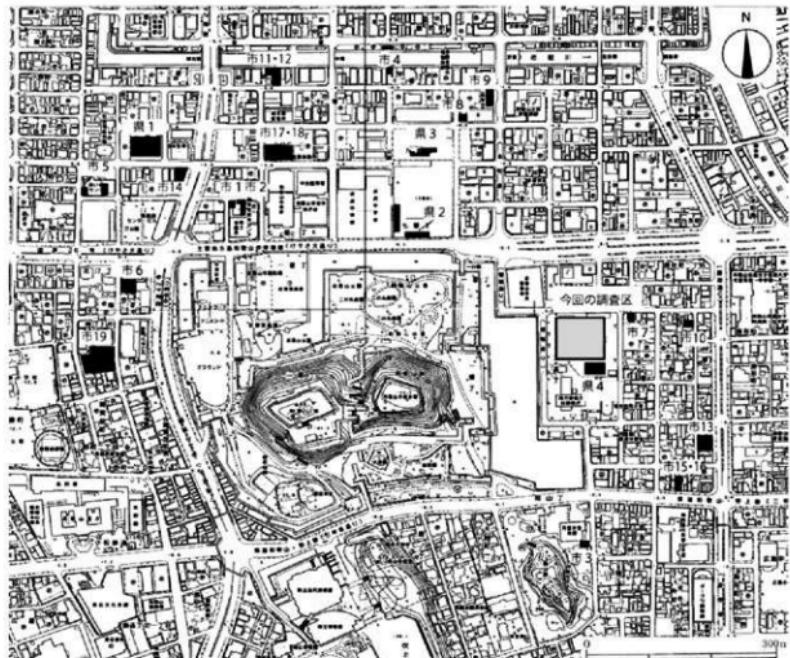


図7 既往の調査区

市4次：1994年度に市堀川に沿った中橋御門の東で、事務所建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査面積は60m²で、スロープをもつた石敷施設が検出されているが、これは明治以降第二次世界大戦まで使われた舟入遺構と評価されている。調査区は外堀に沿い、土塁が存在した箇所に相当することから、江戸時代の遺構が確認できなかったと考えられる。

市5次：1995年度に三の丸の西端で、公共施設建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。開発予定地内に2箇所のトレンチを設定し、調査面積は90m²である。遺構は検出されず、市1・2次と同様に調査区が埋め立てられた外堀・西汐入川の堀内に相当したためと考えられる。

市6次：1996年度に砂の丸と堀を挟んだ西方で、事務所ビル建設に伴い市事業団によって調査がなされている。調査面積は90m²である。調査地は江戸時代に描かれた絵図などから武家屋敷があったことがうかがえる。調査地によって江戸時代中期・後期、江戸時代後期から第二次世界大戦期に至る3時期の遺構面が確認され、建物基礎や石列・石垣などが検出されている。

市7次：1996年度に三の丸東で、医院の建設に伴い調査がおこなわれている。調査面積は81m²で、武家屋敷に伴う江戸時代後期と末期の2時期の遺構面が確認され、礎石の根石や石組溝などが検出されている。

市8次：2001年度に三の丸京橋御門の南側で、店舗の増築に伴い市事業団によって調査がおこなわれた。調査地は紀州徳川家付家老水野氏の屋敷地西端付近で、調査面積は70m²である。江戸時代前期・中期・後期の3時期の遺構面が確認され、規模が大きい礎石建物をはじめ石組溝などが検出されている。

市9次：2002年度に三の丸京橋御門の南側で、事務所ビル建設に伴い市事業団によって調査がおこなわれている。調査地は市8次調査地北東隣接地で、同様に水野氏の屋敷地に相当する。調査面積160m²で、江戸時代前期・中期・後期（2面）の計4面の遺構面が確認され、それぞれの面から礎石建物や石組溝などが検出されている。

市10次：調査区は三の丸の屋敷地に相当する箇所であり、事務所建設に伴い約11m²の調査をおこなった。遺構面については確認できなかったが、包含層から江戸時代の土師器・堺捕鉢などが検出されている。

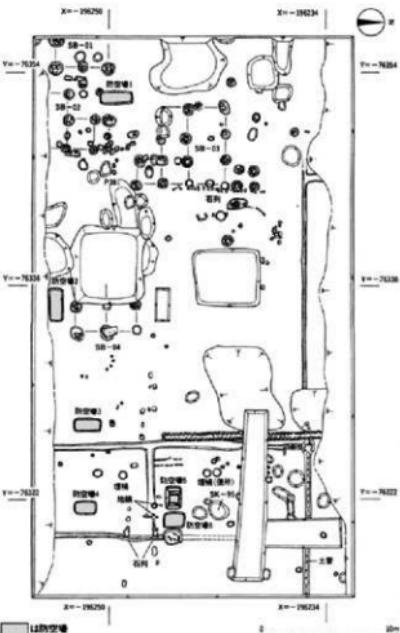


図8 県1次調査第1遺構図

市 11・12 次：調査地は、和歌山城の三の丸に位置する北外堀に面した土塁と推定される場所である。5 m²ほどの小規模な調査であったが、ここでは北外堀の南側に築かれた土塁の一部が検出されている。

市 13 次：調査地は三の丸の東外堀に面した箇所である。調査面積は約 23 m²で、わずかに土塁の可能性のある盛土が確認された。

市 14 次：調査地は三の丸の西外堀に面した箇所である。約 6 m²の調査であり、既存建物の基礎により搅乱を受けていたため遺構は確認されていない。

市 15 次：調査地は、三の丸の外堀に面した箇所である。江戸時代の遺構面が 2 面確認され、遺物としては、近世の土師器小片が検出されている。

市 16 次：前述の 15 次調査を受け、本発掘調査が実施されたものである。調査では、浅野期に遡る石組み暗渠、井戸などが検出された。また、和歌山城以前、鎌倉時代の粘土探掘穴と考えられる土坑群が検出されており、土地利用の一端を垣間見る資料を得ている。

市 17 次：調査地は三の丸に該当する箇所であり、事務所の建設に伴い、約 16 m²の内容確認調査が実施された。調査では、一部近代の搅乱により破壊されているものの周囲には江戸時代の遺構面が展開していることが判明した。出土遺物としては、近世の国産陶磁器がある。

県 1 次：1996 年度に三の丸西部で、県営団地建設に伴い当文化財センターが調査をおこなった。調査面積は 990 m²で、江戸時代前期・後期、明治から第二次世界大戦期の 3 時期の遺構面が確認され、土塀基礎や礎石建物などが検出されている。

県 2・3 次：2001・2003 年度に三の丸京橋御門から一の橋門に至る大手道に沿う場所で、大学の跡地利用に係る調査を当センターがおこなった。調査区は大きく A・B の 2 つの地区にわかれ、A 区は渡辺氏の、B 区は御付家老安藤氏の屋敷地に相当する。調査面積は 712 m²で、江戸時代前期・中期・後期、明治から第二次世界大戦期の 4 時期の遺構面が確認され、礎石建物や井戸などが検出されている。

県 4 次：2007 年度に和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴って当センターが調査をおこなった。調査面積は 636 m²である。調査地は本丸の堀を隔てた東側、今回の調査の南東部に隣接する箇所である。上級家臣の屋敷地に相当する。調査では、中世の遺構面 1 面と近世の遺構面 4 面が確認されており、近世の屋敷の境界を画する土塀の基礎のほか井戸・石組溝などが検出されている。中世の遺構面では、柱穴や土坑など一般集落に係るものと思われる遺構が検出されており、和歌山城が築城される以前の資料として着目される。

第3章 調査の方法

第1節 調査の方法

発掘調査は原則的に当センターの定めた『発掘調査マニュアル』に準拠して行った。

調査は建物部分と周辺付属施設部分を対象とし1区・2区・3区に分割して行った。このうち周辺付属施設部分の西側にあたる1区と東側にあたる2区を7月から10月までに調査した。その後、建物本体部分にあたる3区を10月～2月に調査した。

1区・2区の掘削は、工事掘削深度に応じた遺構面まで調査を行った。現代造成土（第0層）は機械で掘削し、遺物包含層（第1層から第4層）及び遺構は人力で掘削・検出を行った。

1区・2区については遺構面の掘り分け及び通路・土砂置き場の確保の為、始めに第4・5遺構面まで調査が必要な調査区北半の小型構造物部分（1区北半①～⑫：122m²）、次に1区・2区の南半配管部（242m²）、最後に1区・2区の北半配管部（368m²）の順に調査を行った。機械掘削土は重機で、人力掘削土はベルトコンベアを使用して排土し、調査終了後に埋め戻した。

3区の掘削は、現代造成土（第0層）は機械で掘削し、遺物包含層（第1層から第4層）及び遺構は人力で掘削・検出を行った。また調査区の隅と3箇所の下層確認トレンチで標高1.0m付近まで掘り下げを行った。機械掘削土は重機で、人力掘削土はベルトコンベアを使用して排土した。調査区3は機械で標高1.6mに整地して、排土は場外搬出・処分した。

写真撮影及び図化作業は、測量基準点の設置及びラジコンヘリコプターによる航空写真撮影・測量図化作業を専門業者に委託して実施し、その他については文化財センター技術職員が行った。1区・2区は1面分のみ航空写真撮影を行い、3区は第1～5面について航空写真による1/50の測量・図化を行った。1区・2区の平面図、3区の土層図及び遺構図については、文化財センターの技術職員・調査補助員が1/10・1/20で図化作業を行った。

現地調査と並行して、出土遺物の洗浄作業等の応急遺物整理を行った。出土遺物は1区で155箱、2区で24箱、3区で418箱、計597箱出土している。陶磁器と瓦が多く、石製品・金属製品・木製品・骨類・貝類も若干出土している。出土遺物整理は洗浄・注記・接合・補強・復元・実測・トレース・組版等を行っている。復元は土器補修材のキューテックスを使用し、木製品の一部は吉田生物研究所に保存処理を委託した。

第2節 地区割りと座標

1 地区割り

調査区は、新しく建てる建物及び周辺の配管部の形状に合わせて設定した。建物本体部分を3区とし、建物本体より西側の小型構造物設置部と配管部を1区、東側の小型構造物設置部と配管部を2区とした。調査区は、最高裁判所より提供されたCAD図面に基づき座標地を割り出し、現地に杭を打設した。調査区内に既存の構造物ないし樹木がある場合は、今回の調査区に含めるかどうか確認したうえで、必要に応じて範囲を変更して調査を行った。

1区・2区は細分したグリッド・トレンチ名を付けているが、小型構造物を埋設する地点については①～⑫のグリッド、配管部についてはA～Hのトレンチ名および枝番号を付けている。このうち掘削深度の深い1区北半のグリッドについては先行して4～5面の調査を行った。A・D

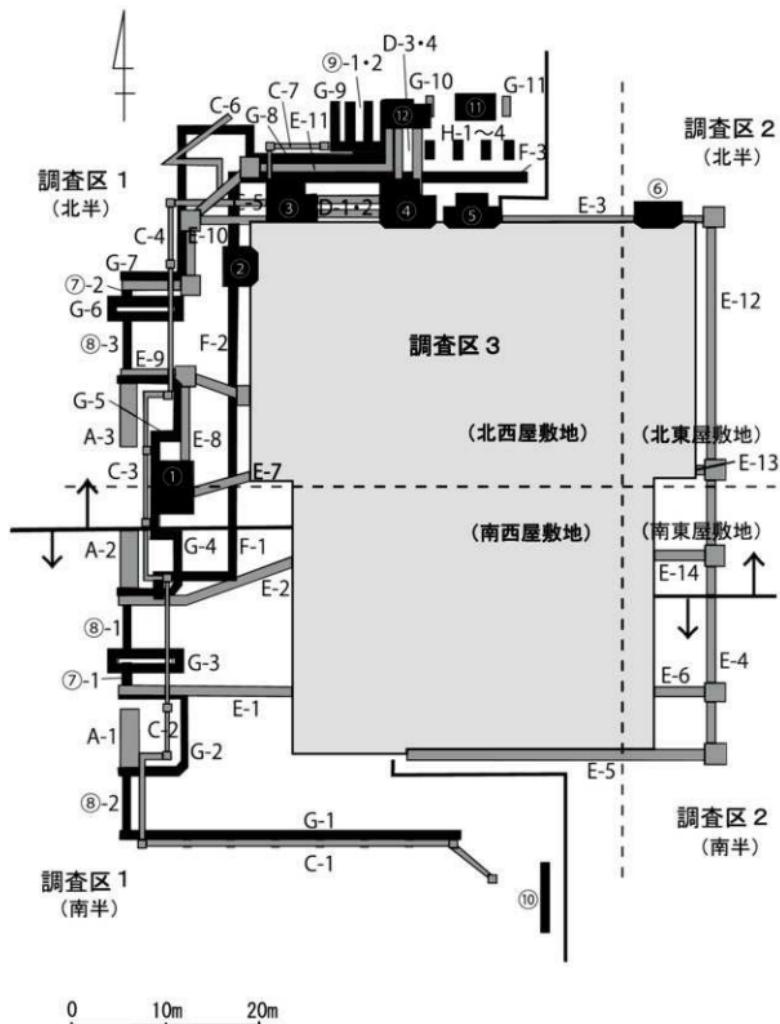


図9 調査区名の設定状況

～Hトレチは幅1mで、Cトレチは幅0.7mである。3区は、旧裁判所建物による攪乱を広範囲に受けしており、第1面は残存部分を3a東区・3a西区として調査し、第2面以降は全面調査とした。

1区・2区の調査区細分名称は図9のとおりで、調査区によって掘り下げた深さが異なっている。3区については、4mメッシュの杭を打設して座標管理・測量・遺物取り上げを行い、報告書掲載時には必要に応じて武家屋敷地の区画ごとの区分を用いた。

2 座標と標高

現地作業の基準とするため、世界測地系による国土座標の3級基準点を1か所、4級基準点を2か所設置するとともに、標高を求めた。

当調査では方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面からのプラス値を使用した。測量・遺物取上げ方法については、調査区に応じ別個の方法をとった。

1区・2区では調査区設定時に打設した杭に世界測地系による座標値を与えて、遺構実測の基準とした。遺物の取上げは、調査区あるいは調査区内を東西南北に区画して取上げ単位とした。

3区では基本的に航空測量による図化を行っており、個別の遺構図作成についても、平面直角座標系（世界測地系）第IV系の座標軸を使用した。遺物の取上げについては、座標をもとに設定した大区画・小区画を用いている。100m四方の区画を1単位とした大区画では、今回の調査地は大区画は北半がI 12、南半がI 13にあたる。各大区画内には4m四方の区画を1単位とした小区画を設定しており、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。なお、当調査の小区画名は3区の遺物取上げのみに用いており、日本測地系に基づく区画割を使用した裁判所南別館建設地に伴う発掘調査（2006年度調査）と基本的に対応していない。

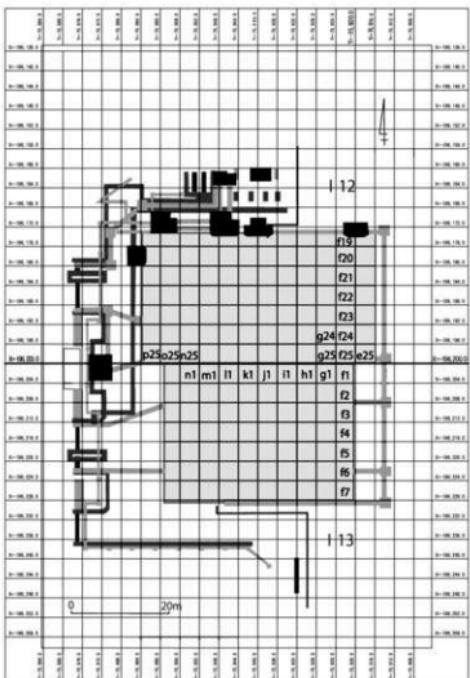


図10 座標と大区画・小区画の設定状況

第3節 基本層序と遺構面

1 基本層序

今回の調査で確認した基本層位は以下の通り。

O層は、近現代の整地層。戦後の整地土をO a層、和歌山大空襲の焼土片付け層までをO b層、明治19年の和歌山地方裁判所建設までをO c層と細分する。O c層では玉石、O b層では焼土、O c層ではコンクリート片が混じる。

I層は、江戸時代後半の遺物包含層。褐色砂質土をベースとして、シルトブロックの混じる土と混じらない土がある。

II層は、江戸時代前半～中期の整地層でシルト質土と砂質土の混土で、シルト質土の割合の高いものと、砂質土の割合の高いものに分層できた。III層の砂にIV・V層のシルトを混ぜて屋敷地の地盤改良をはかった土と評価でき、II層の下面には多数の土取り穴とみられる遺構が確認される。部分的に焼土混じりの層と水成堆積を示す層が確認され、複雑に堆積している。

III層は、自然堆積の砂層でごく微量中世の遺物が含まれている。古代末から中世にかけて紀ノ川の流路が調査地の東側から北側へと変化したものと考えられており、それに伴い堆積した砂と考えられる。III層上面より少し下にきわめて不明瞭な遺構形成面があるものと考えられ、中世後半頃の土壌墓群が形成されている状況が確認された。

IV層は、中世前半頃に形成されたと考えられる遺物包含層で、砂混じりのシルト質土である。ごく微量の土師質細片・瓦器細片が含まれる。

V層は、比較的綺麗のあるシルト質土。上面で黒色土器細片と土師質土器細片が確認できる。地山として扱ったが、広範囲に掘削するとV層中にもごくわずかに土師質細片が含まれるほか、III～V層にはごく微量の須恵器・埴輪片が含まれていた。

2 遺構面

各遺構面は各基本土層の上面にあたり、第1面はI層上面で検出した。

第1面は19世紀後半を中心とする遺構面である。1区・2区及び3区の西側では江戸時代後期から幕末頃と考えられる遺構が多く残存したが、3区の東側では明治19年に建設された裁判所の建物跡に関連する遺構が大半を占めている。1・2区では年代不詳の礎石及び昭和の防空壕、3区では明治時代の裁判所建物基礎が確認された。

第2面はI層の堆積であるやや黒ずんだ褐色砂質土とシルトブロック混じりの砂質土を掘削したほか、裁判所建物基礎周辺では擾乱土を除去した標高約2.7m前後の高さで遺構を検出した。II層の堆積は東側で厚く、西側では薄い傾向があり、複数の時期の遺構が同時に検出されている。調査区東側では19世紀の遺構を多数検出したが、調査区西側では擾乱土を除去すると17世紀から18世紀にかけての遺構が多く確認された。

第3面は砂の堆積であるIII層の上面で遺構検出を行った。標高は2.4～2.7mほどで、調査区の西側がやや高くなっている。第3面では、城下町建設時の造成にかかるシルト混じりの整地土がおおよそ無くなる高さで遺構の検出を行った。東半では多様な整地土が混在して厚く堆積しており、整地土上で検出された遺構を対象に調査を行った。

標高2.3～2.6mでは貝殻廃棄ピット・土坑、標高2.4m前後では土壌墓群を確認した。貝殻

廃棄ピットの一部は第3面で検出されているが、ほとんどの遺構は第3面と第4面の間の不明瞭な遺構面に帰属する遺構である。

第4面はシルト質の強いIV層上面で遺構検出を行った。標高約2.0m前後でIII層と同様に、遺構面には遺物はほとんど含まれておらず、土師質土器と瓦器の細片が微量出土している。3区南西部で瓦器細片の混じる土坑群を検出している。

第5面は純粹なシルト質土の堆積であるV層上面で遺構検出を行った。3区南西の落ち込みでは黒色土器片が一定量を占めており、平安時代末頃に機能していた面と推測される。

V層にはわずかながら土器細片が含まれることと、和歌山平野の近年の調査事例を考え合わせると、標高1.0m程度に古墳時代面のある可能性が考えられる。埴輪片が微量存在することから、当該地は墓域に近い場所であったものと考えられる。

なお各遺構面において、平面検出時に輪郭の判然としないものについては、遺構ではなく整地土として扱った。整地土下端の窪みや整地土の下に残存していた遺構は本来の遺構面より下層で検出し調査している。

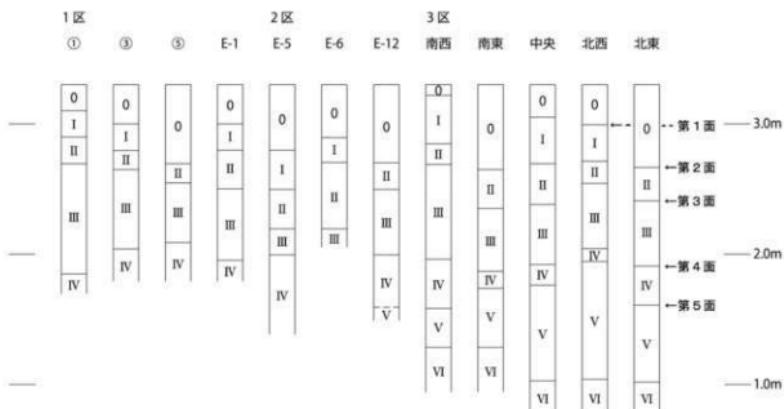


図11 調査区土層柱状図

第4章 遺構

1～3区の計約2,760m²を対象に、3～5面の調査を行った。述べ調査面積は約11,000m²である。11世紀から19世紀までの遺構があり、上層から掘りこまれた防空壕や多数の整地跡も同時に確認されている。主な調査対象は江戸時代の4区画の屋敷地に伴う遺構であり、第2面で主に江戸時代中期から後期、第3面で主に前期から中期の遺構を確認した。

第1節 1区

1 1区北半グリッド（①～⑤・⑪・⑫グリッド）

調査対象の西側配管予定地を1区とし、1区の中で深く掘り下げる必要のある7地点について、最初に調査を行った。1辺3～5mの不整形方の調査区が多いため、これらの細分した調査区名を1区北半の「□□グリッド」と呼称した。4面ないし5面の調査を行い、各調査区ごとに遺構名を通し番号で付けている。本書では主要な遺構についてのみ、内容を記載する。

①グリッド

東西4.4m、南北5.4mのグリッド。5面調査し、遺構数は27。

屋敷地境界施設 砂層を幅0.9m、深さ1.1m掘削し、粘質のシルトブロックで埋める。第1面はその上面に東西方向の溝2条と礎板状の石を配した状態で埋まっている。

45 土坑 調査区南東側の第3面で検出した土坑で、瓦質土器・陶器等（1～5）が出土した。

②グリッド

東西3.5m、南北4mのグリッド。4面調査し、第1面で礎板のある柱穴等を確認した。

29 土坑 第2面北側の土坑で、東西0.8m、南北2.0m。焜爐・擂鉢等（6～23）が出土した。

69 土取り穴状遺構 第4面で検出。素掘りで湧水層まで達しており、埋土はⅢ層の砂である。

③グリッド

東西5.3m、南北4.4mのグリッド。4面調査し、土坑・ピットを13基確認した。

36・37・62 土坑 第3面で確認した遺構で、Ⅲ層の砂とシルト質土の混ざった土で埋まる。掘削は砂層を抜けて標高約1mのシルト層まで達しており、土取り穴の可能性が高い。

63・64 ピット 第4面の調査区東側で検出したピットで、1.5m離れておおよそ南北に並ぶ。

④グリッド

東西5.8m、南北4.4mのグリッド。上層で第二次大戦に伴う防空壕を確認。

59 土坑 第3面の焼土坑。上層で焼けた石・炭・瓦、下層で土師質の皿と骨片が出土。

81・83・84 土坑列 第4面で東西に並ぶ方形土坑を確認した。1辺約1mで、浅く、無遺物。

⑤グリッド

東西5.9m、南北2.8mのグリッド。上層で第二次大戦に伴う防空壕を確認した。

63 土坑 ④グリッド土坑列の東側延長上で検出された方形土坑。1辺0.8mで浅く、無遺物。

⑪グリッド

東西4.1m、南北1.6mのグリッド。北辺のコンクリート構造物の下で石列と柱穴列を確認した。

⑫グリッド

⑪グリッドの西側に設定した東西4.6m、南北2.3mのグリッド。北辺のコンクリート構造物の下に石列跡、さらにその下で東西方向の柱穴列を確認した。

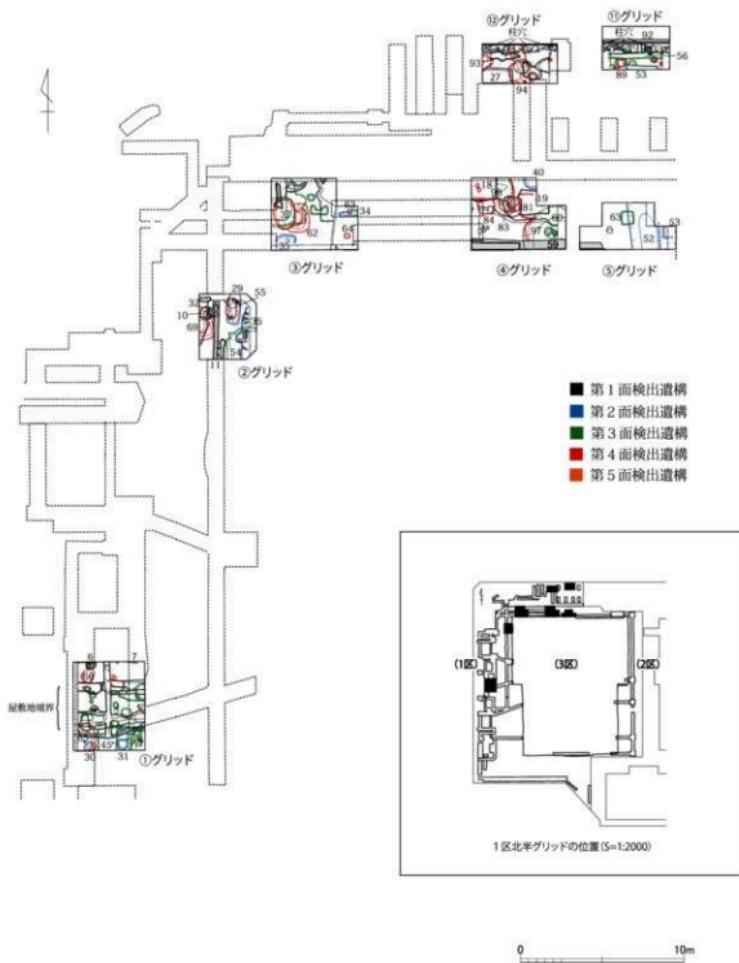
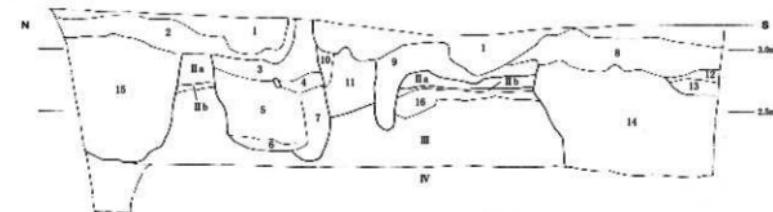


図12 1区北半グリッド平面図

① 東壁



1 玉石

- 2 2.5Y6/1 青灰色砂質土
(炭・砂粒少入る)
- 3 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(シルトブロック瓦砾状)
- 4 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(シルトブロック少量)
- 5 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(5cm 以下のシルトブロック多量に含む)

6 2.5Y6/2 灰黄色砂質土

- (シルトブロックなし・硬土あり)
- 7 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(シルトブロック少)
- 8 2.5Y4/2 オーピー褐色砂質土
(固化した片岩粒多量入る)
- 9 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(シルトブロック大・砂質土若干)
- 10 2.5Y6/2 灰黄色砂質土
(シルトブロック少)

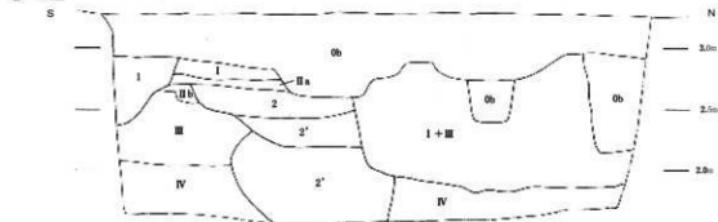
11 2.5Y4/1 灰色粘質シルト

- 12 2.5Y4/3 オーピー褐色砂質土
- 13 灰
- 14 石種み 20cm 大の緑色片岩のみ
- 15 10YR5/3 に似い 黄褐色砂質土
(シルトブロック入る)
- 16 2.5Y6/2 灰黄色砂質土上端土あり

II 10YR5/2 灰黄褐色砂

- (シルトブロック少量)
- II b 2.5Y5/3 黄褐色シルト質土
(砂少)
- III 10YR5/2 灰黄褐色砂
- IV 10YR4/3 に似い 黄褐色シルト

③ 西壁



I 10YR5/2 灰黄褐色砂 (2.5Y5/3 黄褐色シルト質土・砂・炭少量入る)

II Ⅲ+1 層

2' 10YR5/2 灰黄褐色砂

(2.5Y5/3 黄褐色シルト質土・シルトブロック少量含む)

0b 2.5Y4/1 黄灰色 (瓦石なし)

I 2.5Y5/3 黄褐色シルト質土 (砂・炭少量入る)

II a 10YR5/2 灰黄褐色砂 (シルトブロック少)

II b 2.5Y5/3 黄褐色シルト質土 (砂少量入る)

III 10YR5/2 灰黄褐色砂

IV 10YR4/3 に似い 黄褐色シルト

⑫ 北壁



1 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 (礫・玉石混じる)

2 10YR5/2 灰黄褐色砂質土

2' 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (礫なし)

3 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (やや暗い)

4 2.5Y4/3 オーピー褐色砂質土 (礫・粘土混じる)

5 10YR4/2 灰黄褐色砂質土

6 SYRA/6 稼土・礁土・灰

II 10YR5/3 に似い 黄褐色砂質土

III 10YR5/2 灰黄褐色砂

IV 2.5Y4/2 緩灰黄色砂 (炭多量)

0

2m

図13 1区①・③・⑫グリッド壁面土層図

2. 1区北半トレンチ (⑦~⑨トレンチ、A~Hトレンチ)

調査対象地の西側（1区）に計画された配管理設予定地のうち、北半に位置するものをまとめて調査した。調査対象地は幅1.0mと0.7mで細長く、屈曲するもので、「□□トレンチ」という調査区細分名称を付けて調査を行った（別表のとおり）。配管の種類により掘削深度が異なり、遺構検出面数は基本的に3面である。

西側には多数の遺構が残る。北西部下層には貝殻廃棄土坑が多数あり、南西部上層には近代の裁判所の下部構造が残されている。北東側は第二次世界大戦後の整地により荒らされており、遺構が少ない。次に各グリッドの主な遺構について記述する（Bトレンチは調査なし）。

⑧-3 トレンチ

56 土坑 土坑の上層から江戸時代後期の瓦、土坑の下層部分から865桔梗紋軒丸瓦を含む16世紀末の瓦が出土した。2時期の土坑が重なっているものと考えられる。

⑨-1 トレンチ

石敷き ⑩-2トレンチの2方形石組構とG-9トレンチの38石組井戸の間から北辺にかけて検出された石敷きで、水場の範囲を示すものと考えられる。行平鍋蓋片33と染付皿片34が出土している。

⑨-2 トレンチ

2方形石組構 東西推定1.1m、南北1.3m、深さ0.7mで、北西の上端に土管を配して、余水を排出する仕組みとなっている。埋土には19世紀前葉を中心とする陶磁器35～44が廃棄されている。

A-3 トレンチ

87 土坑 西側に面をもつ石組が崩れた状況の遺構。景德鎮の白磁とみられる破片が出土している。

C-3 トレンチ

1面で石敷き遺構が多数検出されている。調査区幅が0.7mということもあり、全体像がつかみづらい。調査区南側で検出された南北方向の石敷きの上には方柱状の加工石が載せられていた。

石組溝 土坑77の北側で検出された東西方向の石組溝。両側面と底石の3石から成る構造をしており、蓋石の存在は不明。

C-4 トレンチ

24 石組溝 G-6石組井戸の西側を北から南方向へ流れる石組溝で、蓋石は確認されていない。幅0.3mで、延長5.5m分を検出した。

C-5 トレンチ

52 土坑 東西2.3mの土坑。暖房具48・49が出土している。

C-6 トレンチ

1区北西部に設定したトレンチであるが、樹木の保護のため掘り下げた範囲は少ない。

C-7 トレンチ

17世紀初頭の遺構やシジミの廃棄土坑が検出された。

D-1～D-4 トレンチ

大規模に戦後の擾乱が入り込んでいる。

E-8・E-9・G-5 トレンチ

73・79・80 土坑 E-8 トレンチを中心広がる径 1 m を超える不整形の土坑。18世紀の遺物が多数含まれている。

石敷き遺構 G-5 トレンチを中心とした幅約 0.7 m、南北 5.3 m の石敷き遺構で、0.9 ~ 1.0 m ほどの間隔で砂岩礎石を配しているものとみられる。北端近くでは一部に玉石と花崗岩を使う。明治時代に建てられた裁判所建物跡の一部と推定される。

37 井戸状遺構 G-5 トレンチの素掘り遺構で、検出面標高 3.1 m、推定径 2.2 m、深さ 1.0 m。下層にある複数の遺構の遺物が混在する。17世紀初頭の遺物が多い。

E-10 トレンチ

42 石溜り・53 土坑 E-10 トレンチの屈折部で隣接する石溜りと土坑で、42 石溜りは瓦も混じっている。

E-11 トレンチ他 (F-3・G-8 トレンチ)

1 区北側で南北に並ぶ 3 本の調査区で、一番長い F-3 トレンチは東西長 31.8 m ある。西半は遺構面の残存状態が良好で、3 面に相当する遺構面が 2 面確認された。標高約 2.6 m の面ではシジミの廃棄土坑が多数確認された。標高 2.4 m の面ではピットや土坑が確認された。唐津や志野の茶碗、焼締の水差し等が出土しており、15世紀末から 16世紀初頭にかけての遺構群と推定される。東半は近現代の擾乱が多い。

23・25・26・31 土坑 シジミの廃棄土坑群。径 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m。

4・18 ピット 天目茶碗片などが出土。

36 土坑 検出面標高 2.3 m で、径 2.0 m、深さ 1.2 m の土坑。

F-2 トレンチ

19 土坑 石組井戸の北側にある土坑。

23 石組枡状遺構 東西 0.8 m、南北 0.7 m、深さ 0.6 m で、西辺には切石を配する。

64 石組井戸 緑色片岩で組んだ井戸。径 0.7 m、深さ 1.2 m 以上で、湧水が激しく底までは掘削できなかった。北側に踏み石状の板石がある。

土塙基礎（屋敷地境界）

G-6 トレンチ

石組井戸 掘り方径約 1.5 m、深さ 1.4 m 以上の崩れた石組井戸。緑色片岩を用いている。中国製の輸入磁器の破片が出土している。

G-9 トレンチ

1 枕状遺構 38 石組井戸の北隣にある径 0.7 m、深さ 0.25 m の土坑で上面に石を並べる。

38 石組井戸 内径 0.7 m、深さ 2.8 m 以上に渡り、緑色片岩を積み上げる。17世紀初頭頃と推定される唐津焼片が出土している。

G-10・11 トレンチ

1 区⑪・⑫グリッドと同様の遺構が確認される。

H-1 ~ H-4 トレンチ

戦後の擾乱が多い。H-3 トレンチでは土坑が若干確認される。

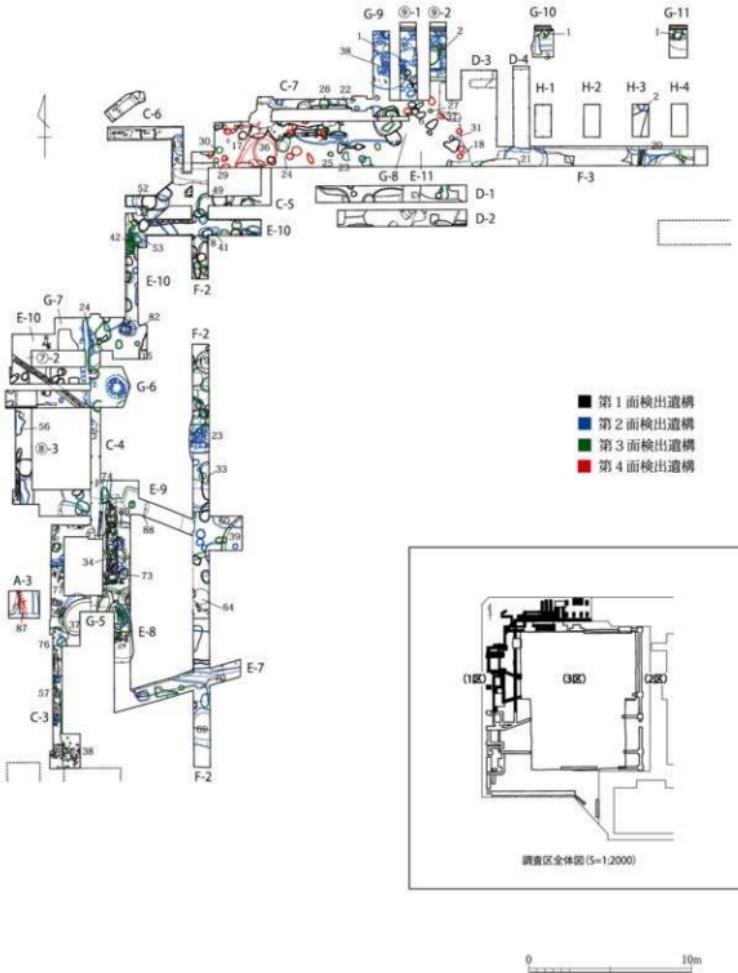


図14 1区北半トレンチ平面図

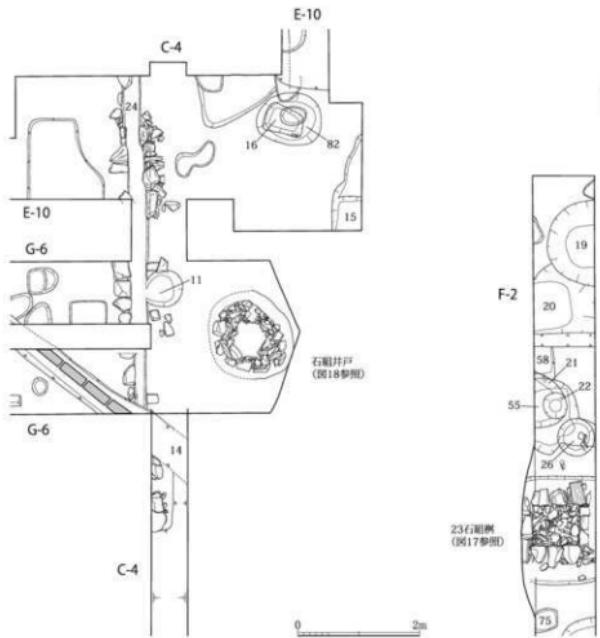
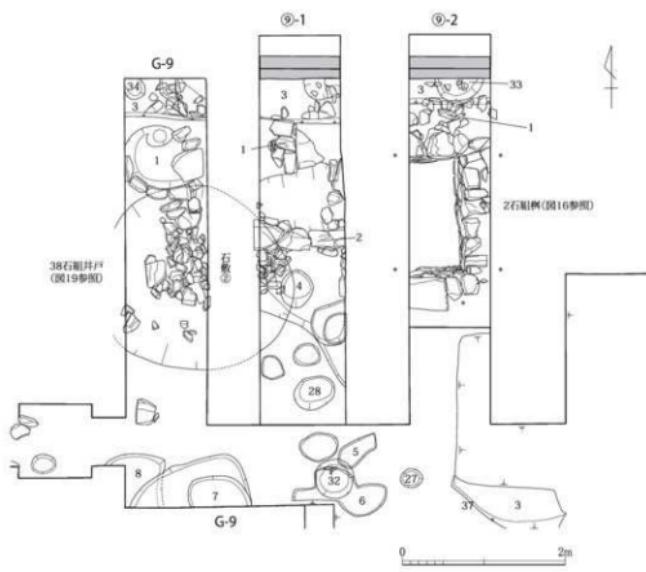
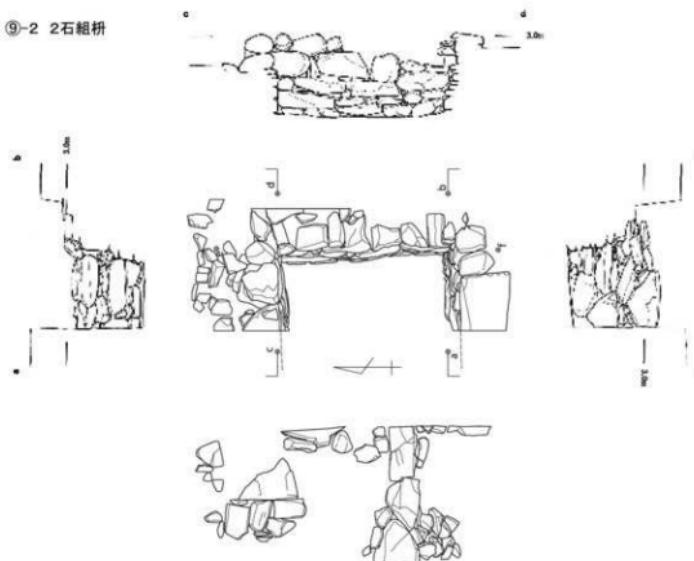
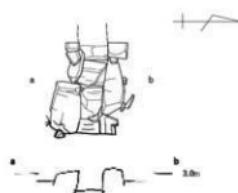


図15 1区北半遺構集中部平面図

⑨-2 2石組枠



C-3 石組溝 (77 土坑北側)



F-2 西壁 屋敷地境界

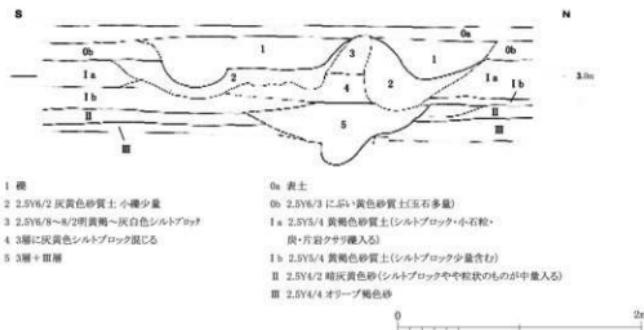
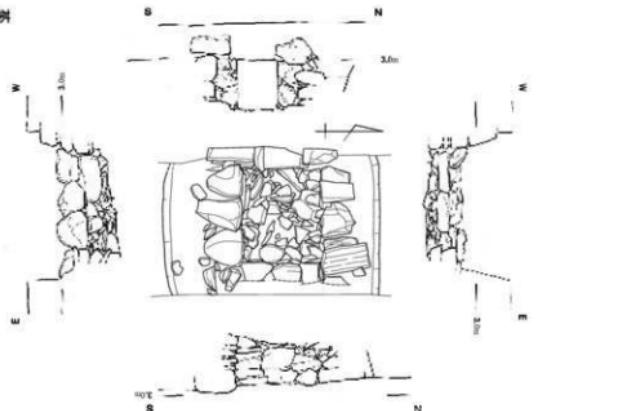


図16 1区北半遺構図 1

F-2 23石組柵



F-2 64石組井戸

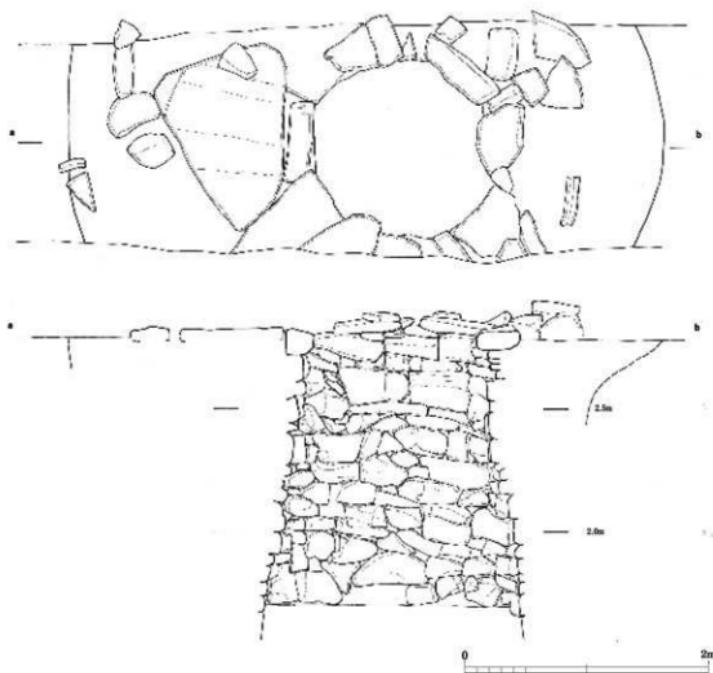


図17 1区北半遺構図2

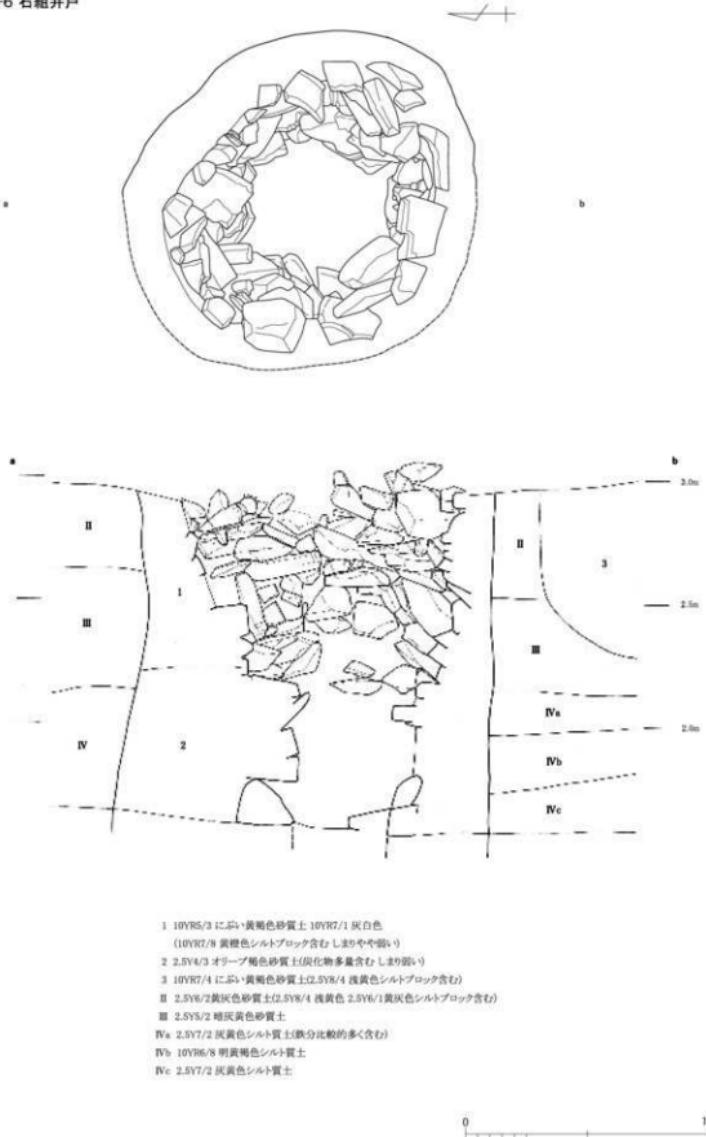


図18 1区北半遺構図3

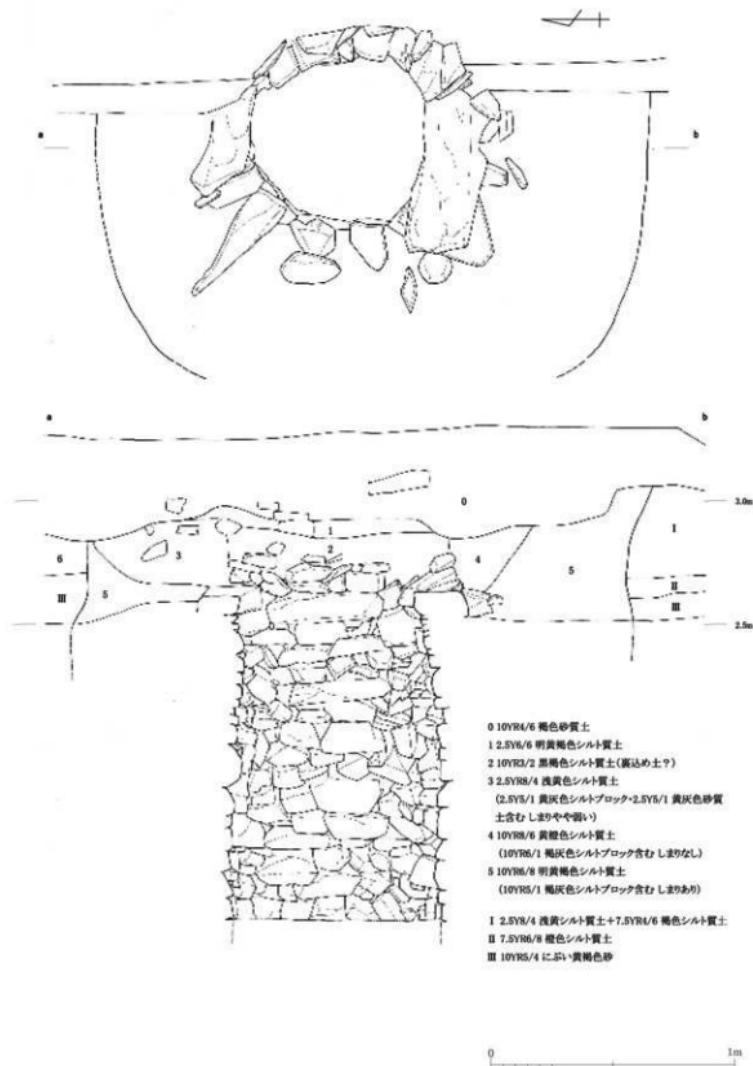


図19 1区北半遺構図 4

3. 1区南半トレンチ (⑩トレンチ、A・C・E~Gトレンチ)

旧地形の砂堆が西側に向かって高くなっている。1面から3面までの堆積が少ない。南側では上面が近現代に擾乱されている。3面の調査を行った。

⑩トレンチ

戦後の擾乱土が多量に入る。石臼が出土している。

A-1 トレンチ

近現代の表土を除去すると、砂層が堆積している。

C-1 トレンチ他 (G-1 トレンチ含む)

調査対象地の南端にあり、G-1 トレンチと合わせて幅0.7~1.7m、東西40mの調査区となる。

1 石敷き 調査区南東端で検出した。

2 瓦組井戸状遺構 1に隣接する井戸あるいは水溜め状遺構。径0.9m、深さ0.8mで、平瓦と桟瓦立て枠状に組み、その下には凝灰岩とみられるブロックを積み上げる。921・922等の平瓦・桟瓦が使用されている。

16 暗渠 北向きに僅かに降る暗渠で、幅0.3m、深さ0.3m以上。蓋石は残存していない。

18 溝状遺構 16の西側で検出された。注口が屈曲する灰釉土瓶が出土した。

22 溝内土坑 6・7素掘り小溝群の両端にある円形土坑。径0.6m、深さ0.5mで131~136が出土した。小規模の畝状遺構と水溜め跡の可能性を考えている。

E-1 トレンチ他

13 土坑 E-1 トレンチを中心にC-2・G-2・G-3 トレンチにまたがる大型焼土坑を確認した。東西6.0m以上、南北6.7m、深さ0.9mあり、焼けた瓦が多量に出土した。火災後の片付け土坑と考えられる。瓦は879~881・905・913・923、土器は140~147が出土した。

E-2 トレンチ

調査区西側ではF-1 トレンチと繋がり、東半には大型の土坑ないし擾乱がある。

F-1 トレンチ

8 暗渠 G-4 トレンチの2暗渠の東側延長上にある。E-2 トレンチ東部の擾乱内にも石が多数散布しており、延長18m分の構の跡であると考えられる。

G-2 トレンチ

14 土坑 18世紀の土坑。

15 溝状遺構

G-3 トレンチ

第1面で礎石とみられる砂岩と根石状の遺構を計6箇所確認した。調査区の範囲が狭く建物には復元できない。

G-4 トレンチ

石敷 1面で砂岩の礎石に片岩の石敷きを伴う遺構で、幅0.8m、南北7m分を検出した。

2 暗渠 2面で内堀に向かって流れる石組暗渠を6.5m分確認した。比較的大型の蓋石を載せており、当該屋敷地の基幹排水路と推定される。

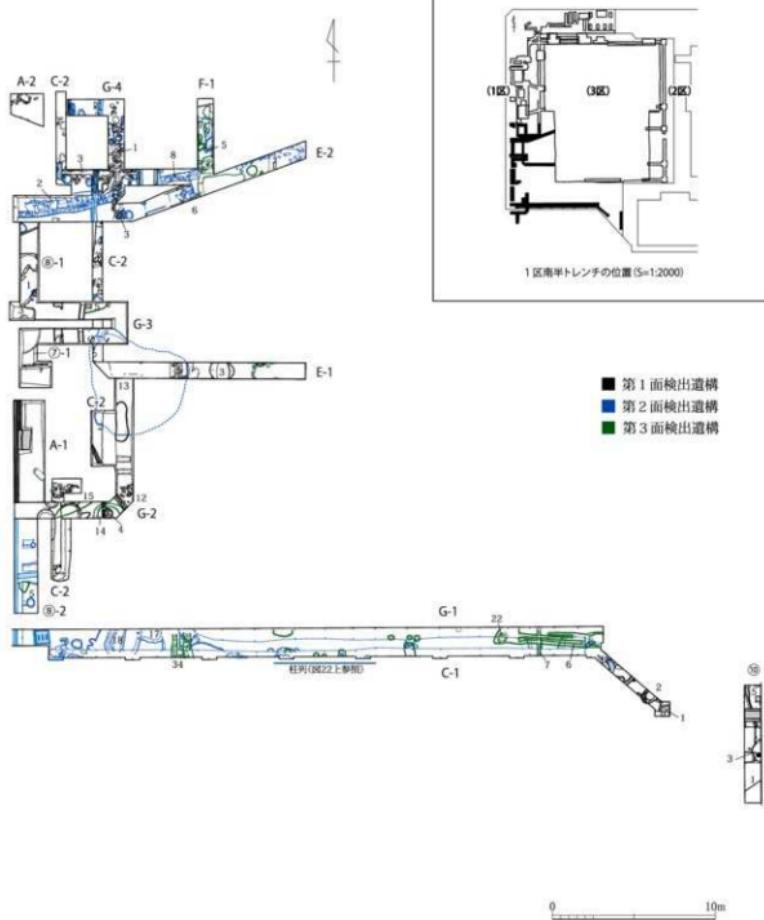


図20 1区南半トレンチ平面図

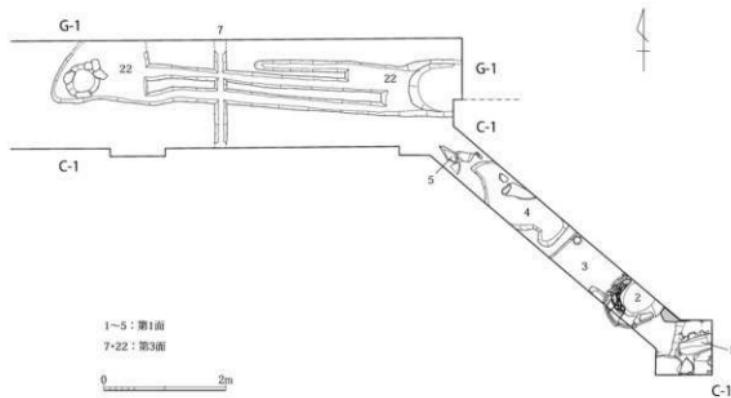
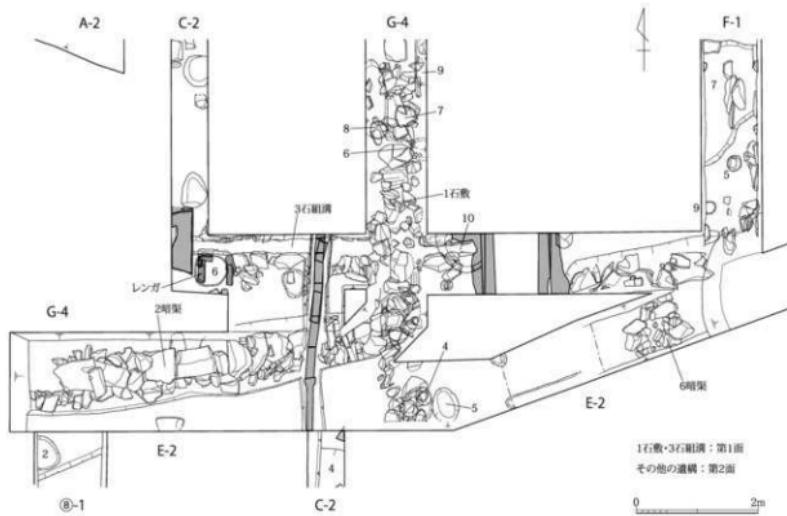
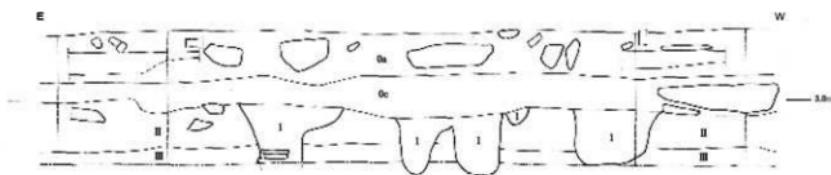


図21 1区南半遺構集中部平面図

C-1 南壁土層(柱列)



I 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土

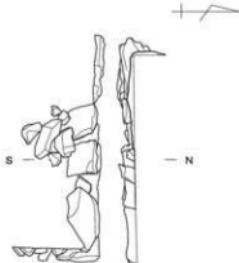
0a 級後

0c 近代

II 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト面砂質土

III 2.5Y5/1 黒灰色砂

F-1 3石組溝



C-1・G-1 34石組暗渠

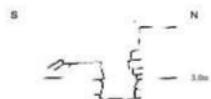
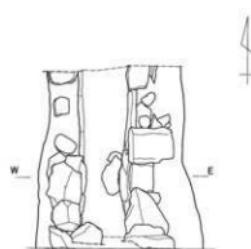


図22 1区南半遺構図

第2節 2区

建物本体東側の配管理設予定地に設定した発掘調査区である。2区の東側には仮庁舎が建てられており、調査面積は少ない。

調査区は3区の周囲を取り巻く「コ」の字状の部分であり、掘削深度は浅い。

1. 北半

調査区は主に、江戸時代の北西屋敷地にあたるE-3トレント、北東屋敷地にあたる⑥グリッドとE-12トレント、南東屋敷地にあたるE-14トレント付近の3つに分けられる。

E-3トレント

近接して旧裁判所建物基礎が入り込んでおり、擾乱されている範囲が非常に多い。土坑状のものが数か所確認されるが詳細は不明である。

4 土坑 191 鳥形香合が出土した土坑である。近世の遺構であるのかは不明である。

⑥グリッド

E-3トレント同様に、擾乱が及んでいる。

E-12トレント

トレント北側では多数の土坑が確認される。南側では近代のものとみられる南北方向の石敷遺構が確認される。

9 土坑 10～19 土坑の北側にある、同様の土坑。

10～19 土坑群 埋土に炭の混じる大型土坑が折り重なってみつかっており、多量の遺物が含まれている。遺物の傾向は特徴的で、19世紀前葉を中心とする在地産とみられる陶磁器類が多数を占めている。素焼きや鉄釉薬・灰釉の軟質施釉陶器のほか、ミニチュア製品類、白磁と上絵付けを施した製品が多数出土している。窯道具も出土しており、19世紀の和歌山城下町における焼き物生産の様相を示す資料として貴重である。

24 土坑 10～19 土坑の南側にある同様の土坑である。

E-13トレント

25 土坑 お歯黒壺 263 や陶製柄杓 264 が出土している。

2. 南半

調査区は主に南東屋敷地にあたるE-4トレント、E-5トレント東部、E-6トレントと、南東屋敷地にあたるE-5トレントを設定して調査を行った。

E-4トレント

大きく擾乱土と整地土が入り込んでいる。礎石とみられる石が確認された。

E-5トレント

上面は擾乱されている。西側では下層の遺構面が残存しており、深く掘り下げて土層を確認した。

E-6トレント

E-4トレントの途中から西方向へ設定したトレント。整地土に覆われている。

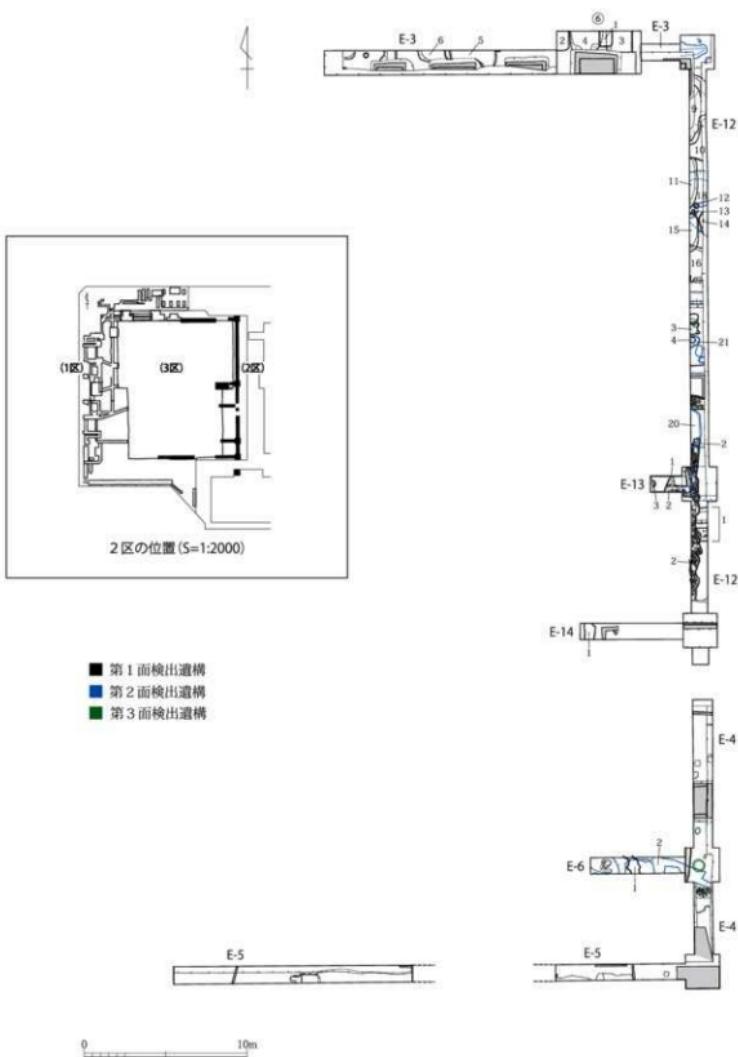


図23 2区トレーニング平面図

第3節 3区

調査対象地のうち建物本体建設予定地を3区とし、調査を行った。調査対象面積は約2,040m²である。3区は和歌山地裁の建物が建てられていた場所にあたる。この地に最初に建てられた建物は、明治19年の木造瓦葺の建物である。昭和20年の和歌山大空襲で焼失し、戦後の昭和22年に再建された。昭和38年にも再度建てなおしが行われている。

昭和38年建設の建物は調査前に取り壊されているが、3区全面に一辺約2~3mのコンクリート基礎が残されており、その下部は地中深くまで打ち込まれたパイレに繋がっている。コンクリート基礎は独立基礎となっているが、周囲に0.2~0.5m程度の掘り方を伴っていた。また、コンクリート基礎建設の際の足場として周囲は標高約2.7mまで削平を受けていたようであり、調査では第1面は中央部と西部、第2面以下は全面調査とした。

また、第2・3面では屋敷地を区画する土塀の沈下を防ぐための基礎地形とみられるシルトブロックの混ざった溝状の施設が検出されており、必要に応じて調査区内を北西屋敷地・南西屋敷地・北東屋敷地・南東屋敷地に区分して調査成果をまとめた。

1. 第1面

標高約3.0mにて、第1遺構面を検出した。調査前に建っていた裁判所の建物基礎は、建築の際に地盤を標高2.7~2.8mほどで平坦にしているらしく、建物基礎の周囲では第1遺構面は残存していないかった。中庭にあたる3区中央部、建物基礎より西側の3区西端部で第1遺構面を検出した。このほか、北東部と南部の第2面では、第1面の石敷き遺構の延長部が確認された。第1遺構面は19世紀後半に形成されたものと考えられる。

(1) 3区中央部

基本的に近世の屋敷地区画上面を覆う整地土上に形成されており、明治時代の遺構が大半を占めるものと考えられる。整地土が均質ではないので、場所によっては江戸時代の遺構面が残存している場合もある場合も考えられる。

石敷遺構群 3区中央部で確認された建物基礎とみられる遺構群で、幅0.6~1.2m、深さ0.1mの構掘り内に片岩・砂岩・花崗岩の割石を埋め込み、片岩板石・砂岩丸石を要所の上面に配する。近世陶磁器片が出土するが、これらの石敷き遺構は江戸時代の屋敷地区画を越えて縦横に走るため、明治19年に建設された和歌山地方裁判所の建物基礎と推定される。

11 埋め甕 石敷き遺構群内に埋設された、大谷焼の大甕を埋設した遺構。下端部のみ残存。

31 埋め甕 丹波焼の甕を埋設した土坑。下端部北東側のみ残存。

36 土坑 江戸時代後期の遺物が出土する土坑。3区中央部のうち南端近くでは、江戸時代の遺構とみられる土坑が若干確認される。

(2) 3区西端部

3区西端部は北半については東西幅約5.5m、南半については幅約1.5mの調査区である。旧裁判所建物の建設地から外れており、建物基礎は検出されず、第1面相当の遺構はこの範囲内にはほとんど形成されていない。明治から昭和前半に削平されていないため、昭和の裁判所建設時の表土を掘り下げると、第1面と第2面の遺構は同時に検出された。

なお、第2面でも屋敷地境界上の高まりを中心に、上面で石敷き施設の残存部を確認した。

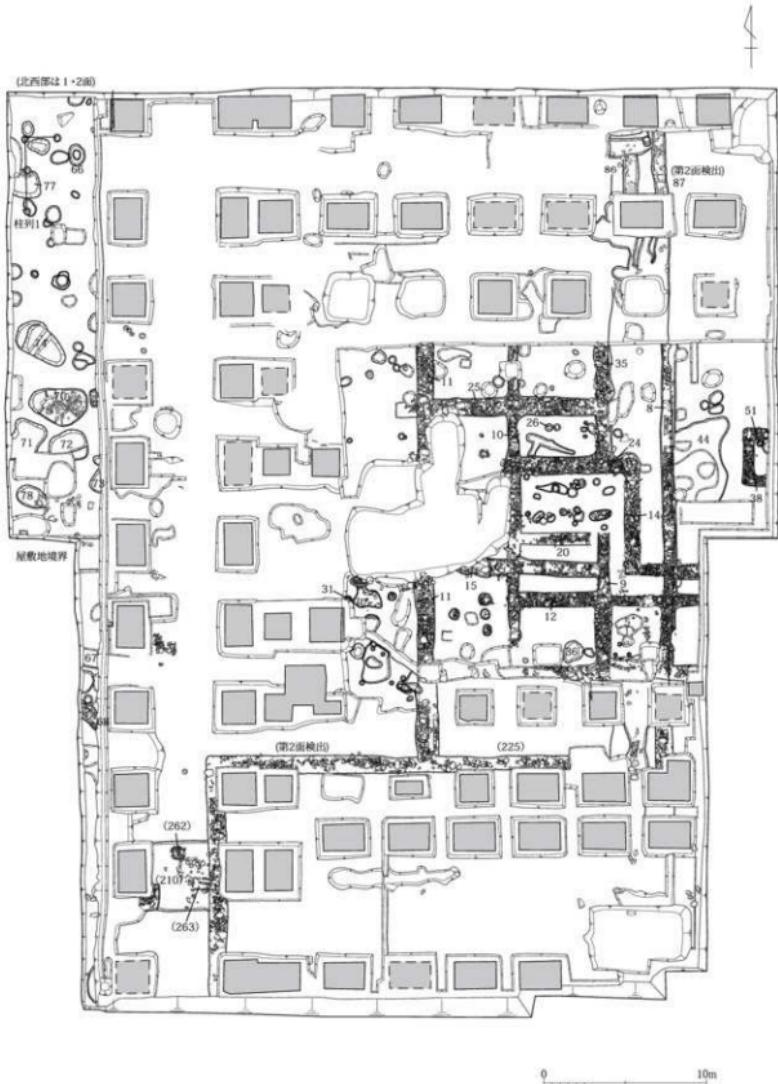
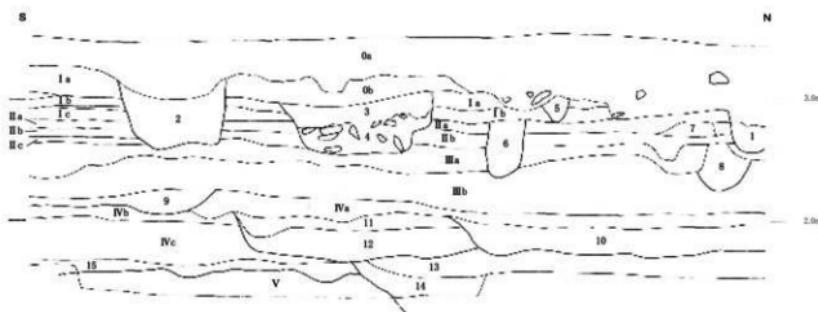


図24 3区第1面検出遺構平面図

3区西壁(南端から20m付近)



- 1 2.5Y4/2 噴灰黄色シルト質土(片岩ケサリ鐵含む)
- 2 2.5YR6/2 深赤色砂質土(片岩・炭少含む)
- 3 2.5Y5/3 黄褐色砂質土(シルトブロック含む)
- 4 5Y5/2 灰土オーブ色砂質土(片岩多数含む)
- 5 5Y5/2 灰土オーブ色砂質土(片岩・鐵土含む)
- 6 5Y6/3 砂質土(片岩・鐵土含む)
- 7 2.5Y6/1 灰黄色砂
- 8 2.5Y6/1 灰黑色砂(シルトブロック含む)
- 9 2.5YR5/3 黑褐色(まろり)
- 10 2.5Y7/2 灰黄色シルト質土(瓦礫片含む)
- 11 2.5Y6/2 灰黄色シルト質土(マンガン粒多い)
- 12 2.5Y6/4 にぶい灰色シルト質土(マンガン粒多い)
- 13 2.5Y7/3 深黄色細砂(鉄分多い)
- 14 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土(鉄分多い・603落ち込み)
- 15 7.5YR4/2 灰褐色シルト質土(土源片含む・626落ち込み)

0a 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(鐵土・炭ほなし・玉石・コンクリート片含む)

0b 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(鐵土・炭中量・瓦・片岩少量含む)

I a 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(鐵土・炭・玉石なししまりあり)

I b 2.5Y6/3 にぶい灰色砂(テナ状堆積)

I c 3色のシルトブロック混層(5Y6/3 オーブ色・5Y6/1 灰色・2.5Y3/3 灰土オーブ褐色)

II a 2.5Y6/2 灰黄色砂質土(シルトブロック・鐵土・炭少量含む)

II b 5Y6/2 灰土オーブ色砂(テナ状堆積)

II c 2.5Y6/2 黄褐色砂質土(シルトブロック含む・炭ほなし)

III a 5Y5/2 灰土オーブ色砂

III b 5Y6/2 灰土オーブ色砂

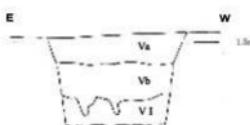
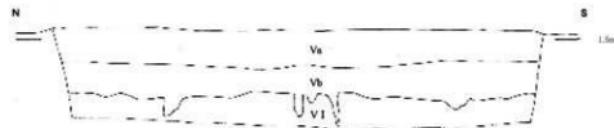
IV a 2.5Y6/1 黑褐色砂

IV b 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト混砂

IV c 10YR5/6 黄褐色シルト質土

V 7.5YR4/3 棕褐色シルト質土

下層確認トレンチ3(位置は図44参照)



Va 10YR6/4 にぶい黄褐色粘土(土源片少量含む)

Vb 10YR4/2 黄褐色粘土(マンガン多量含む)

Vi 2.5GY1/1 灰白色細砂(マンガン中量・鉄分多量含む)



図25 3区調査区壁面土層

2. 第2面

第2面では、標高2.7m前後の高さで3区全面の調査を行った。第1面が残存した場所では1層を掘り下げ、4つの屋敷地を区画する溝状遺構（土塀の基礎）が確認された面として検出している。しかし、裁判所基礎が埋設された範囲では、削平を受けた土を除去して若干低く掘り下げたところで遺構面を確認しているため、新旧の遺構が混在している。遺構の様相はおおまかに北西部と北東部、南部で三分される。北東部では19世紀前葉から中葉にかけての遺構が検出されており、4つの屋敷地境界が重なる付近には若干炭の混じる灰色砂混粘質土が堆積し、屋敷地境界が不明瞭となっている。この範囲には窯状の遺構や多数の焼土坑群、炉壁・土壁状の残骸、窯道具類が出土しているほか、在地の陶磁器・土器・土製品類が多量に出土している。北西部では17世紀から18世紀にかけての柱列・石組橋・地下室転用焼土坑・池状遺構等が確認され、江戸時代前期から中期の武家屋敷地の一端が垣間見える。南部では昭和の擾乱土の下に第1面相当遺構が残存する傾向が強い。

主な遺構

屋敷地境界 幅1.0～2.5m、深さ0.6～1.2mの溝状遺構で、砂層を掘りこみ、シルトブロックで埋めている。土塀の基礎地形跡と考えられる、上面に石敷き遺構が作られることが多い。

柱列1 3区北西部で検出された4基の柱穴で、L字状に折れ曲がる。南の延長上にも礎板をもつ柱穴が確認される。1面調査時に検出した。

66 土器据え付け穴 柱列1の東で検出され、西半に擾乱を受ける。掘り方内に平底の土器を据え、掘り方上面にシルト層を貼る。検出面と土器内は砂が入るほか、土器の下に深く掘られた穴の中には砂が詰められている。手水の下層施設とも考えられる。（写真図版15-3参照）

67・68 石組暗渠 南西屋敷地の西壁沿いで検出した。67は東西方向に伸び、東側の延長部も確認された。68は幅0.2m、高さ0.2mで蓋石が残存しており、南東から北西に向かい、調査区外で合流しているものと考えられる。

74・75 土坑 北西屋敷地の土坑。土器・陶磁器275～279が出土した。

81 容器据え付け穴 66同様の遺構で、土器及び抜き取り痕はなく、木製桶を据えていた可能性が考えられる。容器の下部に砂層へ向かう掘りこみがあり、砂が充填されている。

82 土坑 北東屋敷地の大型廐棄土坑。19世紀の遺物が多量に出土した。

91・92 土坑 北西屋敷地の大型廐棄土坑。下層にある443土坑を含めると、東西9.0m、南北6.5m以上、深さ1.4m。18～19世紀の遺物が多量に出土した。

100 柱穴 矩板ではなく、柱痕のまわりにシルトブロックが混じる柱穴。

109 池状遺構 石灰分を含みやや硬質化した微妙な窪みとして検出された。屈曲する池の底で、やや北東寄りに中島状の施設があったものと推定される。石が若干出土しており、貼り石をしていたものと推定される。東西3.3m、南北4.5m分を検出。年代不詳。

柱列2（110・313・314・148柱穴） 南北に並ぶ柱穴で、直径1m、深さ0.5m程度で、根石のほか矩板がみられるものがある。柱列の西側には柱列3が近接して検出された。

119・120 土坑 窯状遺構193の北東にある土坑。

132・183・224 焼土坑 径0.8～1.0mの焼土坑。被熱した明褐色土と炭で埋まる。

136 井戸状土坑 直径約1.3×0.9mの楕円形で深さは遺構面から約1.6m下まで調査した。

素掘り井戸状の穴で、砂層を掘り抜き、シルト層へ達する。屋敷地の表土や区画施設の基礎地形を行うためのシルトを採掘した土坑と推定される。

141 柱穴 掘り方にシルトブロックが混じる柱穴。径 0.6 m、深さ 0.5 m で、柱痕径 0.15 m。

142 石組枠 東西約 1.5 m、南北約 4 m である。深さは 0.6 m で直径 20 ~ 50 cm の角礫を積んでいる。17世紀の遺物（318・319）が出土している。

柱列 3 (143・144・145・146・147 柱穴) 直径約 1 m、深さ約 0.7 m の大型の柱穴で、底に 40 cm 大の礎板の石を置く。柱痕が残るものが多く、根固めとして大量の瓦ないし石を詰める。

871 巴紋軒丸瓦、888 ~ 894 軒平瓦・滴水瓦、926・927 三つ葉葵紋鬼瓦、929 鳥衾、933 道具瓦等が出土した。4 区画の屋敷地に先行するか、内堀内の施設の瓦の廃棄処理として埋められたものと考えられる。柱列 3 や 155 焼土坑付近は多量の瓦が埋まっているためか後世の削平が少なく、2 ~ 4 面の遺構が同時に検出されているものと考えられる。

155 焼土坑 東西約 9 m、南北約 5 m の方形で、深さ約 1.4 m の地下室跡を転用した大型の火災片付け穴と考えられる。埋土は瓦と焼土で完全に埋まり、若干の陶磁器片や金属製品片が含まれる。瓦は 872 巴紋軒丸瓦と 896 唐草紋滴水瓦を中心とする。蔵の側面に貼る海鼠壁瓦 935 が含まれていることも、地下室の上部施設を考えるうえで注目される。

165 土坑 屋敷地境界の曖昧になる 3 区東部にある整地土状の土のうち、土坑状に輪郭の見える廃棄土坑。埋土からはバリエーションに富んだ灰釉・鉄釉・銅綠釉の軟質施釉陶器等が出土しており、「瑞芝」「化物堂」銘のあるものが散見される。窯道具の匣蓋も出土している。

168 ~ 172 焼土坑 199 土坑の上面に集中して築かれた遺構で、被熱して明褐色を呈する円形土坑上に炭層が被る。

178 土坑 17世紀の土坑で、焼塙壺等が出土している。3面に相当する遺構であろう。

182・185 木棒埋設土坑（第 1 面相当）19世紀の陶磁器のほか刻印瓦等が出土しており、裁判所関連の遺構と推定される。

183 焼土坑 3 区北東の焼土坑。熱を受け明褐色になっている。

186 貝殻廃棄坑 3 区南の浅い土坑で、牡蠣殻が多量に詰まっている。

193 窯・窯状遺構 3 区北東部にある東西 3.1 m、南北 2.8 m の方形掘りこみ遺構。遺構内の南西側には周囲に漆喰状の土を貼った径 1.0 ~ 1.4 m の円形土坑と、炭の多量に入った方形土坑があり、それらを掘削すると、下端部でも円形土坑が確認された。漆喰壁の壊れた部分と東に隣接する掘りこみの一部は、高熱を受けて明赤褐色になっている。北東隅には大甕が据え付けられ、北西の覆土付近には出入口が想定される。高熱を受ける施設の下部構造で、一度造り直されている可能性がある。

199 土坑 径 3 m、深さ 0.9 m の土坑で、炭混じりの灰色粘質土と砂質土が互層となり 3 度重なる。埋土からは 18 世紀の陶磁器が出土する。上面に 168 ~ 172 焼土坑群が形成される。

201 焼土坑 1.0 × 1.6 m、深さ 0.7 m の楕円形土坑で、炭が多量に混ざる土で埋める。

206・209・211 土坑 南西屋敷地に形成された土坑。

212 溝状遺構、225 石敷き、262・263 石組遺構（第 1 面相当）明治 19 年建築の裁判所建物基礎に伴う遺構群。

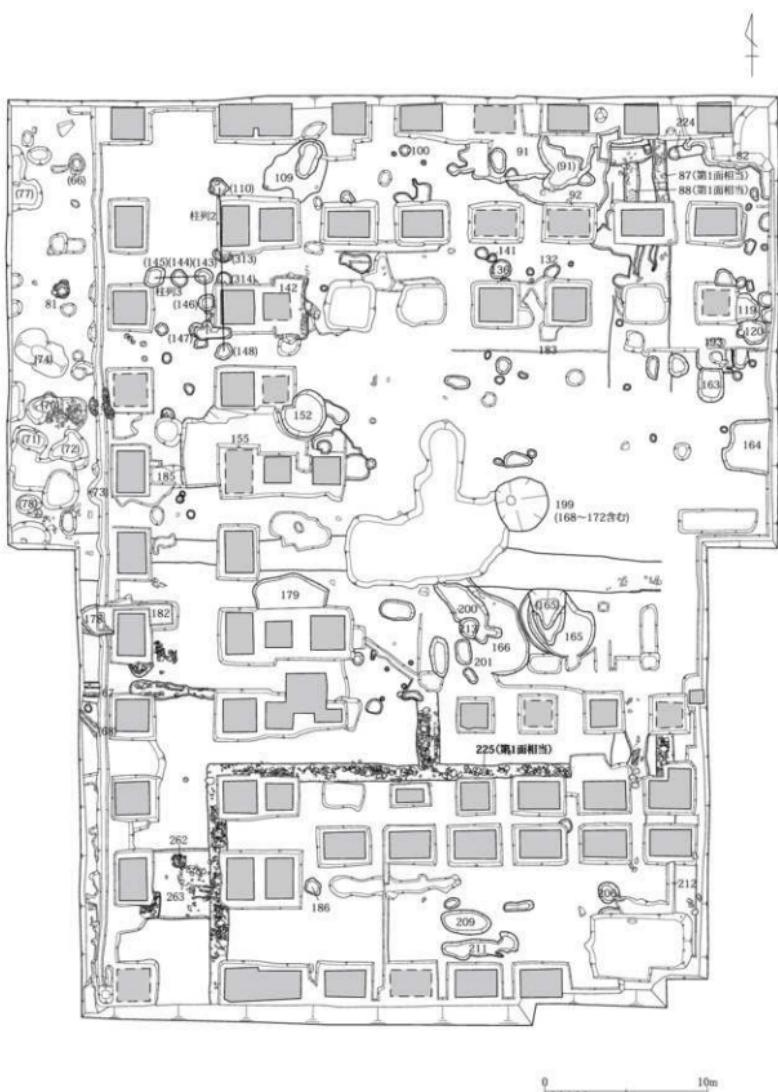
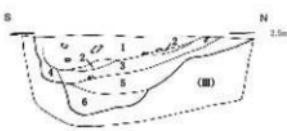


図26 3区第2面遺構平面図

境界3区西壁付近



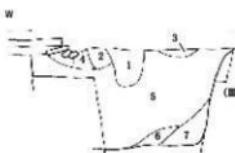
境界4トレンチ



境界 5トレンチ



境界6トレンチ



境界7トレンチ

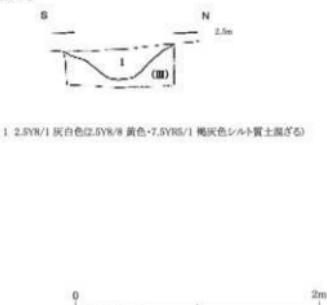
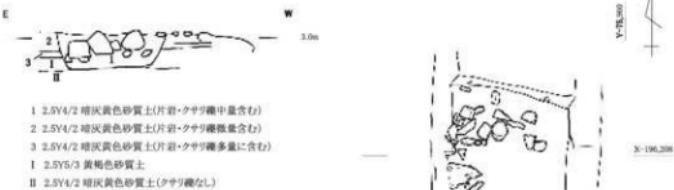


図27 3区屋敷地境界の基礎地形跡

11石敷

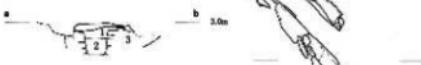


31埋堀



- 1 SY4/3 増粘オーリー色砂質土(微妙にしまりなし)
2 SY4/3 増粘オーリー色砂質土

68暗渠



- 1 10YR8/4 に近い黄褐色砂質土
(10YR8/8 黄褐色シルトブロック含む)
2 10YR4/2 深灰褐色砂質土
3 10YR8/3 に近い黄褐色砂質土

136井戸状造構（粘土探査坑か）

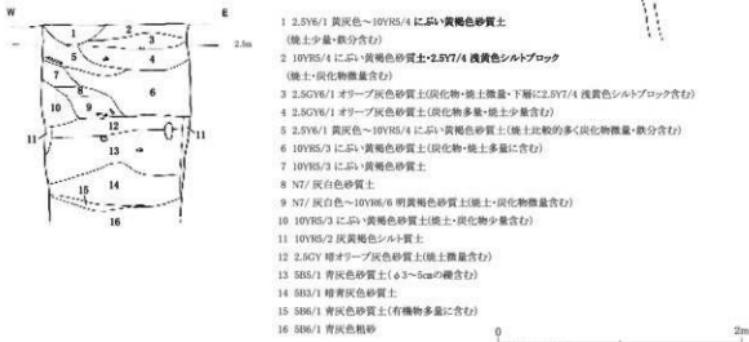


図28 3区第1・2面検出遺構 1

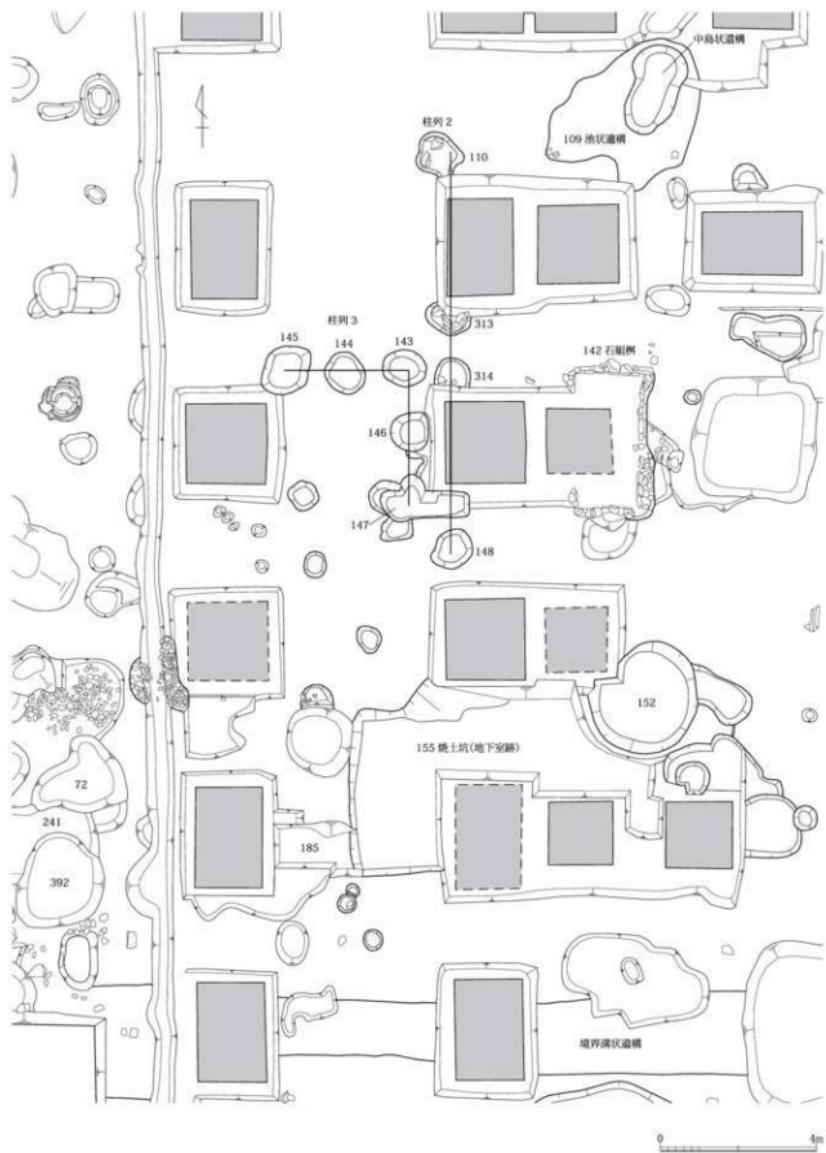


图29 3区第2面検出遺構2

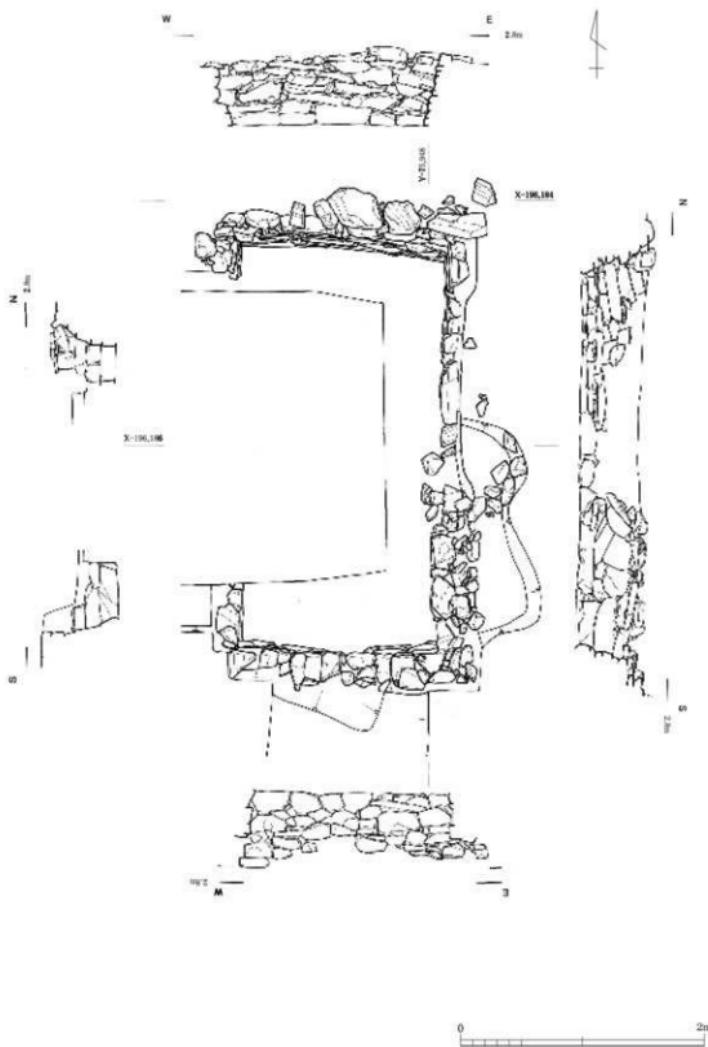
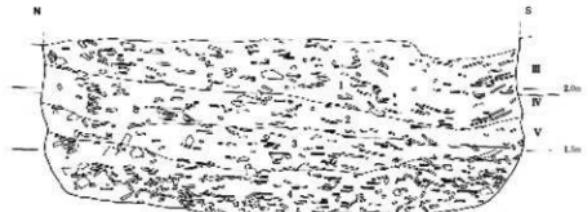


図30 3区第2面検出遺構3

柱列3



155焼土坑(地下室跡か)



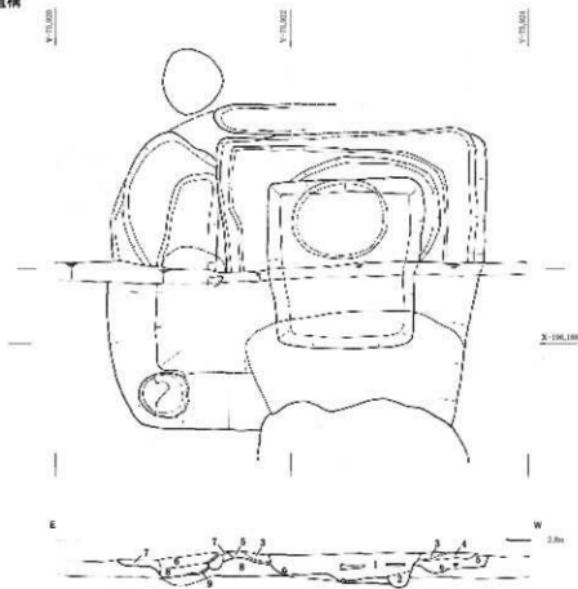
- 1 7.SYR3/2 黑褐色シルト(砂味強い)
(燒土少量・瓦中量入る・瓦の丈夫の瓦が多い)
- 2 SYR4/4 にぶい赤褐色
(7.SYR4/3 黑褐色シルト(砂味強い)に 2.SYR4/8 赤褐色燒土(砂質)
多量に入る・瓦中量入る・焼けた瓦が多い)
- 3 7.SYR3/1 黑褐色シルト
(燒土少量・瓦中量入る・瓦の密度が高い)
- 4 7.SYR4/2 灰褐色シルト
(燒土少量・瓦中量入る・瓦の密度が高い・間に1~2cmの繊から・土粒がつまる
5cm以下の燒土塊も多量入る)

- III 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土
- IV 7.SYR4/4 褐色シルト・砂質土
- V 10YR7/6 明黄褐色シルト



図31 3区第2面検出遺構4

193席・竪状構造



- | | |
|--|---|
| 1 NG/ 灰色砂質土
(ϕ 20cm程度の礫含む)・炭化物多量・
燒土微量含む・粘性あり) | 6 NT/ 黄白色シルト質土・SYB6/8 棕色シルト質土
7 2.SYB6/4 に沿い 黄色砂質土
(炭化物・燒土少量含む) |
| 2 NT/ 灰白色シルト質土・2.SY7/6 明黄褐色シルト質土 | 8 2.SY4/2 緩灰黃色砂質土 |
| 3 NT/ 灰白色シルト質土・SYB6/8 棕色シルト質土 | 9 岩 |
| 4 2.SY6/4 に沿い 黄色砂質土(礫複数片・燒土・炭化物少量含む) | |
| 5 2.SY4/1 黄灰色砂質土(燒土含む) | |

199焼土坑

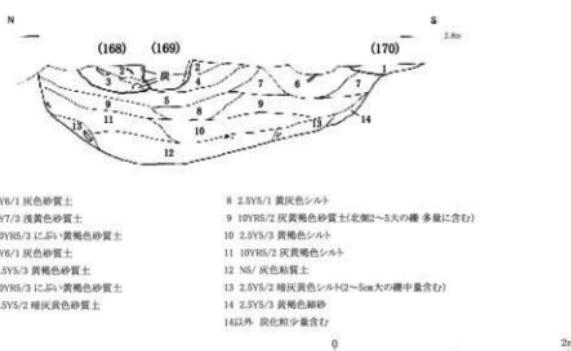
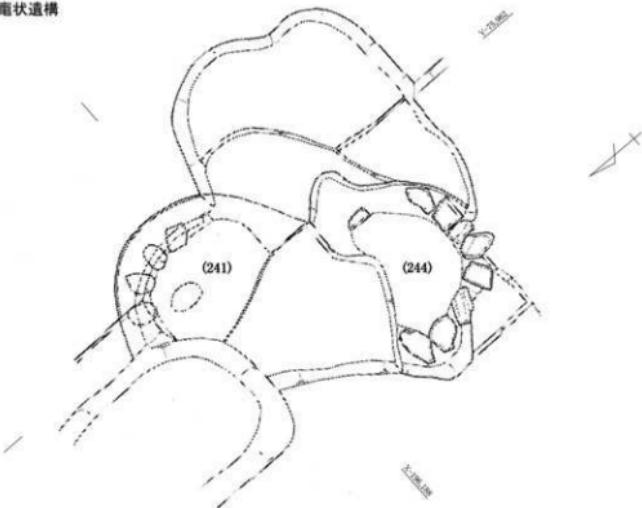


図32 3区第2面検出遺構5

241・244龜状遺構



262石組樹状遺構

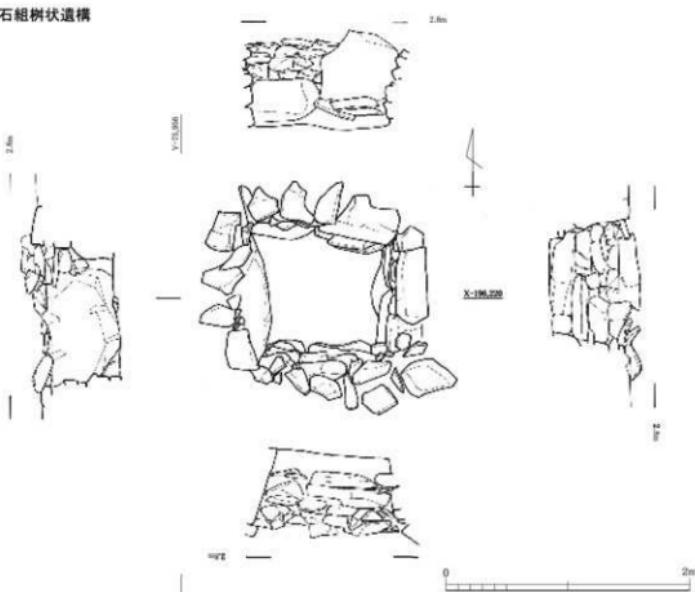


図33 3区第2面検出遺構6

3. 第3面

砂の堆積するⅢ層上面における遺構検出面で、標高は2.4～2.7m西側が高い。江戸時代の前期から後期までの遺構が混在して検出されている。整地土が厚く堆積している場所については、掘り下げを行わず、整地土上面に形成されている遺構の調査を行った。屋敷を区画する溝状遺構はT字形に検出されており、T字交叉部から8m南の付近で溝状の基礎地形跡は不明瞭になっている。東側の屋敷地の整地土は溝状遺構を半分削りこむところまで堆積しており、19世紀の遺構群が形成されている。

北西屋敷地の建物跡は地表面が削平されておりまったく検出されていないが、礎板をもつ柱列の周辺の空白地の状況から、柱列6と7に囲まれた内側及び南側にこの屋敷地の主要な建物があつたものと推測される。建物跡推定地の南には18世紀の土器の捨てられた316・324土坑等が掘られ、屋敷地東側には18世紀から19世紀前葉にかけての大型廐棄土坑323及び345・327土坑が掘られている。また、西部の南端では竈状の遺構、西部の北寄りでは簡易な構造物が作られている。南西屋敷地では二つのL字状の柱列に囲まれた区画の東側に3基の地下室状の遺構があり、その南東寄りに廐棄土坑が掘られている。遺構の年代が混在するが、基本的には敷地中央に建物と柵、手前に石組を作つ水場と火處、奥に廐棄土坑という構成の遺構があり、重複と削平を繰り返しているものと考えられる状況を呈している。

主な遺構

柱列4 (248南・北、249南・北(4基)) 南北方向の2条の布堀りの両端に礎板が検出されしており、方形の簡易な構造物跡と考えられる。東西に柱穴が続く可能性があり、とりあえず柱列4としておく。

柱列5 (252～255(4基)) 柱列4の南側に隣接する東西方向の柱列。南北1.8mの248・249布堀り土坑内に礎板を据えている。

241・242 竈状遺構 北西屋敷地の南西部の擾乱土を除去後に確認した遺構。内径約1.0mの石組円形土坑を2基併設し、内部底面全域に炭化物が堆積している。石敷上面から20cm被覆した壁が残存し、焚口を中心に東と南に1.5mの間隔で2基確認される。いずれも擾乱を受けている。

243 土坑 幅4.0m、長さ9m以上の土坑。 唐津焼456・457等が出土した。

柱列6 (259～375柱穴(6基)) 北西屋敷地東部で検出した径0.8～0.9m、深さ0.4mの柱穴で、底に礎板を置く。柱痕の周りは石と瓦で根固めを行っているが、石と瓦の比率は柱穴ごとに異なる。6基の柱穴が南北に並び、柱間距離は1.63m。

ピット列1 (306～308柱穴(3基)) 柱列6と柱列7に囲まれた区画内に並ぶ、東西方向の柱列。径0.4m、深さ0.3mで、柱間距離は1.0m。

柱列7 (407～311～414柱穴(11基)) 柱列6に隣接するL字形の柱列で、東西に6基、南北に5基が並ぶ。径0.8～0.9m、深さ0.4～0.5mで、いずれも底に礎板を据える。根固めに石や瓦は使わない。

277・279 土坑 第2面整地土の下から検出された重複する土坑。277土坑は東西2.7m、南北3.0m、279土坑は東西1.4m、南北2.0mの土坑である。第2面相当遺構。「瑞芝」銘の入る鉄軸行平鍋の把手や「泉州岸」銘の焼塩壺、涼炉などといった在地色の強い19世紀の土器群

が出土した。

283-284 土坑 第2面整地土の下から検出された、第2面相当遺構。2基が重複して、東西2.3m、南北3.4m、深さ1.1m。「瑞芝」銘の灰軸行平鍋把手や277土坑とはタイプの異なる鉄軸行平鍋、涼炉、深い丸碗等が出土している。

286 土坑 第2面整地土下の遺構。東西1.1m、南北1.5mの土坑で、屋敷地を区画する溝状遺構の上面に作られている。17世紀台の茶道具とみられる陶磁器が出土している。屋敷地区画施設の基礎地形が行われた時期が17世紀であることが認識されるが、この土坑が掘られた時期に一度上部構造がなくなり、平坦になったことがうかがわれる。

290 石列 第2面整地土下の遺構。286土坑と同様に屋敷地を区画する溝状遺構の上面に形成された遺構で、茶道具とも考えられる備前焼が出土している。土坑の上面には、南北方向の石列を配している

300 土坑 第2面整地土下の遺構。北西屋敷地の廃棄土坑で、幅1.8m、長さ3.1m、深さ0.9m。18世紀の遺物が出土する。

316 土坑 第2面整地土下の遺構。北西屋敷地の廃棄土坑で、東西3.4m、南北2.4m、深さ1.2m。18世紀の遺物が出土する。

323 大型廃棄土坑 第2面整地土下の遺構。東西5.0m、南北6.0m、深さ1.1mの部分を中心いて、南北に土坑が重複する。焼土や炭を若干含み、19世紀前葉の広東碗を含む時期を中心とする多量の遺物が出土した。

324 土坑 323土坑の南西側にある東西1.6m、南北1.0m、深さ1.0mの土坑。18世紀の陶磁器類が多数に出土した。

327 土坑 323土坑の南東に接する土坑。東西区画の溝状遺構に接する北西屋敷地側に掘られている。

柱列8(367-369-371柱穴(4基)) 南西屋敷地で検出されたL字状の柱穴。礎板を据えている。

ピット列2(377-379-380柱穴(3基)) 北西屋敷地で検出された東西に3基並ぶピットの列。砂で埋まる長方形土坑498の北辺に沿って検出された。

373 土坑 南西屋敷地で検出された長方形の土坑。東西2.7m、南北1.3mで、深さ2.0m。17世紀の遺物が出土する。

374 土坑 南西屋敷地で検出された大型の土坑。匣鉢や行平鍋把手が出土している。

378 地下室状土坑 南西屋敷地で検出された長方形の土坑。東西4.0m、南北2.0m、深さ1.0mの地下室状の土坑で南東部の浅い部分に出入り口が付く可能性がある。

柱列9(406-407-408(3基)) 南西屋敷地で検出されたL字状の遺構。径0.6mで、礎板を据えている。

419 集石遺構 323の底で検出された集石遺構で、崩れた井戸の可能性も考えられる。

423 地下室 東西約4.4m、南北約1.8m、残存する深さ0.65mの地下室で、北辺内側だけに高さ0.5m分の片岩の石組をもつ。上層から平面系が一回り小さく深い、相似形の土坑が掘られている。階段等の遺構は確認されていないが、検出面の覆土は北西隅から西側に伸びており、出入り口の方向を示唆するものと考えられる。

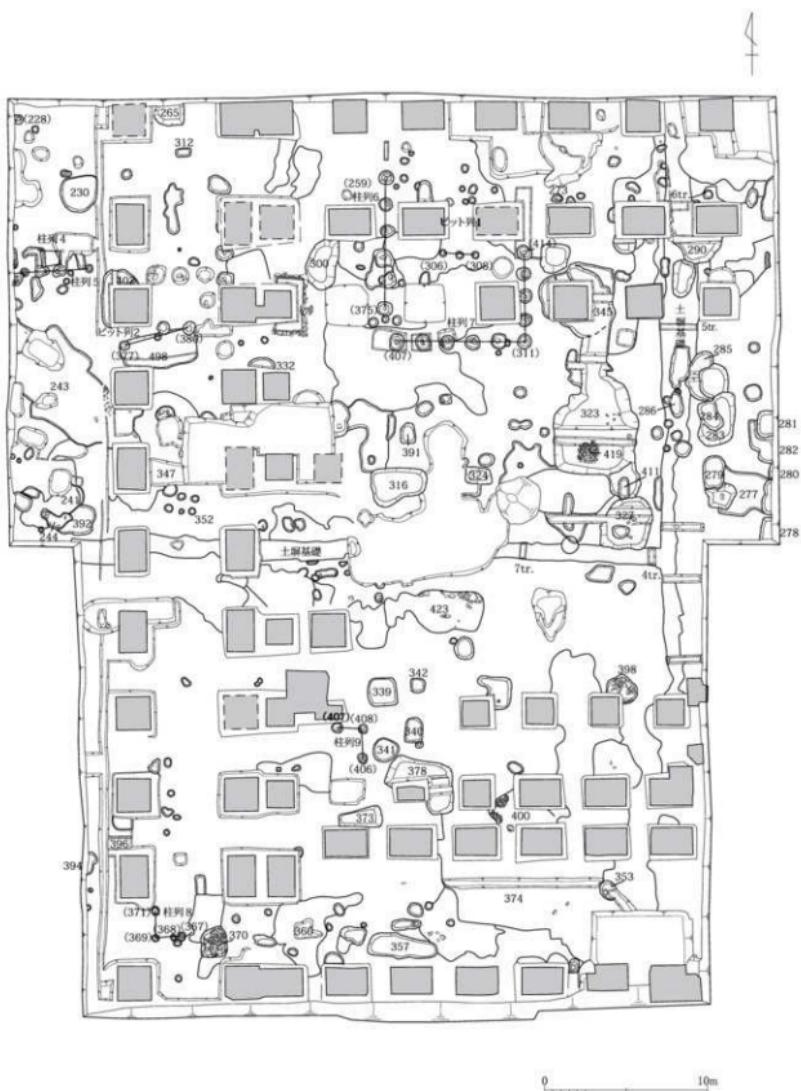
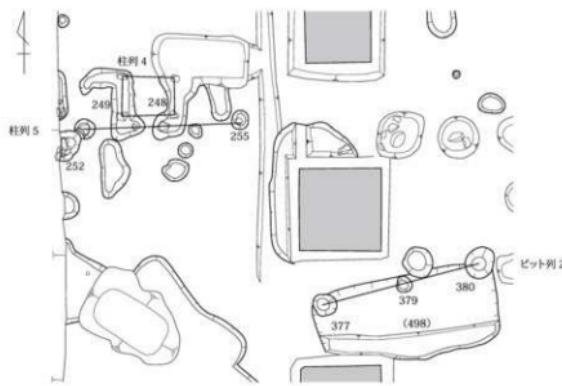
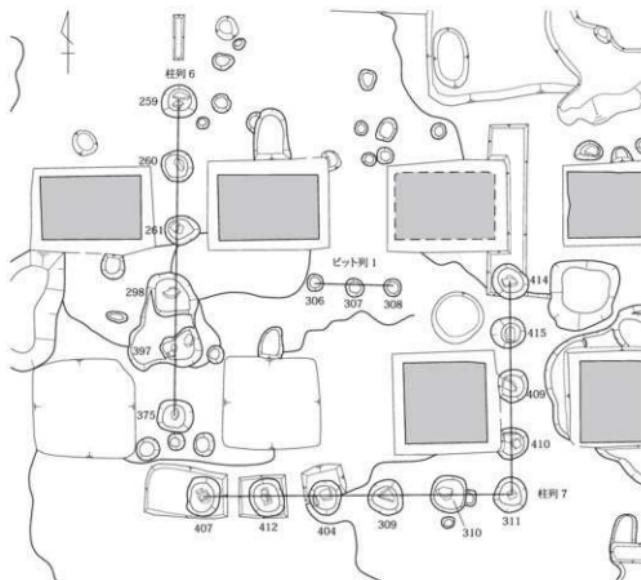


図34 3区第3面平面図



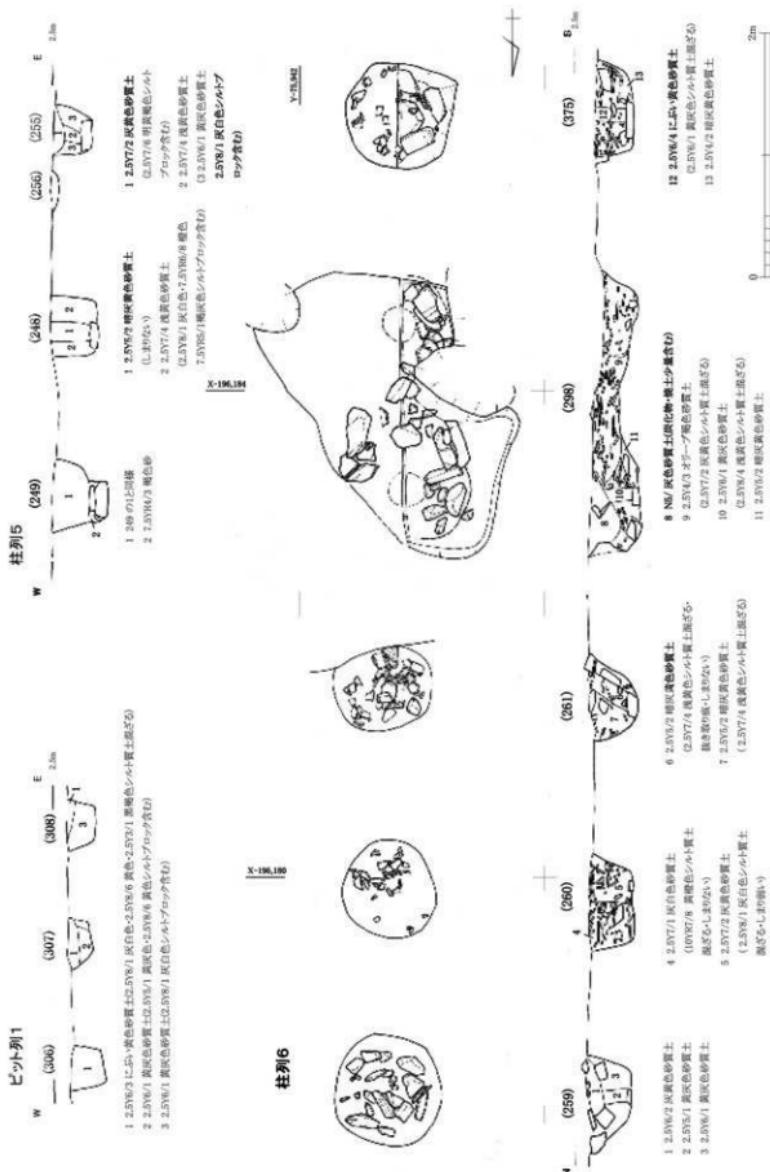
北西部の柱列等



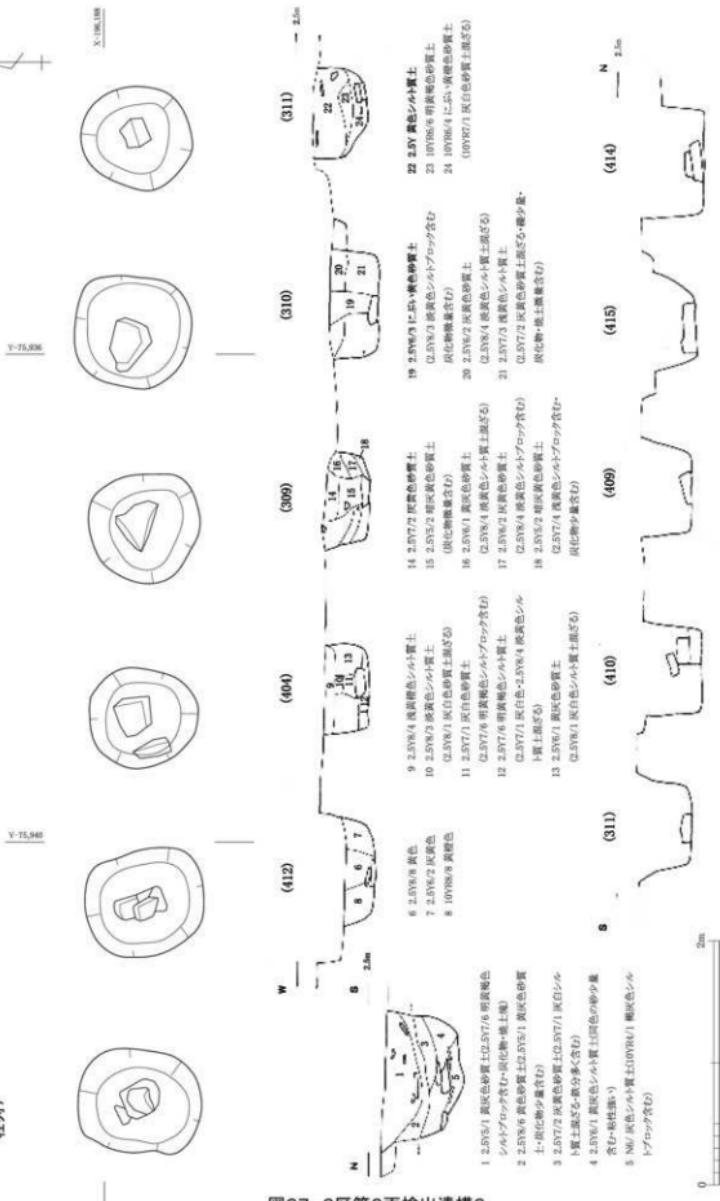
中央北部の柱列等

0 4m

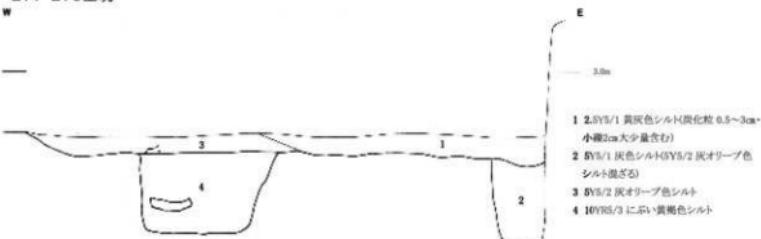
図35 3区第3面検出遺構1



柱列7



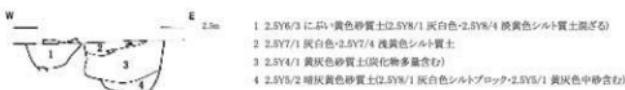
277-279土坑



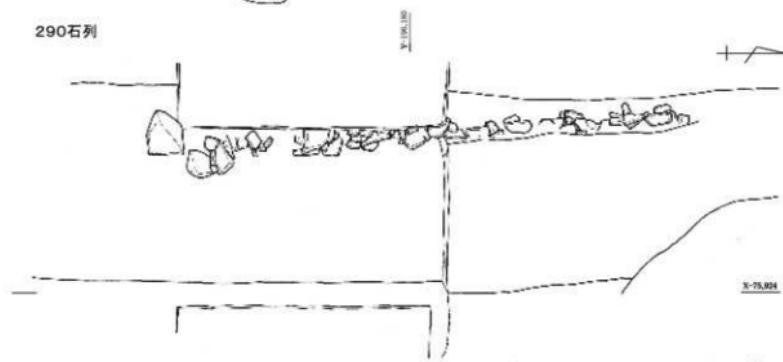
283-284土坑



286土坑



290石列



300土坑

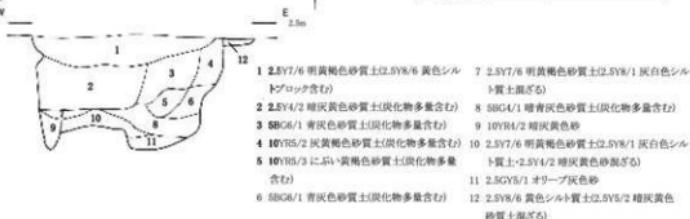


図38 3区第3面検出遺構4

323廃棄土坑



419石組

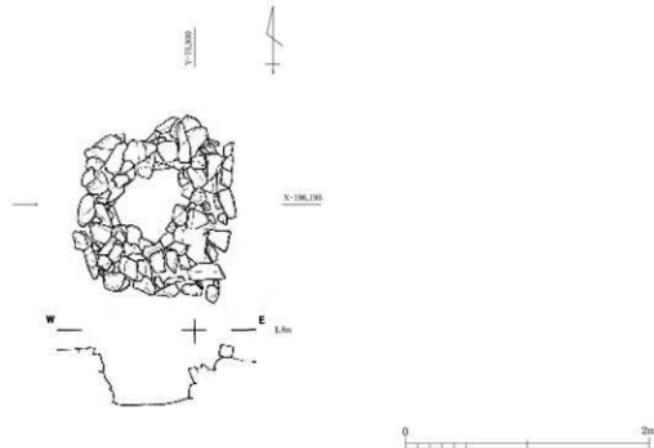


図39 3区第3面検出構造5

4. 第4面

3面から4面に掘り下げる途中の砂層で中世後期の土壙墓群を確認した。人骨の出土した421付近に4基と、灰釉丸皿が出土した435付近に2基確認でき、その他にも平面形が類似する土坑がみられる。本来の土壙墓群形成面は標高2.4m前後と推測される。

第4面の遺構は、III層の砂で埋まる大型の遺構と、シルト質土で埋まる径2m以内の遺構に分かれる。前者からは遺物はほとんど出土せず、後者では13~14世紀の土器片が出土した。また、広範囲に広がる整地土の下から江戸時代の遺構も多数確認された。

主な遺構

420 貝殻廃棄土坑 3区北東隅で確認した径約1.6mのやや不整形な土坑で、深さは0.5m。シジミが大量に廃棄されていた。

421 土壙墓 3区中央付近でIII層の砂を掘削中に標高2.25mで確認した土壙墓で、長さ約1.3m、幅約0.8mの隅丸方形を呈している。土壙墓内の北西寄りに人骨が上面を向いた屈葬で埋葬されている。やや華奢で歯の擦り減り具合は少なく若い女性の骨である可能性が高いが、骨盤等の骨の残存状態は悪く、頭骨と一部の手足の骨以外は砂の上に痕跡として付着するような状態であった。土壙墓はIII層下半とIV層を中心が窪んだ形状に掘削し、粘質土とシルト質土を底に入れて平坦面を作っている。人骨は丸まった形で納められており、布を敷くか、包んだ状態で砂を入れて埋められたものと推定される。左腕の近くで貨幣が6枚重なった状態で出土しているほか、埋土中には微細な土師器片・瓦器片が含まれていることから、中世後期の墓と考えられる。

427 石組溝 整地土の下で検出された片岩による石組溝の跡である。幅0.7m、残存長1.8m、深さ0.2mで、底には別の素掘り溝とピットが検出された。楕円形の範囲内のみで遺構が残されている。石組のある墓の可能性も考えられる。

429 土壙墓 土壙墓421の南西約1mにある土壙墓跡。長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.3mで、土坑の中央が窪む。埋土は砂で、粘質土は入っていない。人骨は出土していないが、規模・形状が一致しており、土壙墓と認識している。

434 土壙墓 3区北西部の標高2.25mで検出した土壙墓。長さ約1.2m、幅約0.8m、深さ0.6mで、検出面は砂層、下半はシルト質土を掘り下げて作られている。

435 土壙墓 434土壙墓の南側に隣接する位置にある土壙墓で、東西方向に長軸をもつ。長さ約1.3m、幅約0.8mで、深さ約0.5m。埋土から見込みに印花の菊紋をもつ瀬戸美濃系の灰釉丸皿片が出土している。副葬品か不明であるが、434とともに和歌山城築城直前期の土壙墓であるものと考えられる。

462-463 長方形土坑 3区中央の3面整地土の下で検出された南北約3.2m、東西約2.0~2.5m、深さ0.5mの長方形土坑。埋土はIII層の砂であるが、シルトブロックが混入する。シルトの採掘坑の可能性が考えられる。

476・509 柱穴 北東屋敷地の3面整地土の下で検出された柱穴で、礎板を据えている。南にもピットがあり、列になる可能性もある。

498 長方形土坑 東西4.5m、南北2.0m、深さ0.6mの長方形土坑。埋土はIII層の砂層である。上層では北辺に沿ってピット列が並ぶ。

508 土壙墓 土壙墓 421 の北約 2.5 m にある土壙墓で、長さ 1.45 m、幅約 0.8 m、深さ 0.45 m。砂層で埋まり、人骨は出土していない。中央が 421 土壙墓同様に明確に窪んでいる。

514 ~ 517 土坑 3 区南西部に集中する土坑群のうち、径約 1.0 ~ 1.5 m の円形ないし隅丸方形の一群。土師器細片のほか、13 世紀後半から 14 世紀前半頃の瓦器片が出土した。

540 土坑 3 区南側の楕円形土坑。土壙墓と形状が類似するが、詳細は不明。

549 土坑 径 1.7 m、深さ 1.0 m の土坑で、砂層とシルト質土が互層状に堆積する。

556・557 長方形土坑 3 区中央の大型擾乱坑の下で検出された長方形土坑。556 は南北約 4.0.2 m、東西約 2.9 m、557 は南北約 2.8 m、東西 2.5 m。埋土はⅢ層の砂であるが、シルトブロックが混入する。シルトの採掘坑の可能性が考えられる。

564 土坑 長さ 3.0、幅 1.8 m の隅丸方形土坑で、埋土は砂。

566 土壙墓 421 土壙墓の北西約 5 m に位置する土壙墓。長さ 1.6 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m、長軸を東西に向ける。

5. 第 5 面

5 面では調査区東半を中心に近世整地土下端の遺構をすべて掘り切った。

調査区の中央西端で瓦器片が含まれる落ち込みを、調査区南西部では高台をもつ黒色土器片が含まれる落ち込みを確認した。

主な遺構

591 井戸状遺構 南西屋敷地の整地土（大型土坑 374）の下で検出された近世の井戸状遺構。土坑内は水分があり木製品が出土した。後に、北側に同形状の 590 土坑が作られており、714 ~ 716 は 590 土坑の遺物の可能性もある。

582 土坑 近世屋敷地境界の途切れた南側で検出された不整形土坑。長さ 1.2 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m。平行タタキの深い焙烙と中国徳化窯の白磁が出土し、中世末期の遺構と考えられる。

587・588 土坑 582 土坑の南西で検出された不整形の土坑。塊形に近い土師質土器片と、備前焼の擂鉢ないし捏ね鉢が出土した。

602 土坑 南北 4.0 m、東西 3.2 m 以上の不整形土坑で、土師質土器細片が出土した。

603 落ち込み（図 25・44） 調査区の中央西端で東西約 10 m の範囲で色調の違う淡黄～灰白色の堆積を確認し、瓦器片が含まれることを確認した。

604・606・608 土坑 3 区西側にある土師質土器片の出土する土坑。

626 落ち込み（図 25・44） 3 区南西部で検出された落ち込みで、南北約 19 m、東西約 28 m 分を確認した。標高 1.3 m 地点で土師皿片が出土した。

下層確認トレンチ②の湿地状堆積（図 25・44）

標高 1.3 m まで土器細片の混じる粘土、標高 1.0 m まで土器片が現状で確認できない木の根の跡の残る粘土を確認し、標高 1.0 m より下には灰白色細砂層が確認された。3 区で出土する古墳時代中期から後期の遺物が帰属する古墳時代相当面は標高 1.3 m で湿地であり、遺構は残存していないものと考えられる状況である。

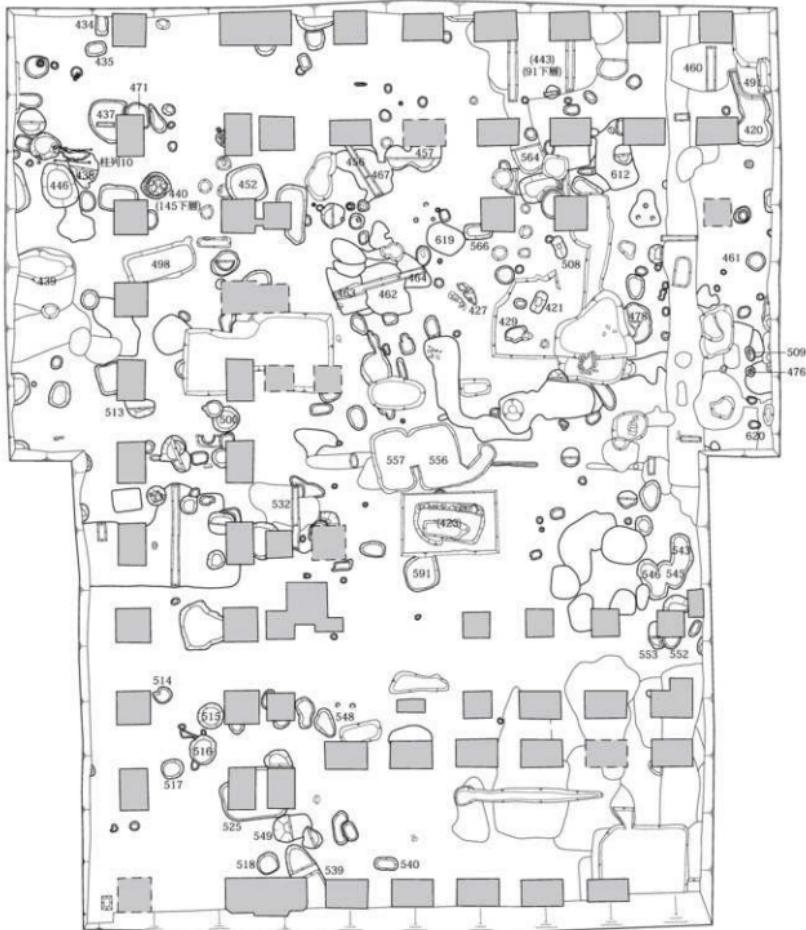


図40 3区第4面平面図

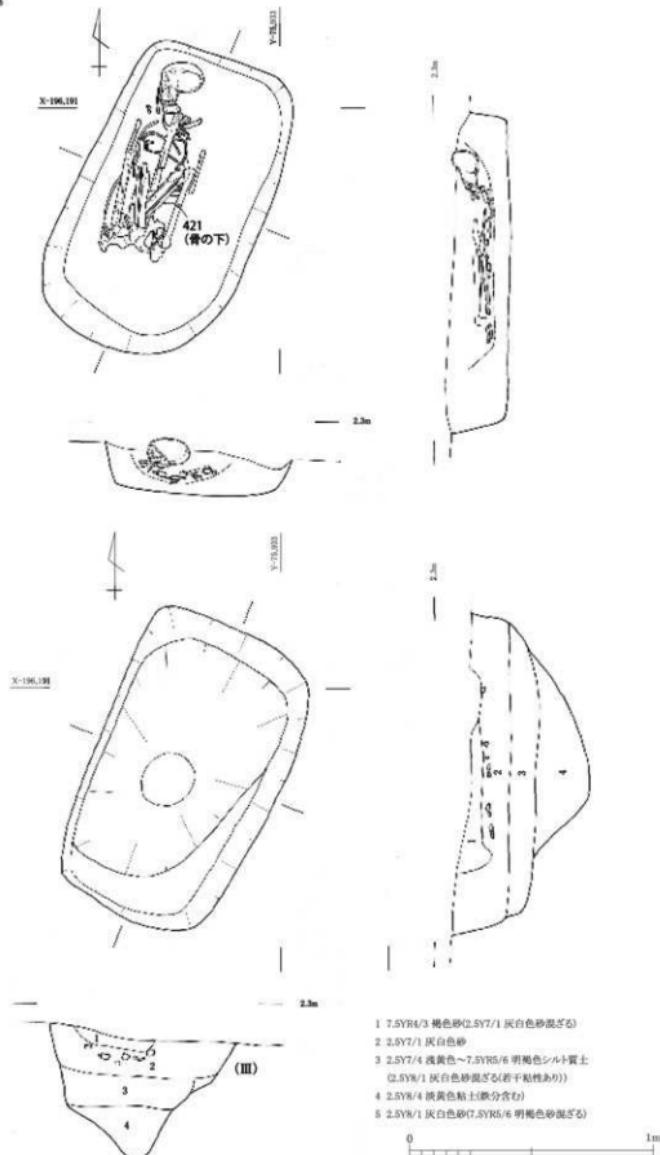
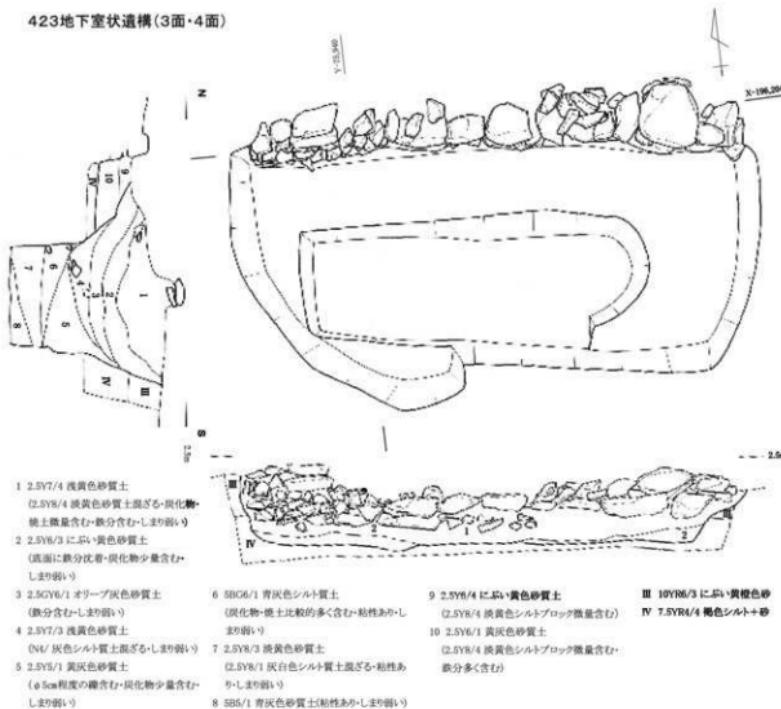


図41 3区第4面検出遺構1

423地下室状遺構(3面・4面)



427溝状遺構

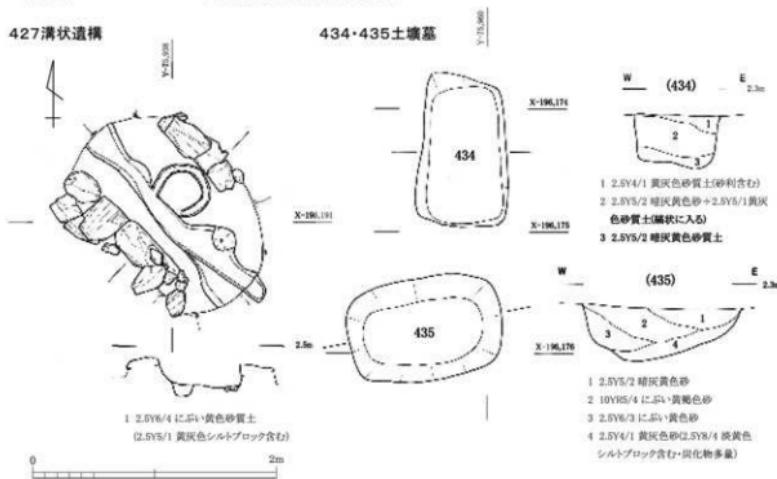
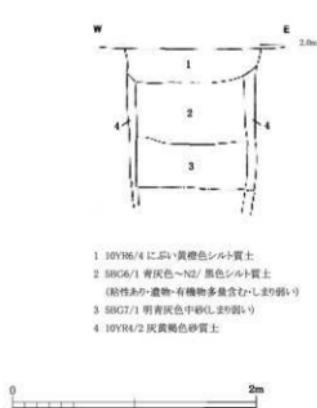


図42 3区第4面検出遺構2

490井戸状遺構



454土坑



508土壤墓

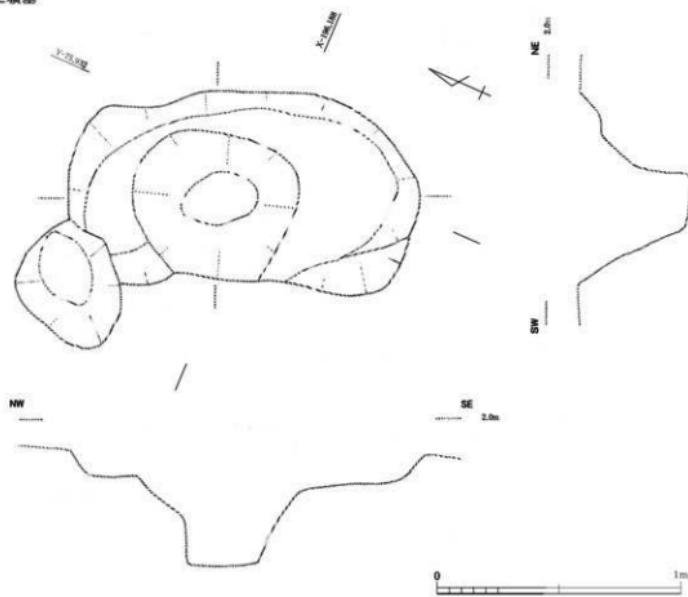


図43 3区第4面検出遺構3

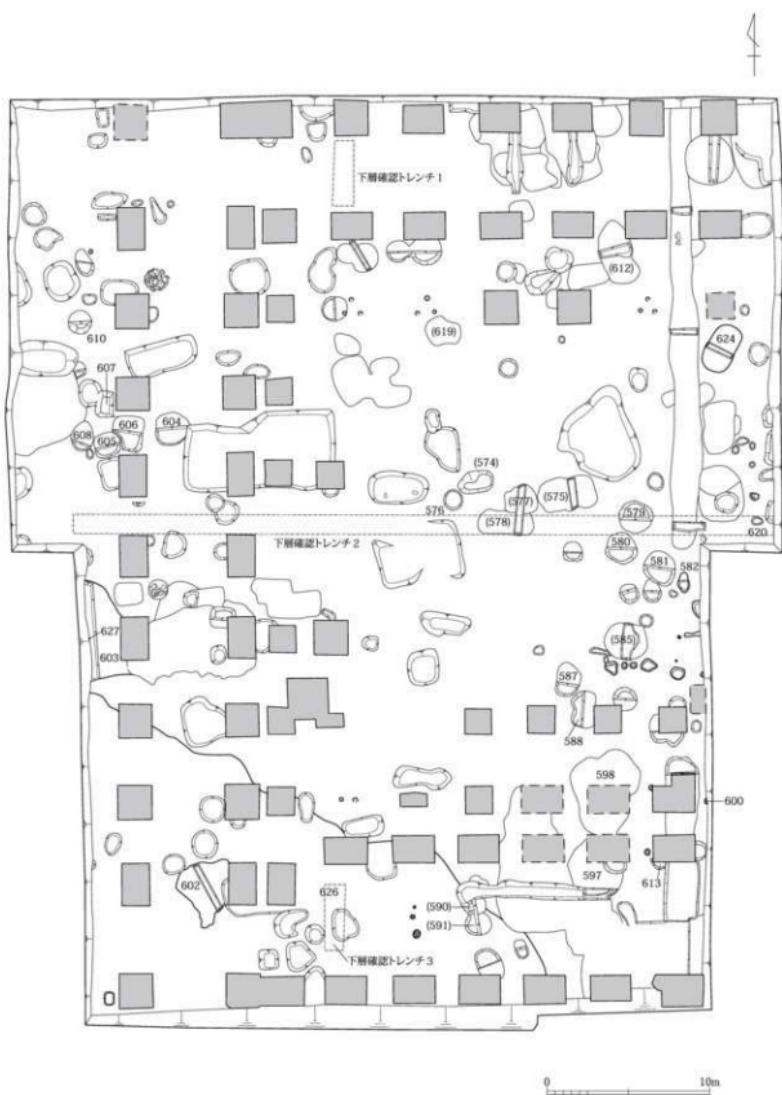
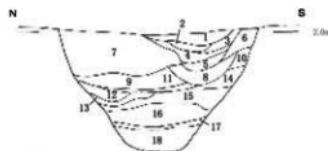


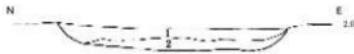
図44 3区第5面平面図

549土坑



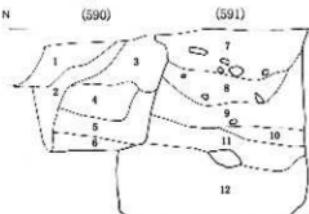
- 1 2.5Y6/1 黄灰色砂(炭化物微量含む)
- 2 2.5Y6/4 淡黄色～2.5Y6/6 黄色シルト質土
- 3 2.5Y7/2 灰黄色シルト質土
- 4 NT/ 灰白色砂
- 5 2.5Y7/1 灰白色砂(10YR4/3 に近い黄褐色砂混ざる)
- 7 2.5Y7/1 灰白色砂(2.5Y6/3 灰色砂混ざる)
- 8 2.5Y6/1 黄灰色シルト質土(2.5Y6/4 淡黄色シルトブロック含む)
- 9 2.5Y7/1 灰白色砂
- 10 10Y6/1 灰白色砂
- 11 NT/ 灰白色シルト質土
- 12 2.5Y6/2 灰白色シルト質土
- 13 NF/ 灰白色～NT/ 灰白色シルト質土
- 14 10Y8E/2 灰黄褐色砂(10YR8/4 浅黄褐色シルトブロック含む)
- 15 10Y8E/2 灰黄褐色砂
- 16 7.5Y8E/6 棕色シルト質土(10Y8E/1 棕灰色シルト質土混ざる)
- 17 NT/ 灰白色シルト質土
- 18 2.5Y7/1 淡白色シルト(10YR7/8 黄褐色シルト質土混ざる)

564土坑



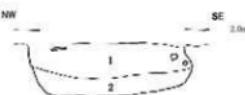
- 1 2.5Y6/2 灰黄色砂
- 2 2.5Y6/2 灰黄色砂(2.5Y8E/6 棕色シルト質土混ざる)

590・591土坑



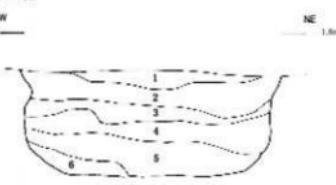
- 1 10YR5/2 淡黄褐色砂質土(NR/ 淡白色シルトブロック含む・炭化物微量含む)
- 2 10Y8E/2 黄褐色中砂(10YR7/1 明青灰色中砂混ざる)
- 3 7.5GY8/1 明緑色中砂～砂
- 4 10Y8E/2 淡黄褐色砂質土(淡土塊微量含む)
- 5 10YR5/3 に近い黄褐色砂質土(10YR8/6 黄褐色砂質土混ざる)
- 6 10Y4/1 灰白色シルト質土
- 7 10Y8E/2 淡黄褐色砂質土(15cm程度の繊少量・炭化物・鉄分・粘土多量含む)
- 8 2.5GY6/1 オリーブ灰色砂質土(10cm未満の繊少量・鉄分・粘土多量含む)
- 9 NF/ 灰色泥炭(炭化物多量含む)
- 10 2.5GY7/1 明オーブ灰褐色シルト
- 11 2.5GY6/1 オリーブ灰色泥炭/NS/ 灰色泥砂
- 12 NA/ 灰色泥炭(炭化物・有機物多量含む)

608土坑



- 1 2.5Y6/1 黄灰色砂質土(砂利・マンガン多く含む・炭化物中量含む)
- 2 2.5Y7/3 淡黄色砂

612土坑



- 1 2.5Y6/1 黄灰色砂質土(炭化物中量・土塊微量含む)
- 2 2.5Y6/3 に近い黄色砂
- 3 10Y8E/3 に近い黄褐色砂(NR/ 淡白色シルト質土混ざる・炭化物微量含む)
- 4 NT/ 灰白色砂・5BG5/1 青灰色シルト質土混ざる(炭化物少量・鉄分多く含む)
- 5 SB4/1 灰色灰褐色シルト(炭化物中量・10cm未満の繊少量含む)
- 6 2.5GY7/1 明オーブ灰褐色シルト質土

0 2m

図45 3区第4・5面検出遺構

第5章 出土遺物

1区で155箱、2区で24箱、3区で418箱、計597箱の遺物が出土した。石製品が7箱、金属製品が3箱、木製品が3箱・その他（骨・貝他）が5箱であり、その他は土器・瓦等である。

第1節 1区出土土器

1. 1区北半グリッド出土土器（北西屋敷地の遺構出土土器）

1～5は①グリッド45土坑出土。1・2は瓦質の暖房具である火鉢とバンドコ。1は6面に樓閣紋を型押しし、獣面の双耳を付ける。3と5は灰釉と鉄有を掛け分けている。4は灰釉の台付灯明受皿。

6～23は②グリッド29土坑出土。6～9は土師質土器・土製品。6は透明釉をかけた灯明受皿。7は秉燭。8は透明釉をかけた木目型押しの皿。9は泥面子。10・11は瓦質の焜炉とその風口。12・13は焼締陶器の擂鉢。12は明石系、13は堺系か。14・15は素焼きの土瓶の蓋と身。16はトビガンナと鉄釉、イッチン掛けを施す行平鍋の蓋。17は鉄釉で福寿の文字を書く灰釉の土瓶蓋。18・19は白磁、20は灰釉陶器。21～23は染付の端反碗・猪口・広東碗。19世紀前葉の一括遺物と考えられる。

24・25は②グリッド32土坑出土。24は土師皿。25は備前の擂鉢。

26～28は②グリッド包含層出土。26は灰釉油壺。27は絵唐津皿、28は大谷焼の通い徳利。

29・30は③グリッド37井戸出土。29は備前の擂鉢。30は絵唐津皿。

31は④グリッド40土坑出土。回転糸切りをした底の厚い土師皿。

32は④グリッドV9土坑出土。3脚の付く土師器盤。口縁部に煤付着。

2. 1区北半トレンチ出土土器（北西屋敷地の遺構出土土器）

33・34は⑨-1トレンチ2石敷出土。軟質施釉陶器の行平鍋蓋片と34染付皿片。

35～44は⑨-2トレンチ2石敷出土。35は瓦質土器羽釜。36は焼締陶器の鉢。37は丹波の通い徳利。38はイッチン掛けした灰釉土瓶蓋。39は瀬戸美濃系の灰釉大皿。40～42は染付蓋。40は通常の肥前系磁器より光沢があり、下面に「安政年製」と染付する。43・44は白磁の紅皿。外面型押し成形で透明釉が内面から外面の途中までかかる。

45はA-3トレンチ87土坑出土。白磁端反皿。16世紀の遺物。

46はC-2トレンチ13土坑出土。染付折縁大皿。百子堂図を描く。

47はC-5トレンチ49土坑出土。龍泉窯系青磁。細い線刻の蓮弁紋を施す。

48・49はC-5トレンチ52土坑出土。48は土師質十能。先端は欠ける。49は瓦質の置き炬燧状の製品。

50～53はC-5トレンチ包含層出土。50は瀬戸美濃系の灰釉陶器丸碗。51は土製品の面模。土を入れると菊花の型抜きができる。52は黄瀬戸風の製品。蓋かミニチュア製品か。53は透明釉土師器の灯明具である短檠の柄。

54はC-7トレンチ22ピット出土。土師皿の小皿。

55はD-4トレンチ出土。焼塩壺の底に穴があり、転用植木鉢か。

56～58はE-8トレンチ等にまたがる73土坑出土。56は透明釉を塗布した両手鍋。57は灰釉を塗布した鉢で、高台内に「魚」「二月」と推定される墨書がある。58は明石の擂鉢。側面底部近くに「久喜」の刻印あり。

59～61はE-8トレンチ他の73土坑。59は波佐見焼の染付ひだ皿。60は染付で外面に江南春の詩文と絵を配す。61は伊予の群中十錦とみられる端反小碗。赤い色で底には染付銘をいれる。

62はE-8トレンチ他の79土坑出土。62唐津の皿。胎土目で、低い三日月高台。

63～72はE-8トレンチ他の80土坑出土。63は備前の徳利。64は高台のある擂鉢。65は唐津の皿。66は透明釉土師器の灯明皿。67は瀬戸美濃系灰釉丸碗。68御深井釉木瓜碗とみられる製品。69は志野織部の筒形碗。70は青磁染付蓋。71は瀬戸美濃系筒形碗。72は肥前系染付鉢。

73～80はE-8他の2層出土。73は土師皿。灯明皿として使用。74は越前とみられるお衛黒壺。内面に鉄分大量付着。75は唐津の猪口。76は灰釉の猪口。77は瀬戸美濃系の水鉢。灰釉に鉄釉を流し掛ける。78は色絵丸碗。79は陶胎染付の拳骨茶碗か。80は波佐見焼の染付蓋。

81はE-9トレンチ29土坑出土。唐津の刷毛目鉢。

82はE-9トレンチ39土坑出土の色絵小壺。側面の対象の位置に赤い色絵で羽子板と羽を2つずつ描く。

83はE-9トレンチ74土坑出土の染付丸碗。外面に上から順に三段に分けて、市松紋と四方陣紋、氷列紋を描く。

84はE-10トレンチ15土坑出土の土師皿。

85はE-10トレンチ16ピット出土の土師皿。

86はE-10トレンチ42石溜り出土の土師器。寛永通宝の青海波紋側を描く。

87はE-10トレンチ53土坑出土。納涼棚のようなものを描く青花皿ないし染付皿。

88はE-10トレンチ1層出土の丹波擂鉢。

89はE-11トレンチ他の17土坑出土。備前焼の仰籠形の鉢で、水差とみられる製品。

90・91はE-11トレンチ24土坑出土。90は土師皿で、灯明皿として使用。91は白磁のひだ皿。

92はE-11トレンチ他30土坑出土の土師皿。

93～95はE-11トレンチ他36土坑出土。93は土師質の中皿。94は唐津の皿。灰釉で表面に黒い粒が発色する。95は唐津焼の底部を打ち欠いた円盤状土製品。

96・97はE-11トレンチ他包含層出土。96は唐津底部に墨書で「□」を書く。97は鼠志野の練上手碗底部。

98・99はF-2トレンチ19土坑出土。98は瀬戸美濃系摺絵蟹皿。99は青磁染付。

100・101はF-2トレンチ23石組遺構出土。100は染付片。101は素焼き陶器片。

102・103はF-2トレンチ47土坑出土。102が志野焼風のひだ皿。貫入が明瞭で、底部に高台より高い目跡が融着したままになっている。103は青磁に上絵付けで赤い色を塗る。

104はF-2トレンチ55土坑出土。絵志野の香茶碗底。

105・106はF-2トレンチ59土坑出土。105は白い釉の小杯。106は灰釉碗。二次焼成を受けて白くなつたものと推定される。

107～110はF-2トレンチ64石組井戸出土。107は土師皿で、灯明皿として使用。108は瀬戸美濃系の丸皿。109は景德鎮の青花端反碗の口縁部片。110は灰釉碗の口縁部片。鉄絵の一部が

みえ、京信楽系の湯呑か。古い遺物で16世紀末～17世紀初頭、新しい遺物で18世紀後半か。
111はF-2トレンチ88土坑出土。土師質大甕。片岩を含む在地生産品。高さ57.2cm、口縁部径51.2cmで、口縁部は肥厚する。

112～114はF-3トレンチ21土坑出土。112・113は唐津の折縁皿。114は薄手の擂鉢。明るい黄土色で胎土は粗く、表面がハゼる。

115はG-5トレンチ32土坑出土の土師皿。

116・117はG-5トレンチ37井戸出土。116は唐津皿。透明釉を塗布し、砂目跡が残る。117は白磁風の底に染付銘「大明成化年製」と書く。

118・119はG-6トレンチ石組井戸出土。118は胎土が粗く白色の釉を塗る基筒底片。漳州窯系か。119は景德鎮の青花皿片。獅子紋を描く。高台は内向きの断面三角形で、疊付無釉。周辺に砂付着。高台内放射状ケズリ痕あり。

120はG-9トレンチ4土坑出土。眞須手風の白釉陶器で、深い丸碗形の製品。

121はG-9トレンチ6土坑出土。刷毛目碗。

122はG-9トレンチ8土坑出土。底の丸い土師皿。末期の瓦器塊に形状が近い。

123はG-9トレンチ38石組井戸出土。唐津の削り出し三日月高台。

124～126はG-10トレンチ3土坑出土。124は染付荒磯紋仏飯器。白い釉のかからない部分は褐色を呈する。125は瑠璃釉の小碗。底部に「大明口化年製」銘。126は印花紋のある白磁で、高台内に染付で二重圓線と「大明口化年□」銘を入れる。高台には砂が付着し、内側にカンナ目がみられる。輸入磁器と考えられる。

127はH-3トレンチ2土坑出土の土師質落とし蓋。

3.1区南半トレンチ出土土器（南西屋敷地の遺構出土土器）

128は⑧-1トレンチ4溝出土。焼締陶器の匣鉢転用植木鉢。底の穴は打ち欠いている。

129はC-1トレンチ他の17土坑出土の灰釉土瓶。「達三巴…」と鉄釉文字を書く。

130はC-1トレンチ他18溝出土の灰釉刷毛目土瓶。注口部は屈曲する。

131～136はC-1トレンチ他22小溝東端の窪み出土。131～133は土師皿。131・132は灯明皿として使用。134は灰釉丸碗で底部にも釉をかける。高台に砂目跡あり。135は染付鳥形香合蓋。136は波佐見焼の一重網目紋丸碗。色調が暗く、厚手で、見込みに降灰あり。

137はC-2トレンチ出土の素焼きの涼炉片。表面に「清泉松白」「口玄」と線描きする。

138・139はC-2～E-2トレンチ包含層出土。窯道具の匣鉢と考えられる製品。

140～147はE-1トレンチ他13土坑出土。140は瓦器塊。高台は無い。141は瓦質火鉢。142・143は灰釉の水注か。142は覆い部に鉄絵、143は草花紋と「本山」という文字を型押しで浮き出させる。144は肥前系色絵の蓋付き鉢。145～147は染付。145は蛇の目凹形高台の皿。146は筒形碗。147は捻り紋の小塊。

148はE-1トレンチ1層出土。明石の転用植木鉢。側面底部付近に「久喜」の刻印あり。

149はE-2トレンチ3ピット出土。白磁の紅皿。

150はE-2トレンチ7土坑出土。土師皿。

151はE-8トレンチ他79土坑出土。焼締陶器小壺。底部に「土」と線刻する。

152・153はF-1 トレンチ8暗渠出土。152は染付薊紋蓋。153は唐草紋を描く。

154・155はF-1 トレンチ包含層出土。154は鉄軸の土瓶落とし蓋。155は唐津の皿。

156はF-2 トレンチ8ピット出土。土製品の面模。笠をもつ西行法師を象る。

157・158はG-2 トレンチ14土坑出土。京信楽系の灰釉製品。157は灯明皿でハリ支え痕とクシ目あり。158は小杉茶碗の形状をした無紋の碗。

159は焼締陶器の大皿ないし鉢。胎土が粗く、表面はやや明るい褐色を呈す。

160はG-3 トレンチ3土坑出土。須恵器壺甕類の口縁部。古墳時代の終わり頃の製品。

161・162はG-3 トレンチ5土坑出土の土師皿。灯明皿として使用。

163～167はG-4 トレンチ石敷の下出土。163は土師質熔烙片か。165～167は染付。165は光沢があり、濃い色調の蓋。166は獅子と花を描く。167は釉が青みがかる大皿。

168～172はG-4 トレンチの2暗渠出土。168は天目茶碗片。169・171・172は染付。169は肥前系の松紋丸碗。171は瀬戸美濃系の広東碗。172は波佐見焼の柴垣紋皿で見込みを蛇の目釉剥ぎする。170は灰釉土鍋蓋。

173・174はG-4 トレンチ包含層出土。173は南紀男山焼染付蓋。外面は上から順に菊花・唐草・花弁を描く。内面に「南紀男山」と鉄軸で針書きする。174は外面白磁で型作りで唐草紋を陽刻し、内面は染付。

175～188は1区で出土した近代の裁判所関連遺物。175は内面と底が無釉の筒形鉢で、径18.4cm、高さ18.6cm。外面は鶴等を描く。底部に「裁判所」と墨書きされる。176～178は近代の小壺。176は「宮内省御用達櫻正宗」、177は「白鶴」、178は「日本魂」という文字等を印刷する。

179は高台内に「東洋軒平八製」と書かれた染付碗。180は「日本勧業銀行和歌山支店」と印刷する。181～183はいわゆる軍国茶碗。181は戦車と旭日旗、182は飛行機と旭日旗を描く。183はヘルメットと「記念」の文字がみられる。184は磁器製の鼻煙壺。片面は花紋、もう片面には「御料人知」等と書かれている。184は近世のものか近代のものか不明。185～188はガラス瓶。185は「長谷川小児科院」という文字と目盛の入った薬瓶。186は「和歌山市立診療院」という文字と目盛の入った薬瓶。187は「東瓦町三田牛乳店」「消毒全乳〇・九分」という文字と目盛の入った瓶とそれに合う磁器の蓋。鉄の針金で蓋を止めていたものと考えられる。188は「三年坂堀牛乳店電話五三六番」「消毒全乳一・八分」という文字が入っている。

〈北西屋敷地〉

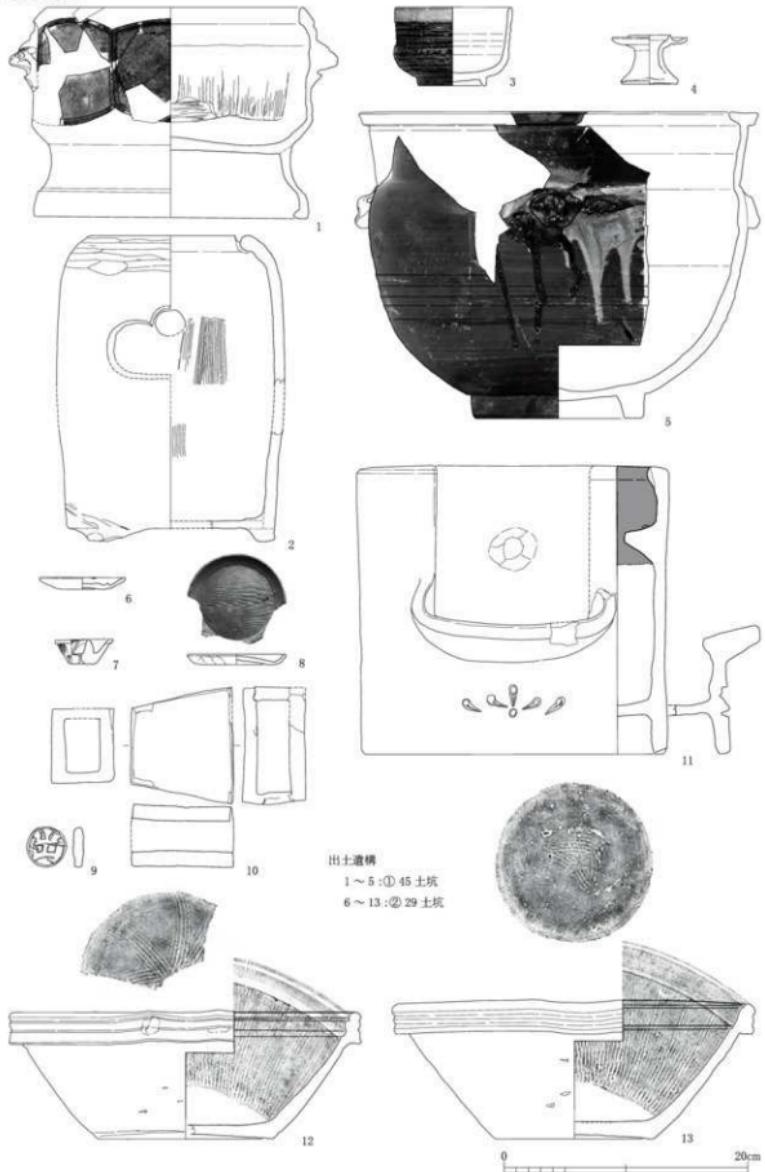


図46 1区 北半（北西屋敷地）出土土器 1

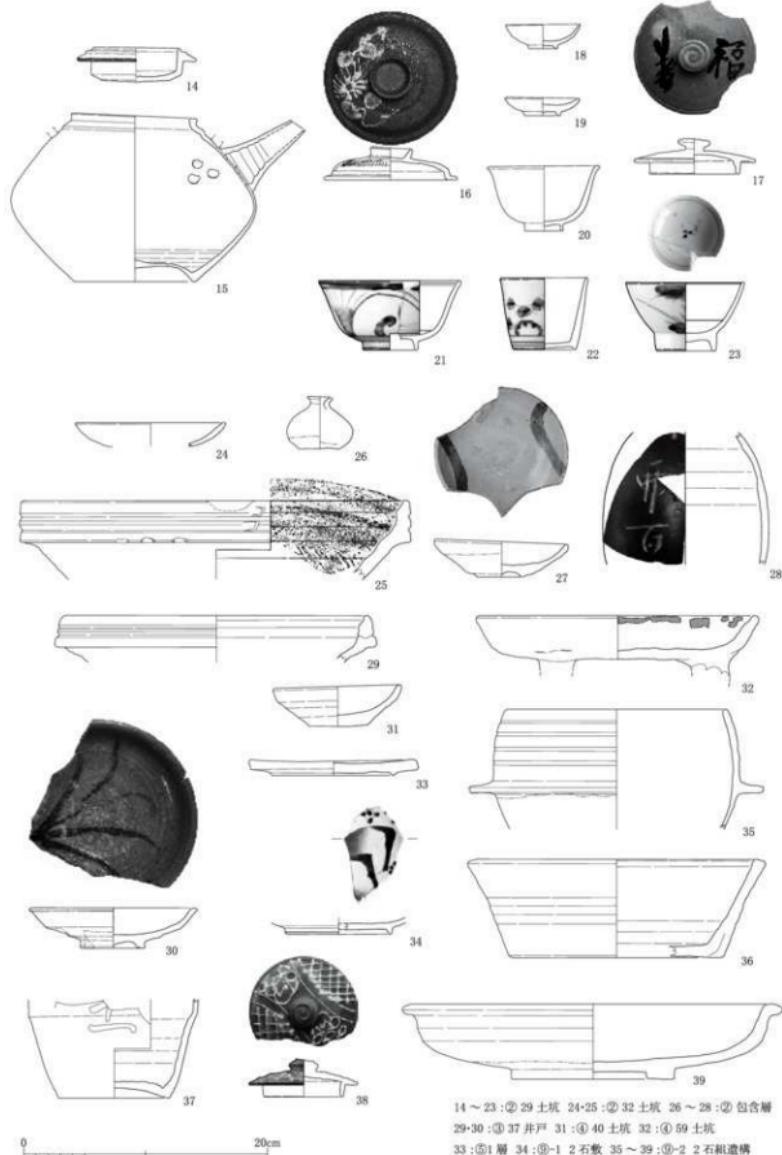


図47-1区 北半（北西屋敷地）出土土器2

14 ~ 23 : ② 土坑
24~25 : ② 土坑
26 ~ 28 : ② 包含層
29~30 : ③ 井戸
31 : ④ 土坑
32 : ⑤ 土坑
33 : ⑤ 1 層
34 : ⑤ 1~2 石敷
35 ~ 39 : ⑥ 2~2 石組造構

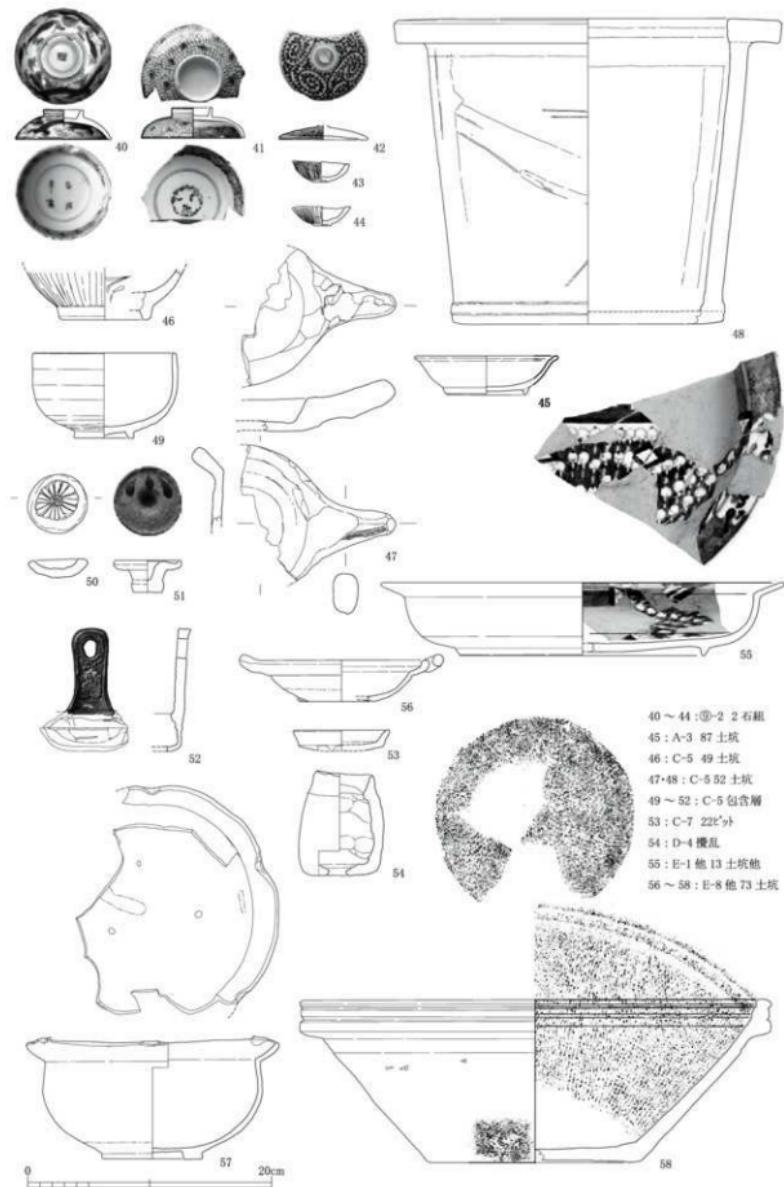


図48 1区北半（北西屋敷地）出土土器3



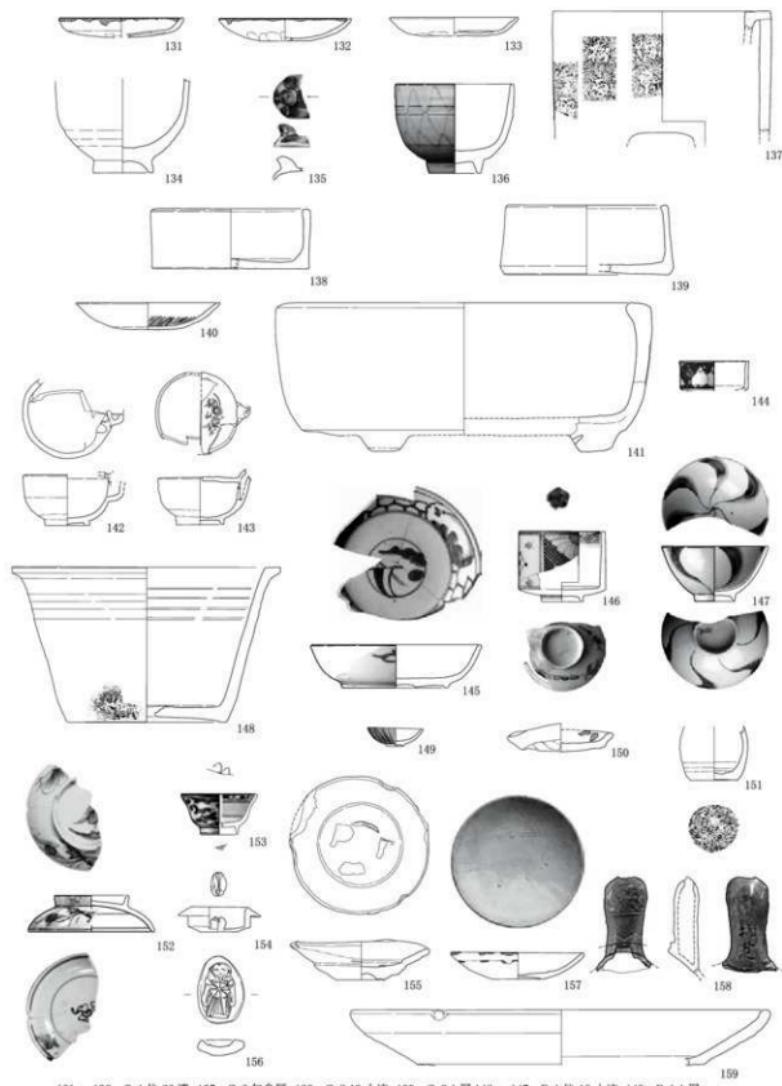
図49 1区北半（北西屋敷地）出土土器4



図50 1区北半（北西屋敷地）出土土器5



图51 1区北半(北西屋敷地)出土土器6・南半(南西屋敷地)出土土器



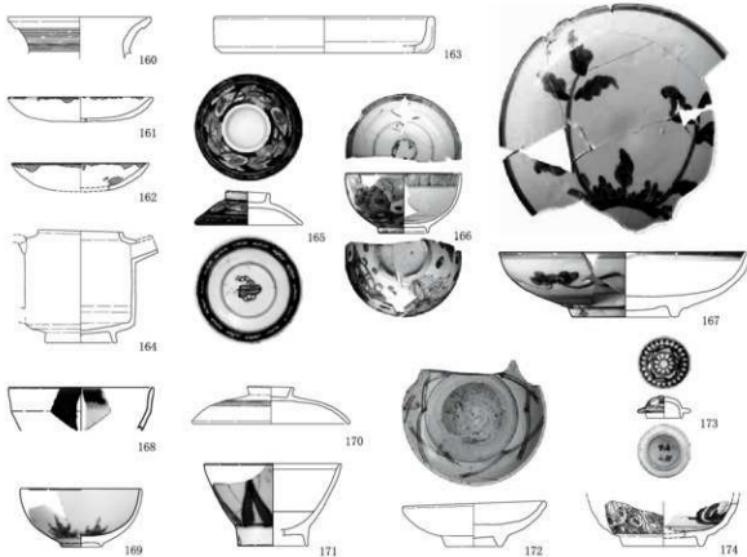
131 ~ 136 : C-1 他 22 壶 137 : C-2 包含層 138 : C-2 13 土坑 139 : C-2 1 層 140 ~ 147 : E-1 他 13 土坑 148 : E-1 層

149 : E-2 3E' 150 : E-2 7 土坑 151 : E-8 他 79 土坑 152~153 : F-1 8 暗渠 154~155 : F-1 包含層 156 : F-2 8E' 157~158 : G-2 14 土坑 159 : G-2 15 壓狀遺構

0

20cm

图52 1区南半(南西屋敷地)出土土器2



160:G-3 3 土坑 161-162 : G-3.5 土坑 163 ~ 167 : G-4 石敷の下 168 ~ 172 : G-4.2 墓室 173-174 : G-4 包含層

〈近代の裁判所関連遺物〉

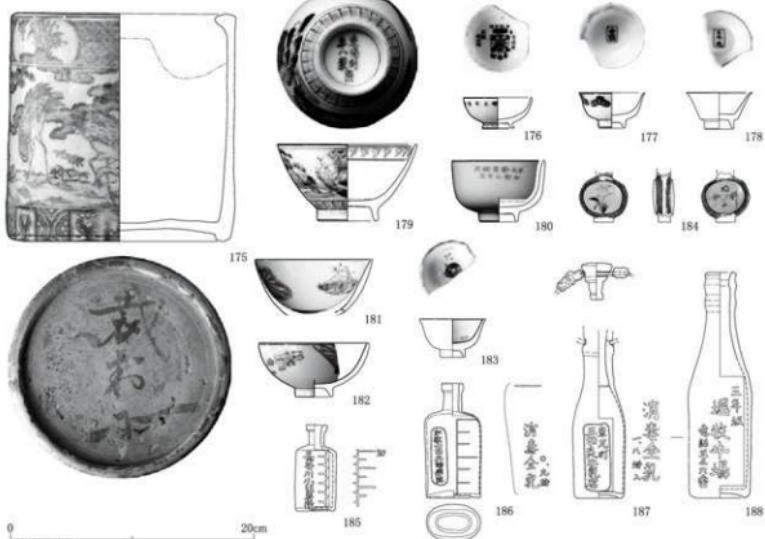


図53 1区南半(南西屋敷地)出土土器3 他

第2節 2区出土土器

1. 2区北半西部（北西屋敷地）出土土器

189はE-3トレンチ3土坑出土の染付御神酒徳利。

190・191はE-3トレンチ4土坑出土。190は染付水滴。191は黒釉の鳥形香合。内面に若干の金箔が付着しており、いわゆる御庭焼の可能性も考えられる。

192はE-3トレンチ5土坑出土。三田焼ないし瑞芝焼の魚紋四方皿。

193・194はE-3トレンチ包含層出土。193は肥前系の御神酒徳利。194は灰釉形口鉢。

2. 2区北半東部（北東屋敷地）出土土器

195はE-12トレンチ7土坑出土。灰釉陶器蓋。摘みが尖る。上面に装飾文字を入れる。

196はE-12トレンチ9土坑出土。灰釉行平鍋の蓋。瑞芝焼の可能性がある。

197～244はE-12トレンチの10～19炭混土坑群出土。197・198は窯道具。197は焼締陶器の匣蓋。198は陶製円盤に磁器製脚を付けた脚付焼き台。199～201は透明釉土師皿。202は魚形の手塙皿で、鱗の部分に赤い色を塗布する。203～206はミニチュア製品の内面縁釉碗と施釉向付、涼炉。207は涼炉片。208はミニチュアの擂鉢。透明釉を塗布する。209は備前焼の傾摺鉢。210は小さめの擂鉢。焼成甘く、擂り目深く出土時は底が抜けており、在地の試行品か。211は明石焼とみられる擂鉢。見込みは放射線状のクシ目を施す。212は灰釉小型無頭壺。213・214は京信楽系の灰釉陶器の端反碗と灯明皿。215は素焼陶器の蓋で、上面に黒色釉をイッチン掛け風に施す。216は素焼きの土瓶蓋。217は灰釉土瓶。肩に鉄軸の模様が描かれている。218は灰釉にイッチン掛けで紋様を施す。220は灰釉の土瓶蓋。219と221は鉄軸に白釉を流し掛ける。222～227はミニチュアの陶磁器。222は鉄軸イッチン掛けの行平鍋の蓋を表現する。223は鉄釉行平鍋の身を表現している。224・225はミニチュアの灰釉土瓶蓋と灰釉行平鍋の身。226・227は小型の鉄釉塗布する素焼きの行平鍋身。228～231は素焼きの行平鍋で、トビガンナや印花、イッチン掛け等で飾る。232～235は素焼きで鉄軸を塗布する行平鍋の身。236は灰釉羽釜。237は染付皿。238は紅皿のミニチュア土製品。239は瑠璃釉の異形壺。240は白磁の徳利。241は粗雑な色絵皿。242は卵殻手の小型色絵端反碗。243・244は白磁。上絵付けの材料か。

245～253はE-12トレンチ24土坑出土。245・246は素焼きの目皿と涼炉下半部。247は黄瀬戸風のミニチュア皿。248は鋸釉行平鍋蓋。249は素焼きに鉄軸とイッchin掛けする行平鍋蓋。

254はE-12トレンチ26土坑出土。色絵仏飯器であるが、上絵付けが稚拙である。

255はE-12トレンチ27土坑出土。土師皿で、灯明皿として使用。

256はE-12トレンチ28土坑出土。丸みのある焼塙壺蓋。

257～262はE-12トレンチ包含層出土。257は土師皿。258・259は焼塙壺蓋。261は印花で飾る、素焼き陶器の行平鍋蓋。262は鉄軸のミニチュア蓋。

263・264はE-13トレンチ25土坑出土。263はお歯黒壺。鉄分付着。264は灰釉柄杓。

3. 2区南半東部（南東屋敷地）出土土器

265～268はE-6トレンチ2層出土。265・266は焼塙壺。267は備前焼とみられる小壺。268は産地不明の壺。

<北西屋敷地>



<北東屋敷地>

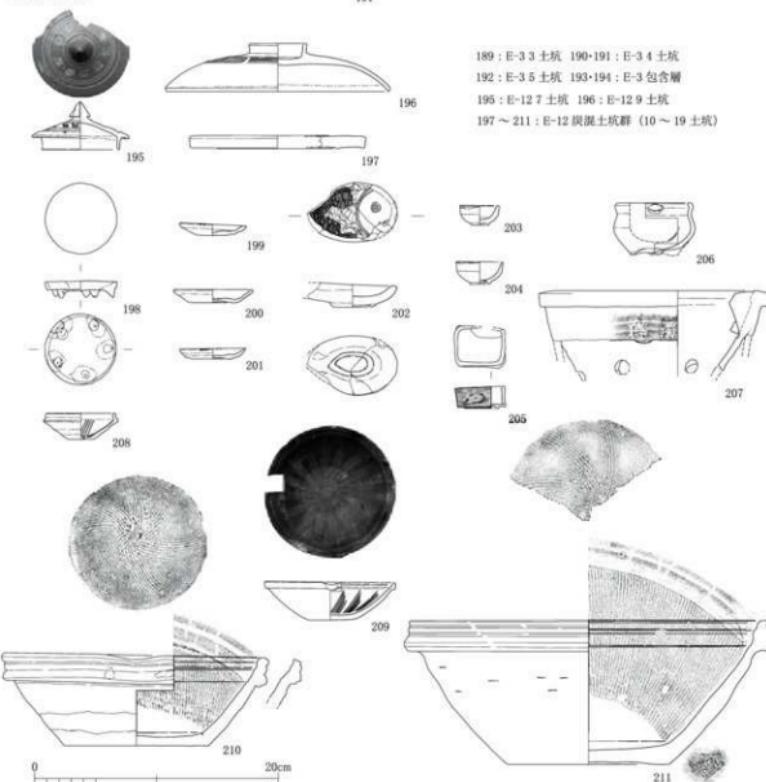


図54 2区北半(北西・北東屋敷地)出土土器 1

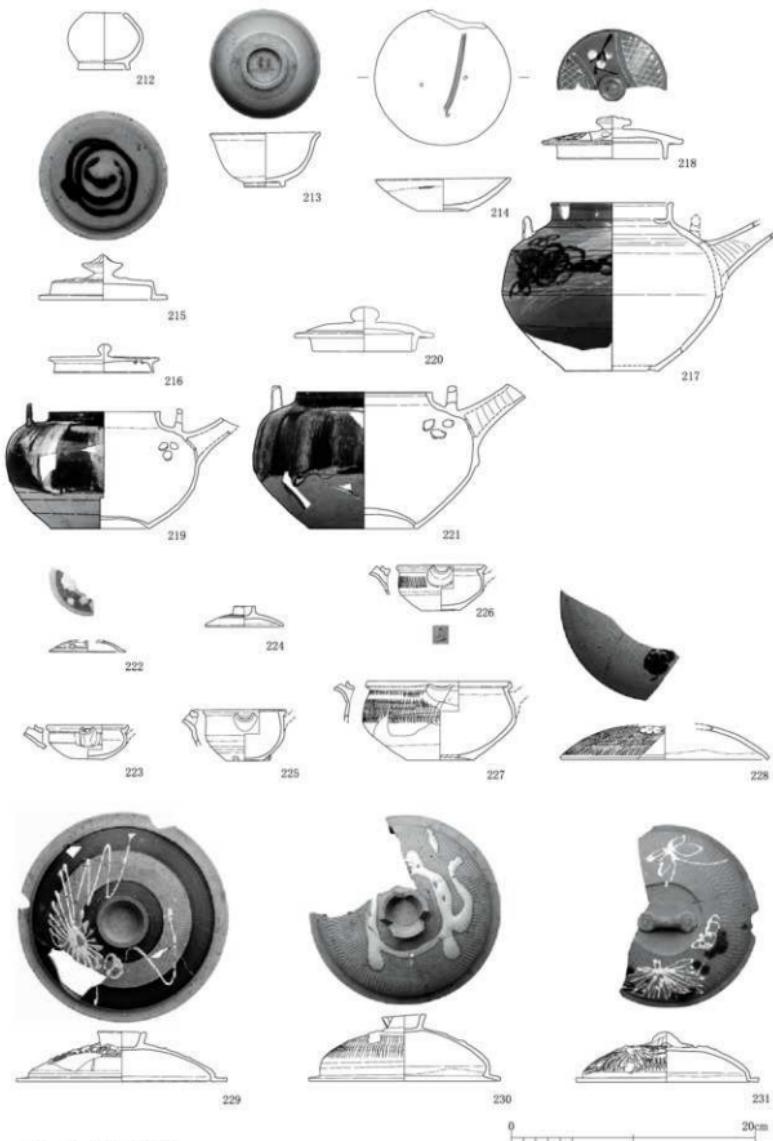
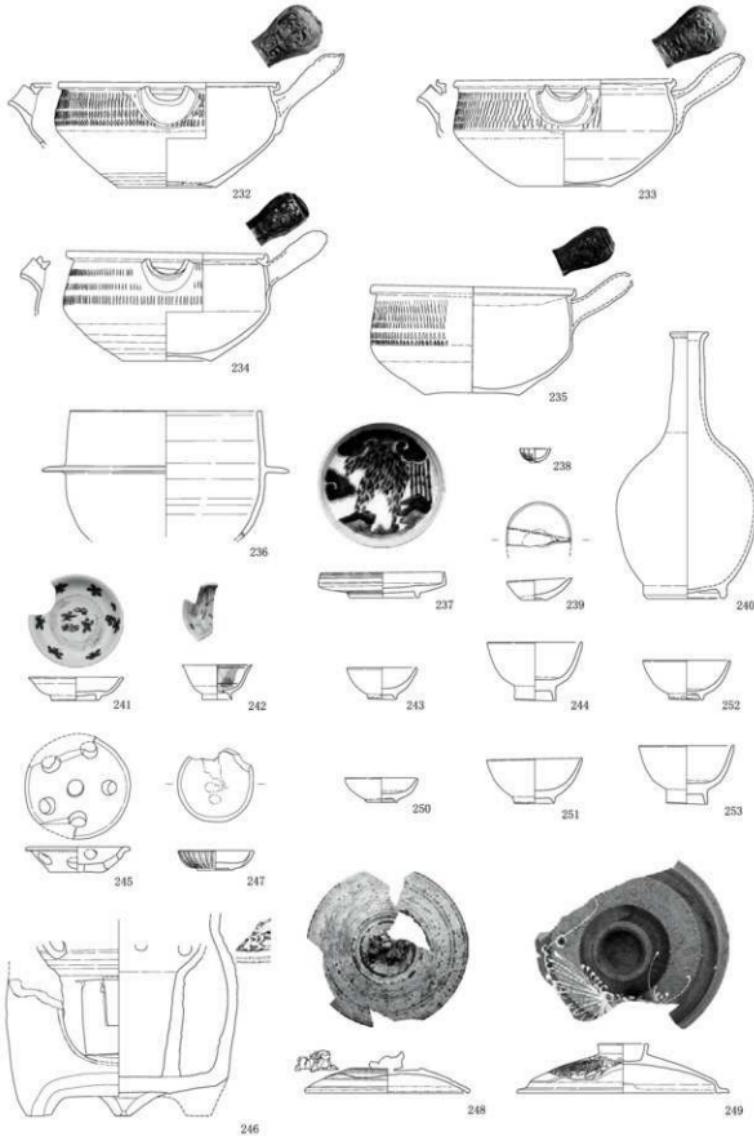


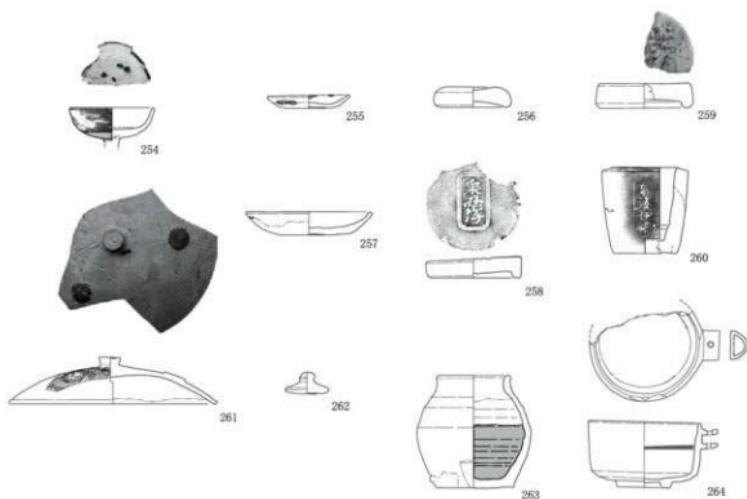
図55 2区北半（北東屋敷地）出土土器2



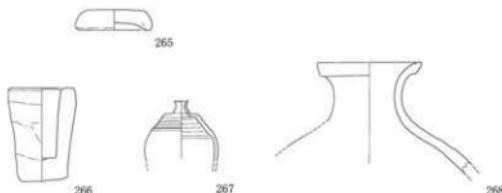
232 ~ 244 : E-12 炭混土坑群 245 ~ 253 : E-12 24 土坑

0 20cm

图56 2区北半（北东屋敷地）出土土器3



〈南東屋敷地〉



- 254 : E-12 26 土坑
- 255 : E-12 27 土坑
- 256 : E-12 28 土坑
- 257 ~ 262 : E-12 包含層
- 263-264 : E-13 25 土坑
- 265 ~ 268 : E-6 2 層



図57 2区北半(北東屋敷地)出土土器4・南半(南東屋敷地)出土土器

第3節 3区出土土器

3区の出土土器について、まず各遺構面の遺構番号順に、次に包含層別に記述する。

1. 第1面検出遺構出土土器

第1面では、江戸時代後期から幕末の土器片が多数出土している。しかし、遺構に帰属する遺物ではなく、攪乱・混入している土器が多数を占めている。なお、近現代の遺物は1区のように多数出土していない。

269は25石敷出土の肥前系型打ち皿。半面で透明釉と呉須を掛け分ける。遺構の年代を示す土器ではない。

270～274は36土坑出土。270は灰釉平碗。胎土は非常に粗い。271は鉄釉糸目土瓶。灰釉を流し掛ける。272は灰釉水鉢。紋様が粗く、凹凸が大きい。273は染付の深い丸碗。呉須が濃い。274は青白磁風の釉薬の小壺。

2. 第2面検出遺構出土土器

第2面出土土器は275～435である。19世紀の遺物が多く、肥前系の染付丸碗・瀬戸美濃系の染付端反碗、灰釉・鉄釉の行平鍋・土瓶、焼き縮め陶器の擂鉢・匣鉢状の鉢、透明釉を塗布した灯明具類等が多数出土している。なお、3区西部では第3面相当の遺構が同時検出されており、17世紀の遺物が確認される。

275～278は74土坑出土。275は焼締陶器の擂鉢。表面は鉄釉のようなものを塗布し、擣り目は側面から見込みへ続く。276は染付徳利。丸太屋という屋号が釉剥ぎされる。277は染付の小型容器蓋。278は遺構の下層から出土した染付碗である。

279は75土坑出土の透明釉土師皿。口縁部に煤が微妙に付着する。

280～292は82土坑出土。在地の生産品が多い。280・281は透明釉土師皿。灯明皿として使用。282・283は焼締陶器の鉢。胎土粗く、体部に筋が多く入り、底には離れ砂が残る。284は素焼きに鉄釉を塗布する行平鍋。285はイッチン掛けで飾る灰釉土瓶。286・287は鉄釉通い徳利で、吉・廣の文字が共通する。286は大谷焼で、釉を剥いで文字を入れる。「吉・醤油・廣・丑口」という文字が確認できる。287は丹波焼で、イッチン掛けで文字を入れる。「香・廣・南・吉」という文字が確認できる。288～290はミニチュア製品。288は素焼き焜爐、289は黄瀬戸風で行平鍋の蓋、290は灰釉イッchin掛けで通い徳利を表現する。291はイッchin掛けする小型の素焼き陶器蓋。292は灰釉鉄絵蘿紋の把手付き小型皿。293・294は麦藁手の蓋と身。青と薄茶色で描き、割れ目を焼継ぎする。295は胎土が粗く、粗雑に描く色絵の小碗。296～302は白磁の蓋と碗。上絵付けをするための素材の可能性も考えられる。

303～313は91土坑出土。303は鉄釉の蓋で、口縁部に黒色固形物が付着する。304・305は京信楽系の小杉茶碗と色絵笹紋碗。小振りで湯呑としての用途が考えられている。306は灰釉土瓶。307は素焼きに鉄釉を塗布する行平鍋。308は染付輪花碗。309～312は染付。309は鶴と松を白抜きにする碗。310は瀬戸美濃系の樓閣山水紋小型端反碗。煎茶用の湯呑と考えられる。311は肥前系の波状口縁鉢。312は口縁部が大きく湾曲する鉢。313は青磁の牛形製品。瓦牛と同様の形状をしている。

314は92土坑出土の信楽の大甕。

315・316は118土坑出土。315はミニチュアの黄瀬戸風徳利。316は麦藁手の蓋。

317は土坑120出土として取上げた土師器大甕であるが、窯状遺構193に関連する資料である。片岩を含む在地生産品で、F-2トレンド88土坑出土品111と同様のものと推定される。

318・319は142石組出土。318は瀬戸美濃系の灰釉折縁皿、319は唐津の壺。

320は147土坑出土の天目茶碗片。

321～336は155焼土坑出土。大量の瓦に混じって少量の土器が出土した。321は丹波の甕。322は蛇の目釉剥ぎをする灰釉丸皿。323は天目茶碗。324は唐津の灰釉丸碗。325は内面には黒い釉、口縁部から外面は白い釉をかける碗。326・327は唐津の大皿。口縁部を曲げ、藁灰釉ないし灰釉に鉄絵を施す。328～333は肥前系の染付で草を描くものが多く、328は皿、330は小坏、331は仏飯器。329は一重網目紋に魚紋の変化したものを描く碗。332は雷紋縁の香炉。333は瓶の口縁部片。334は白磁碗。335・336は青磁で、335は段皿、336は香炉。17世紀中葉～後葉にかけての遺物と考えられる。

337は163土坑出土の鉄釉徳利で、内部に鉄塊が入っている。鉄壺壺の一種か。

338～390は165土坑出土。在地生産品とみられる製品が非常に多い。338は灰釉灯明受皿。339は鉄釉の台付灯明受皿。340は瑞芝焼涼炉。精良な素焼き陶器で、体部に「瑞芝」銘の刻印を押す。足は三脚となる。341は土師質の猿形土製品。瓦猿と同様の形状で、下方から孔をあける。342は瓦質の台付盤。343は焼締陶器の匣蓋。344は越前の可能性がある焼締陶器のお衛黒壺。内面に鉄付着。345は堺焼の可能性がある焼締陶器の鉢を転用した植木鉢。346～348は灰釉端反小碗。349は染付に上絵付けを施す壇重。350は灰釉の柄杓。内面に鉄釉で目盛の線を入れる。351は瀬戸美濃系とみられる灰釉掛絵瓶盥。352は灰釉蓋。353・354は灰釉香炉。355・356は灰釉火落とし。口縁部の釉薬が剥がれているが、敲打による使用痕かは不明。357～361は灰釉行平鍋蓋。やや緑色に発色するものが多い。362・363は外面素焼きで、全面にトピカンナを施す。内面は透明釉を塗布し、一部鉄絵がみられる。364～371は灰釉行平滑の身。364～367は把手上面はあまり明瞭ではなく、下面は無紋。368・369は把手上面が机に向かう人物らしき紋様で、下面に「化物堂」銘が入る。368は釉は白色味が強く、銘は顛書のような字体を型押しするが、369は釉は緑色味が強く、字は線刻する。370は把手上面が花唐草紋で、下面に「化物堂」銘を線刻する。371は底に墨書きがみられる。372～378は灰釉土瓶の蓋。灰釉行平鍋と釉薬は類似するが、やや緑色味が強いものが多く、摘みの形状は様々である。379～382は灰釉土瓶の身の破片。383は灰釉鉄絵土瓶。384は灰釉植木鉢。焼成前に底部に孔をあける。385～388は銅緑釉瓶掛け。様々な紋様パターンの製品が出土している。389は灰釉水鉢転用植木鉢。390は染付蓋。雲気紋のようなものと寿の字を散らす。

391は166土坑出土の透明釉土師器秉燭。

392～409は167土坑出土。392～397は透明釉土師皿で、灯明皿として使用。398は精製の土師皿。399～401は透明釉灯明受皿。392～397と組み灯籠としたものと考えられる。402は土師質秉燭。403は備前の肩衝茶入れか。404は土師質の火消し壺の蓋。405は焙烙。406は染付の猪口。407は飴釉を塗布した土師質の瓶で、側面3面型作りで底部を充填する。中国の饕餮紋風の紋様を飾る。産地不明だが、中国宜興窯の影響を受けた製品か。408・409は染付碗蓋。

410～415は178土坑出土。410・411は焼塙壺。粘土を輪積みにし、手捏ねで作る。412は土

師皿で、灯明皿として使用。413は丹波の擂鉢。414は刷毛目皿。415は胎土目のある灰釉皿。

416は182土坑出土。素焼きに鉄釉を塗布する行平鍋の蓋。やや小型。

417～453は199土坑出土。417は土師皿。灯明皿として使用。418は焼成前に口縁部の抉りと底部の小孔をあける土師皿。底部小孔の周りは黒色化し、口縁部の抉り付近は煤が付着する。灯明具の受皿と考えられる。419は焰焰。420は備前の大皿片。421～426は灰釉陶器。421は瀬戸美濃系の丸碗。422は京信楽系丸碗。423は瀬戸美濃系の鉢。424～426は京信楽系の小杉碗・腰折れ碗「せんじ」。427は唐津の刷毛目碗。428は瀬戸美濃系の飴釉灰落とし。口縁部全面に敲打痕あり。429は鉄釉の蓋。430は備前の油壺。431は京焼風の灰釉鉄絵筒形鉢。432は唐津刷毛目鉢。433は丹波の水屋甕。434・435は大谷焼の徳利で、434は糸目徳利。435は底に「田」のような刻印を押す。436～438は陶胎染付で、436は香炉、437・438は丸碗。439～448は染付。439～442は丸碗で、やや小型のものが多い。443・444は仏飯器。445は鉢。446は皿。447は鍋島と推定される破片で高台の高さは2.5cm。448は口縁部が屈曲する皿で、貫入が目立つ。449は内面に紋様を刻む青磁鉢。450は青磁染付の輪花皿。451～453は白磁。451は碗で、452は香炉、453は蛇の目釉剥ぎをする菊皿。

454・455は223土坑出土。454は焼締陶器鉢で、口縁部外面カキメ調整、底部付近ケズリ調整。455は丹波とみられる甕で、外面上半カキメ、内面に泥書きをかける。

3. 第3面検出遺構出土土器

第3面検出遺構及び第3面で確認した整地土の出土土器は456～662である。3区東部では18世紀から19世紀前葉までの遺構が検出され、多量の遺物が確認された。284・300・316・323土坑等から染付や灰釉・鉄釉の道具が出土している。3区西半では17世紀の遺物が多数出土している。155焼土坑・373土坑等では唐津や瀬戸美濃系の皿・天目茶碗等が出土している。

456・457は243土坑出土の唐津の皿。457は絵唐津。

458は248土坑出土の焼塙壺の蓋。

459は261土坑出土の青白磁の壺片。

460・461は264土坑出土。460は焰焰。461はやや小型の擂鉢。見込みのクシ目は放射状。

462はミニチュアの羽釜。内面と外面上半に縁釉をかける。

463は276土坑出土の唐草紋色絵丸碗。

464～470は277土坑出土。在地産とみられる製品が多い。464・465は焼塙壺で、蓋の上面に「泉州岸」銘を入れる。466は素焼きの涼炉で、「風流自在」と刻書し、カキメを施す。467は壺甕類の底部で、内面は泥書きを塗布し、底は離れ砂が付着。468は焼締陶器の擂鉢。見込みのクシ目は×形。469は瑞芝焼の鉄釉行平鍋把手。上面は龍紋、下面に「瑞芝」銘の入った型で作る。470は灰釉の香炉。底に「キス」と墨書きがある。471は鉄釉を流し掛ける灰釉水鉢。472は染付鉢で、外面青海波紋、内面に麒麟紋。473は黒釉双耳瓶。

474・475は279土坑出土。474は素焼きに鉄釉を塗布する行平鍋。トビカンナが細かく、底が平坦に近い。475は白磁徳利。

476～479は283土坑出土。476は焼締陶器鉢を転用した植木鉢。477は焼締陶器の鉢。478は素焼きに鉄釉を塗布する行平鍋。トビカンナが細かく、底が平坦に近い。479は瑞芝焼の鉄釉行

平鍋把手。上面は龍紋、下面是「瑞芝」銘の入った型で作る。480・481は素焼き急須の蓋と身。把手の下面に「清」と刻印する。482は瀬戸美濃系の染付端反小碗。山水楼閣紋で、10客分出土している。

483～491は284土坑出土。483は大型の土師質羽釜。484は素焼きの涼炉で窓の脇に刻印を押す。485は瓦質の焜炉。486は灰釉香炉蓋。隣接する277土坑の香炉470と組み合う可能性がある。487は灰釉行平鍋の把手。下面には「化物堂」銘の入った型で作られる。488は丹波の甕。

489～491は染付。489は筒状の丸碗で、割れた面に焼継ぎをするほか、内面の側面に焼継ぎの白玉粉で梅枝紋を描く。490は網目に福の字を配した筒状の丸碗。高台脇に「五良太甫貞勝瑞造」染付銘が入る。491は山水楼閣圖を描いた柑子形の口をもつ瓶。

492～495は286土坑出土。二次焼成を受けた茶道具とみられるものが出土している。492は備前の水差か。493は唐津の白天目。494は鉄釉の丸碗。495は瀬戸美濃の天目茶碗。

496は288土坑出土の備前の鉢か。

497は290土坑出土の備前の水差し。

498～512は300土坑出土。498は内面透明釉の土師皿で、灯明皿として使用。499・500は京焼風の灰釉丸碗。501は刷毛目紋蓋。502は京信楽系の色絵小型碗。503は唐津の刷毛目鉢。504は大谷焼の可能性のある徳利。505は黒釉の油壺。506～510は染付。506は蓋、507は丸碗、508・509は猪口、510は鉢。511と512は青味のある釉の製品。511は青磁香炉、512は白磁碗と考えている。

513～552は316土坑出土。513は焙烙。514は白色系の精製土師皿で中央が黒色化する。515は内面に透明釉をかける土師質土器。灯明具かミニチュアの釣瓶か。516は透明釉土師器の灯明皿。517は透明釉土師器の灯明受皿。518は黒釉を流し掛ける灰釉腰折れ碗。519は鉄絵灰釉陶器。520・521は鋳釉の糸目土瓶の蓋と身。522は灰釉汁次。523は陶胎染付碗とみられる。524～546は染付。524は蓋。525～535は丸碗で、薄手の製品が多い。紋様は草花・花蝶・松竹梅・花筏・花唐草紋等を描く。531は内面を蛇の目釉剥ぎする。536・537は猪口。538は型紙摺りの皿。539は仏飯器。540は徳利。541・542は蓋付きの鉢。542・543は皿、545は芙蓉手の鉢。これらは見込みに丁寧な五弁花紋を描くが、544は弁を一つ書き忘れていている。546は鉢。547・548は発色の悪い青磁とみられる。547は仏飯器、548は香炉。549は青磁染付。青磁の色は薄い。550～552はやや青みがかかるが白磁とみられる小杯・猪口・小碗。

553～616は323大型廐棄土坑出土。553は透明釉土師器の灯明受皿。554は透明釉土師器の灯明皿。555は鉄釉小皿。556は透明釉土師器の台付灯明受皿。557は焙烙。外面全面に煤付着。558は土師質の人形。座紺で、顔が残存しない。559は鉢形の焼塩壺。560は褐色と白い胎土の練上手火落とし。口縁部に煙管で敲いたとみられる敲打痕と煤が付着する。561は鋳釉の火鉢状製品。562・563は土師質火消し壺。564～566は焼締陶器の鉢。565・566は底に穿孔し植木鉢として転用する。567～569は焼締陶器の擂鉢。567は見込み放射状クシ目で、側面底部近くに「久喜」銘の刻印をする明石焼の製品。568・569は見込み三角形状のクシ目で、底部に焼台の跡が残る堺焼とみられる製品。570～572は京信楽系の灰釉陶器で、570は簡略な小杉紋を描く。571は無紋の小型小杉碗。572は小型端反碗。573は白釉を流し掛ける鉄釉碗で、現川窯の生産品か。574は灰釉丸碗。575は腰錆碗。576は鉄釉拳骨茶碗。577は鉄絵で松を描く灰釉皿。578・

579は灰釉の蓋と身であるが、579は内面にも釉が掛っている。580・581は大谷焼の香炉と壺。582は錆釉の茶入れ。583は灰釉植木鉢。584は錆釉の脚付鉢で、植木鉢として使用する。585は焼締陶器の輪花鉢で、灰釉ないし自然釉がかかる。586は丹波焼の徳利。錆釉に飴釉を流し掛ける。587は灰釉瓶で綠釉を流し掛けた。588は灰釉急須。底に墨書あり。589は鉄釉鍋。590・591は白釉の土瓶。592は鉄釉の土瓶。593～611は染付で、肥前系が多く、瀬戸美濃系は少ない。593・594は朝顔紋の蓋と丸碗。595は輪郭のみ染付で描く龍のようなものを描いた丸碗。597は内面に宝紋を描く小型碗。598は瀬戸美濃系の端反小碗。599はやや筒状となる丸碗。600は瀬戸美濃系の蓋。601・602は海老紋の蓋と広東碗。603・604は四君子紋の蓋と広東碗。同様の製品の破片が数点みられる。605は千鳥紋の八角皿で、染付は黒味が強い。606は花唐草紋のひだ皿。607は白抜きで唐草紋を描く皿。609は半裁菊花紋の仏飯器。610・611は小型徳利で、610は梅枝紋、611は草花紋を描く。612は染付後に上絵付けする蓋。詩文は色がなくなり、痕跡のみとなる。613・614は小型の白磁蓋と紅皿が深くなったような形状の碗。615は白磁徳利。616は土師質の土鉢。

617～621は324土坑出土。617は内外面菊花紋の小型丸碗。618は松竹梅紋丸碗。619は鉢。620は皿。621は灰釉の象形土製品。

622～624は327土坑出土。622は焼締陶器鉢。623は鉄釉香炉。624は須恵器坏の破片。古墳時代後期～飛鳥時代のものと考えられる。

625は336土坑出土の鉄釉碗。

626・627は345土坑出土。626は天神人形の形をした面模。627は青磁鉢。

628～644は373土坑出土。628は褐色系の土師皿。629～632は白色系の土師皿で、灯明皿として使用。633は全面灰釉に漬け掛けした丸碗で、疊付には胎土目跡が3箇所残る。634は鉄釉が茶色に発色する天目茶碗。635・636は唐津で、636はわずかに鉄絵が確認できる。637～641は染付。637・638は丸碗。639は青白い釉調で、高台は低い。640は小杯。641は脚台状の破片。642は青花・釉裏紅とみられる破片。643・644は青磁の皿と香炉。

645～650は374土坑出土。645～648・650は備前焼風の焼締陶器。645は小型臍徳利、646～648は匝鉢状の鉢。640は鉢。639は土師質の鉢で、内面・側面に煤が付着する。

651～654は374土坑出土。651は絵唐津の草花紋皿。652は灰釉行平鍋の把手。上面の紋様釉がかかり不明瞭で、下面に「化物堂」銘を刻書する。653は綠釉皿。精良な胎土で、内面型押し作り。654は白磁の船形の紅皿。

655～663は378土坑出土。655は鉄釉の灯明受皿。656は褐色の胎土に白色の刷毛目を波状に施す丸碗。現川窯の製品か。657～661は染付。657は蛇の目状に染付する蓋。658は高台断面四角形の丸碗。659は雨降り紋の丸碗、660は二重網目紋の丸碗。661はハツ橋紋の蓋付き鉢。662は青磁染付の蓋。663は白磁の紅皿。

4. 第4面検出遺構出土土器

第4面検出遺構及び整地土出土遺物は664～708である。三の丸の武家屋敷地成立期前後の遺物と、上層からの整地土の遺物が出土している。中世土壙墓群があるが、副葬品はほとんど確認されず、土師皿・瀬戸美濃系灰釉丸碗等が出土している。

664は3面と4面の間に属する、4mメッシュ区画e21の貝殻廃棄土坑内に入っていた褐色系の土師皿。

665は393土坑出土。焼締陶器の匣鉢状の鉢。上層遺構の遺物の可能性あり。

666は398疊密集土坑出土。白色系の土師皿で、灯明皿として使用。

667は402土坑出土。胎土目のある唐津皿。

668は421土壤墓出土の土師質土器片。埋土内には他に瓦器細片が混入している。なお、墓の埋納品としては1035貨幣が出土している。

669～673は423土坑出土。669は白色系の土師皿で、口縁部全体に煤が付着する灯明皿。670は丹波の播鉢。671は備前の播鉢。672は唐津の皿。透明釉を施す。673は肥前系の染付丸碗。

674は435土坑出土。瀬戸美濃系の灰釉丸皿で、見込みに菊紋を押す。

675は436土坑出土。白色系の土師皿。

676は439土坑出土。お歯黒壺で、内部には鉄分が多量に付着する。底は静止糸切りで、砂が若干付着する。

677～680は443土坑出土。677は褐釉の溲瓶。678は信楽系小杉碗の形状をした無紋の製品。679は匣鉢。680は播鉢転用植木鉢。質感は土師質に近く、側面のクシ目が長く、見込みに小さく×字形のクシ目を施す。底部に穿孔する。

681は444土坑出土の天目茶碗

682は454土坑出土の灰釉鉢。

683は456土坑出土。透明釉土師器で、内面に重ね焼きのハリ状のものを3点残しており、灯明受皿として使った可能性が考えられる。

684・685は457土坑出土。684は白磁の紅皿。外面の筋の幅が広く、器壁は薄い。685は黄瀬戸風の釉を塗布した鳩笛。

686～689は460土坑出土。686は錫釉のようなものをかけた灯明受皿。687は錫釉の油壺。

688・689は黄釉・緑釉等で山水を描く交趾焼風の土瓶の蓋と身。

690は461土坑出土。色絵の仏飯器。

691は463土坑出土。藁灰釉をかける唐津の皿。

692は天目茶碗の底を打ち欠いた円盤状土製品

693は492土坑集土の播鉢。口縁部の下には重ね焼き痕あり。

694・695は499土坑出土。694は灰釉汁次。体部に鉄絵の桔梗紋をあしらっている。695は玉縁状の立ち上がる口縁部をもつ染付中皿。

696は516土坑出土。瓦器塊の底部で低い高台と見込みの連結輪状暗紋が確認される。

697は526土坑出土。底部不調整の土師皿で、灯明皿として使用。

698・699は530土坑出土。698は白色系の土師皿で、口縁部全面に煤付着。699は「御壺塩師堺湊伊織」と刻印の入った焼塩壺。底が抜けている。

700は532土坑出土。無紋で内面に指オサエ痕の明瞭な焼塩壺。

701は533土坑出土。焼塩壺で、粘土紐積み上げで厚手である。

702は534土坑出土。透明釉を塗った唐津の皿で、見込みに砂目あり。

703～705は542土坑出土。703は染付に上絵付けをする小碗。704・705は土師皿。

706 は 554 土坑出土。土師質の碗か皿。

707 は 559 土坑出土。鉄軸糸目土瓶。注口部屈曲する。

708 は n 1 地点土坑出土。土師器鍋の口縁部。外面全面に煤付着。

5. 第5面検出遺構出土土器

第5面検出遺構の遺物は 709 ~ 727 である。深く叩き目のある熔接や唐津皿、瓦器碗・黒色土器碗が出土している。

709・710 は 582 土坑出土。709 は土師質の熔接で、身が深く、平行タタキを施している。710 は中国徳化窯の白磁。型作りとみられ、底は平坦である。

711・712 は 587 土坑出土。711 は唐津の皿で、竹節高台。712 は土師皿でやや深みがある。

713 は 588 土坑出土。備前とみられる鉢状の製品

714 ~ 716 は 591 土坑出土。714 は鉄軸小碗。715 は灰釉丸碗。716 は染付の二重網目紋丸碗。

717 は 598 土坑出土。唐津の皿で、薺灰釉をかける。

718・719 は 599 土坑出土。718 は土師皿で、灯明皿として使用。719 は唐津の折縁皿で、見込みに砂胎土目の重ね焼き痕を残す。

720 は 603 落ち込み出土の瓦器碗片。

721 は 604 土坑出土の小さい土師皿

722 ~ 724 は 608 土坑出土。722 は土師皿。723 は瓦器碗で、内面にミガキないしハケが残る。724 は唐津の皿で、体部がわずかに屈曲する。

725 は土師皿。

726 ~ 728 は 626 落ち込み出土。726・727 は内面黒色土器の高台付近の破片。高台は擦り減っているものと考えられ、低い。728 は平匠の土師皿。

6. 遺物包含層出土土器

729 ~ 861 は遺物包含層及び遺構の検出面から出土した遺物である。

機械掘削・側講掘削時出土土器

729・730 は出土層位不明。729 は機械掘削時に出土した灰釉行平鍋の把手で、「化物堂」銘入り。

730 は調査区側講掘削時に出土した染付の茄子形製品。香炉の蓋か。

(1) I 層出土土器

731 ~ 742 は I 層出土。江戸時代末から明治時代にかけての整地土の遺物群からピックアップした。731 は焼塩壺。732 は鉄軸を塗布する陶器で胎土は褐色味が強い。土瓶・ミニチュアの行平鍋蓋、行平鍋の身であるが、第 2 面の遺物と少し形状が異なる。735 は染付と鉄軸を施す磁器製の鬢盥。736 は土師質の六角吊り燈籠。屋根を桐と菊紋で飾る。737 は体部に「土」と刻む焼締陶器德利。738 は柿軸の餌猪口で、指の形状に軸が剥がれ、中に小動物の骨が入っていた。739 は瀬戸美濃系の灰釉丸皿で、鉄軸で圓線状に模様を入れる。740 は窯道具。型作りでタイル裏面のような線刻があり、磁器質。付近で出土した 741 上絵付け磁器や白磁風の 742 などとともに明治時代の遺物と推定される。

(2) II層出土土器

743～748は北西屋敷地のII層出土。743は瓦猿。鶏を抱えている。744は素焼きの土瓶蓋。745は染付小型丸碗。746は備前の灯明受皿。747は二次焼成を受けた灰釉灯明受皿とみられ、土器の断面は黒い。748は染付の小杯か。上下の向き不明。

749～769はII層を掘り下げ、323大型廃棄土坑を検出中に出土した土器。749は透明釉土師器の台付き灯明受皿。750は瓦猿。751はミニチュア鉄釉鍋で、鉄鬚杯として使用。752は素焼きの土瓶蓋。753は匣鉢。754は瀬戸美濃系の掛け分け落とし。755は鉄釉小碗で、鉄鬚杯として使用。756は灰釉片口。757～759は灰釉陶器で、757は「瑞芝」銘入りで、758は亀形摘みの付く落とし蓋、759は小型土瓶、760は行平鍋の蓋。761～764は肥前系の染付。765～769は白破。765は紅皿、766～768は小碗、769は仮飯器で上絵付けをする素材を含む可能性がある。

770は345土坑検出面出土。青磁の双耳瓶。

771～773は485土坑検出面出土の土師皿と灰釉丸碗。

774～780は北西区画と北東区画の境界施設検出中の出土土器。774は天目茶碗、775は織部の破片、776は絵唐津皿、777は色絵小碗、778は白磁、779は内面に上絵付けする小碗、780は焼継痕のある白磁碗。

781～796は南西屋敷地のII層出土。781は須恵器壺甕類の口縁部、782・783は土師皿。784～787は541土坑検出面出土の土師皿で、灯明皿として使用。788は瀬戸美濃系灰釉丸碗。789は色絵の小型蓋。790は陶胎染付の瀬戸美濃系「長の」。791は若松紋を描く灰釉筒形碗。792は鉄釉筒形碗。793は御深井軸とみられる軸をかける木瓜形香炉。794は染付の瓶。795は染付折縁皿。796は白磁碗。

797～800は南西屋敷地と南東屋敷地の区画施設検出中の出土土器。797は染付ミニチュア皿。

798は外面を赤く上絵付けし、金彩を施す卵殻手の小杯片。799は匣鉢。800は「久喜」銘を刻印する明石の鉢。

(3) III層上面整地土・III層出土土器

801～808は北西屋敷地のIII層上面整地土出土。801は焼締陶器徳利で型と底にN字形に線刻する。802は焼締鉄鬚壺。803は萩の掛け分け碗。804は灰釉鉄絵方形皿。葡萄唐草紋を描く。805は柴垣形の陶器。806は鉄釉餌猪口転用鉄鬚杯。807は灰釉小型土瓶。808は伊予の群中十錦で、黄色い小碗。表面を唐草紋に釉剥ぎし、花を描く。

809～816は南西屋敷地III層上面出土整地土出土。809は片岩の入る土師皿で、灯明皿として使用。810は平瓦転用有孔円盤。811は焼締のあまい徳利。812は歪んだ匣鉢。813は木製曲げ物を模した鉄釉鉢。814は小型天目茶碗。815は小型土瓶蓋。816は淡路珉平焼の黄釉龍紋小皿。

817～823は北東屋敷地のIII層上面整地土出土。817は土師質の糖漏。818は匣鉢。819は瀬戸美濃系の灰釉平碗。820は万古焼と推定される型作り素焼き陶器の急須。把手上面に「玉山」の刻印。821は瀬戸美濃系の鎧茶碗。822は灰釉皿に色絵で嫗を描く。823は上面蛇の目釉剥ぎをする白磁に色絵で粗雑に花を描く。

824～832は北西屋敷地の形成される範囲のIII層出土。824は白色系の土師皿で、灯明皿として使用。825は褐色系の土師皿。826は土師質の焰格で、口径23.5cm、器高10.1cmと深く、格子目タタキを施す。827は絵唐津の皿。828は天目茶碗。829は瀬戸美濃系の灰釉丸皿。830は中

国漳州窯系の青花。底部と見込みは無釉で、呉須はやや濃く、釉を雜にやや厚くかける。831は高台の高い青磁底部で、上面蛇の目釉剥ぎ。832は白磁の皿。

833～843は南西屋敷地の形成される範囲のⅢ層出土。833は底部が厚く回転糸切りする土師皿で、側面に煤が付着。834は土師質の秉燭。混入品か。835～837は焼締陶器の擂鉢で、クシ目は少ない。838・839は瀬戸美濃系の灰釉菊皿と丸皿。840～842は唐津の灰釉皿で、底部無釉で削り出し三日月高台、兜巾あり。843は中国漳州窯の色絵大皿ないし鉢の破片。

844～846は北東屋敷地の形成される範囲のⅢ層出土。844は丹波の擂鉢。845は唐津の底部。846は唐津の溝縁皿。

(4) IV層上面整地土・IV層・V層上面出土土器

847～849はIV層上面検出整地土出土。847は平行タタキの焰焰。848は土師器羽釜。849は備前の擂鉢。

850～856はIV層出土。850は白色系の土師質小皿で、口縁部と底部の間に段を生じる。851は土師皿。852は中国漳州窯系の青花で、底部無釉で断面饅頭芯形、表面に貫入が明瞭。853は中国景德鎮窯系の白磁端反皿。高台外面を斜めに削る。854は瓦器塊片で、外面にユビオサエ痕、内面のミガキは粗い。13世紀頃の遺物か。855・856は古墳時代の土器。855は土師器高脚脚部。透かし穴があり、短脚。856は復元径14.0cm、器高約3.5cmの須恵器坏蓋。口縁端部内側に沈線あり。TK43～TK209型式相当で、6世紀後半の遺物。

857～861はV層上面出土。857・858は土師器の皿ないし坏で、857は口径約10.4cm、器高約2.5cm。858は口径8.8cm、器高2.7cm。859は瓦器塊で、復元径12.0cm。外面は段状にナデている。860は須恵器坏の底部とみられる破片。861は須恵器坏蓋の口縁部。「かえり」が短い、7世紀後半の遺物。

7. その他の破片資料

なお、本報告書では実測対象とした土器のほか、写真図版のみで取り上げた土器片が多数あるので、概要を記しておきたい（若干1区・2区出土遺物も含む）。

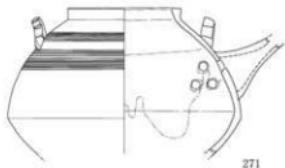
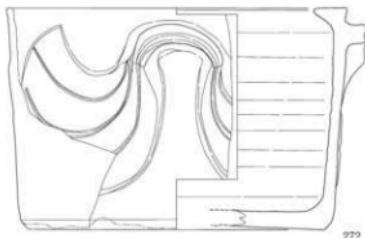
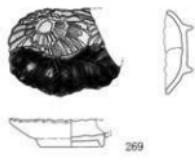
まず大量に出土した染付（青花）のうち銘のあるものを、写真図版66で取り上げた。「大明年製」銘が70点、「富貴長春」・「宣徳年製」・「大明成化年製」銘は10点前後確認できる。ほとんどは肥前系で、青花・瀬戸美濃系・南紀男山焼が若干混在するものと考えられる。「宣徳年製」銘は破片であるが中央の膨らむ饅頭芯とみられ、「太明」銘には疊付に砂が付着するものが多い。「成化年製」・「大明成化年製」銘は多様であるが、内湾する高台やその内側にカンナ痕が残るもの等がある。「永楽年製」・「道光年製」銘は光沢が強く、道光年製のみ碗の内側に文字が書かれている。その他、「龜」銘が2点出土している。

土器の刻印は、涼炉に「瑞芝」「栗田」銘、急須に「清」銘、京焼風灰釉鉄絵丸碗に「木弥」「小松吉」銘、黒釉軟質碗に「木」等、焼締陶器の壺・擂鉢に「大」「N」「上」等の刻印がある。

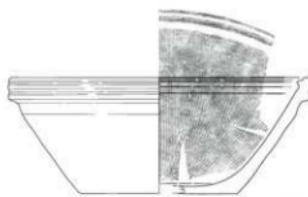
白磁・色絵片は写真図版67・76のとおりで、在地で上絵付けを施した可能性がある。紅皿は約40点出土しており、19世紀のものが圧倒的に多い。水滴は染付・白磁で多数あるが、破片ばかりである。賢盟・散蓮華・合子・鉄漿壺類・合子・植木鉢・急須・餌猪口等は確認した資料を写真掲載した。

その他、素焼き・軟質施釉陶器のミニチュア土製品が多数出土している。人物・動物・まとごと道具が多く、箱庭道具・芥子面・面模は少ない。窯道具は匣鉢片が15点以上出土しており、直径15cm以下のやや小型品向きの大きさのものが多い。

<第1面検出遺構>



<第2面検出遺構>



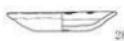
269 : 25 石敷
 270 ~ 274 : 36 土坑
 275 ~ 278 : 74 土坑
 279 : 75 土坑



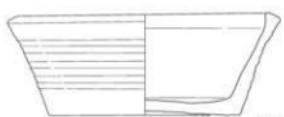
図58 3区第1面・第2面検出遺構出土土器 1



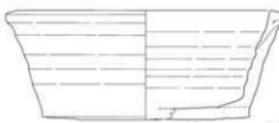
280



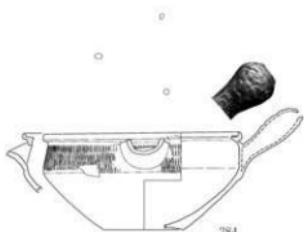
281



282



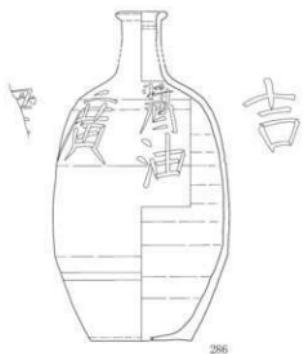
283



284



285



286



287



288



289



290



291



292

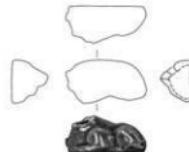
280 ~ 292 : 82 土坑



図59 3区第2面検出遺構出土土器 2



293 ~ 302 : 82 土坑



303 ~ 313 : 91 土坑

0 20cm

図60 3区第2面検出遺構出土土器 3

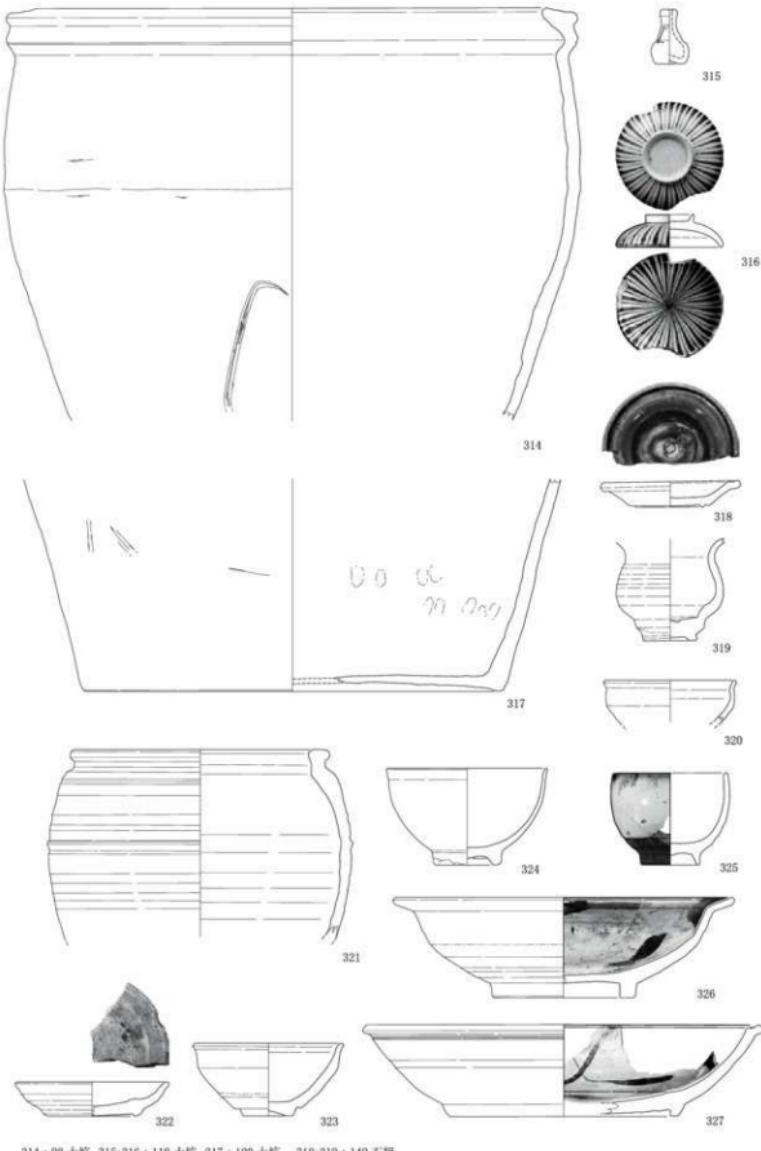


图61 3区第2面検出遺構出土土器 4

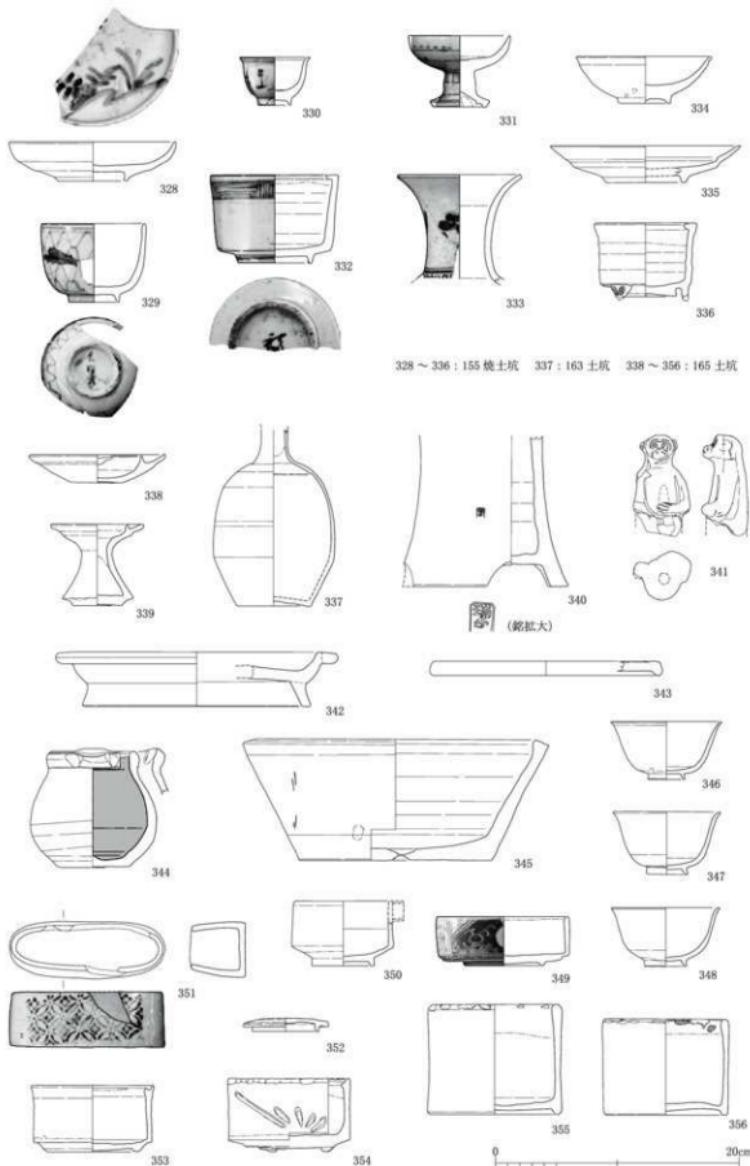


図62 3区第2面検出遺構出土土器5

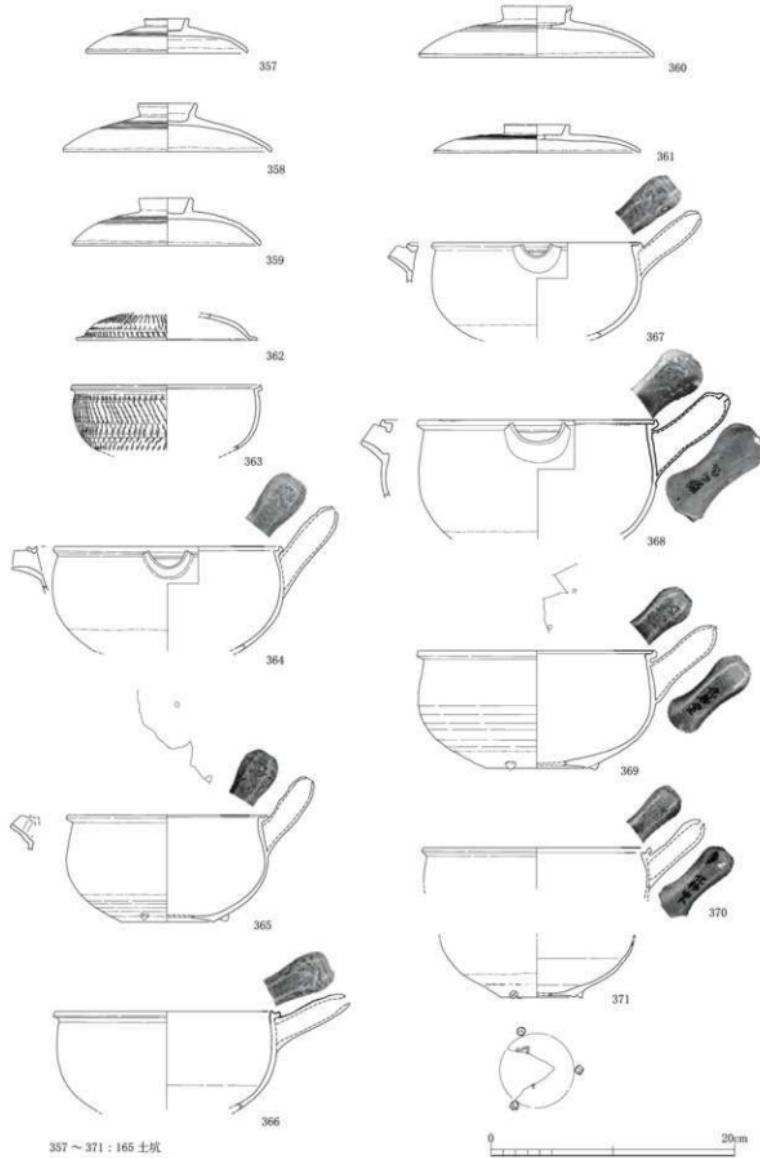


図63 3区第2面検出遺構出土土器 6

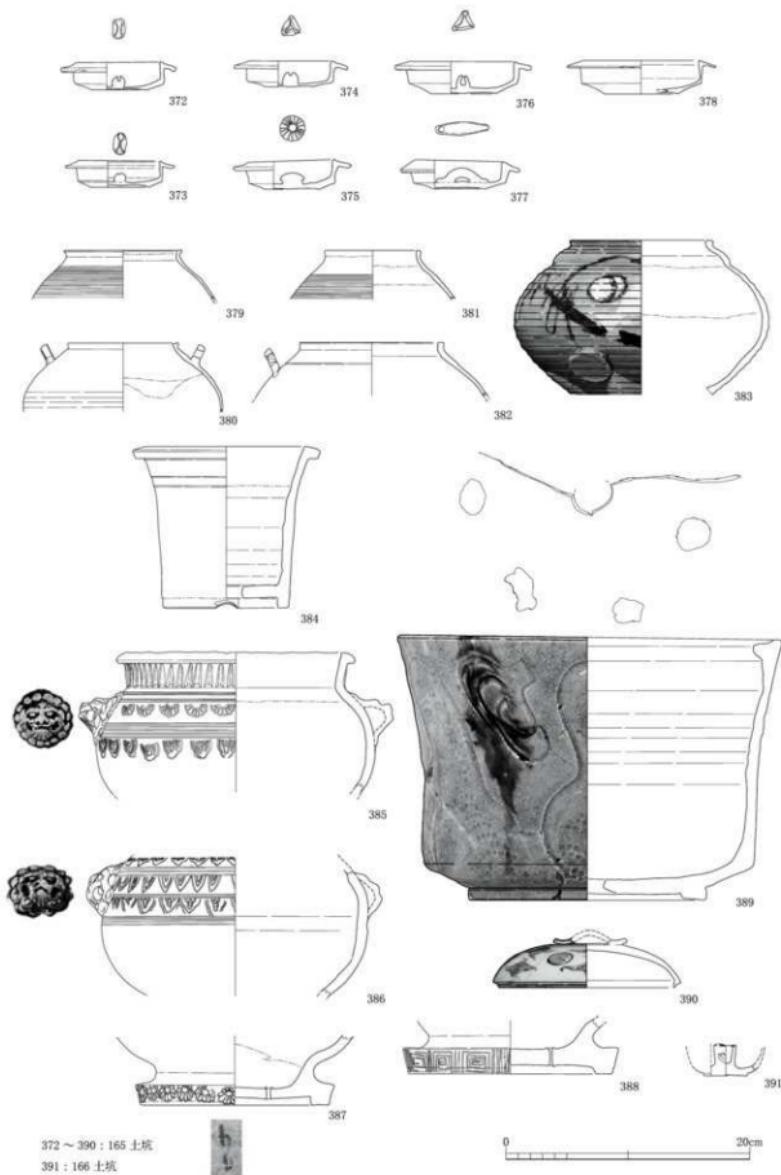
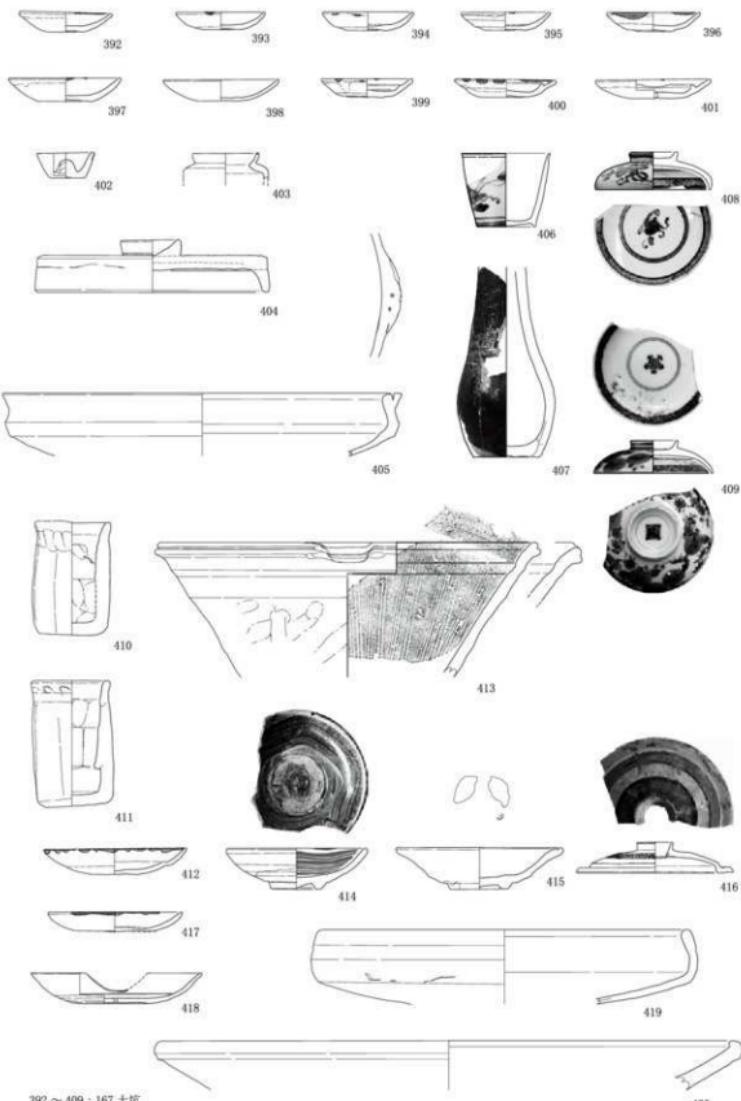


図64 3区第2面検出遺構出土土器 7



392 ~ 409 : 167 土坑

410 ~ 415 : 178 土坑

416 : 182 土坑

417 ~ 420 : 199 土坑

0 20cm

図65 3区第2面検出遺構出土土器 8

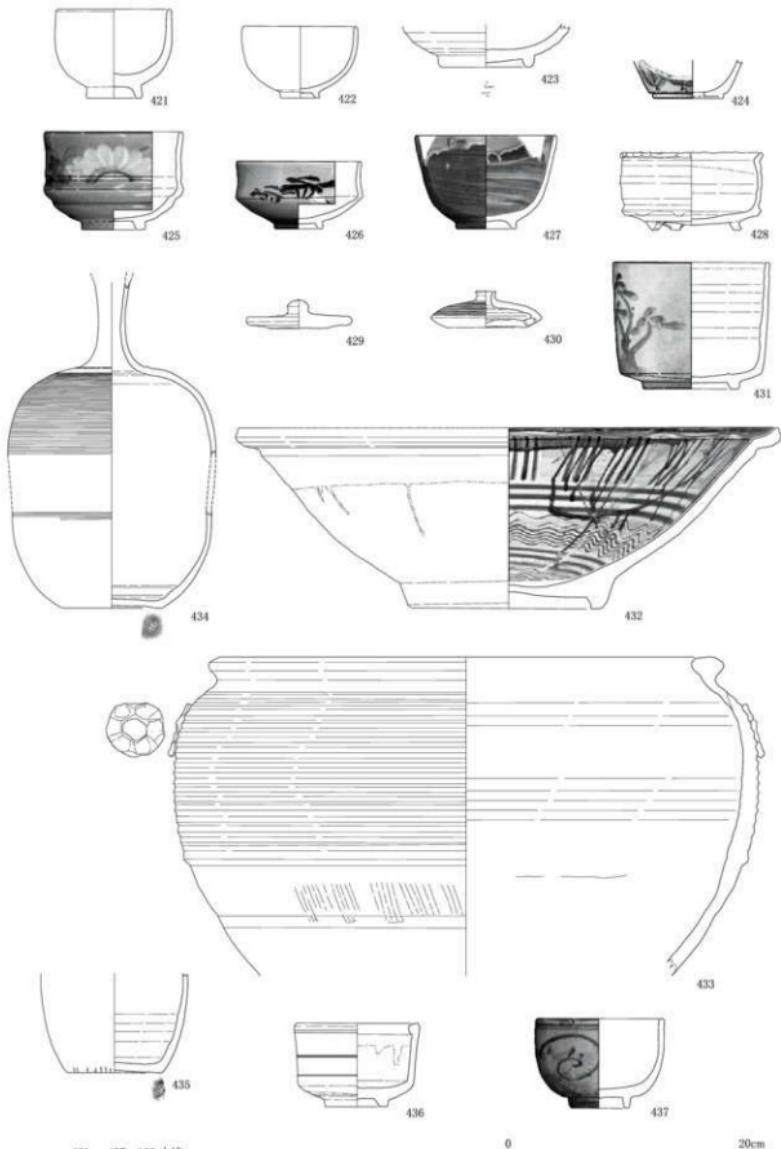


図66 3区第2面検出遺構出土土器 9

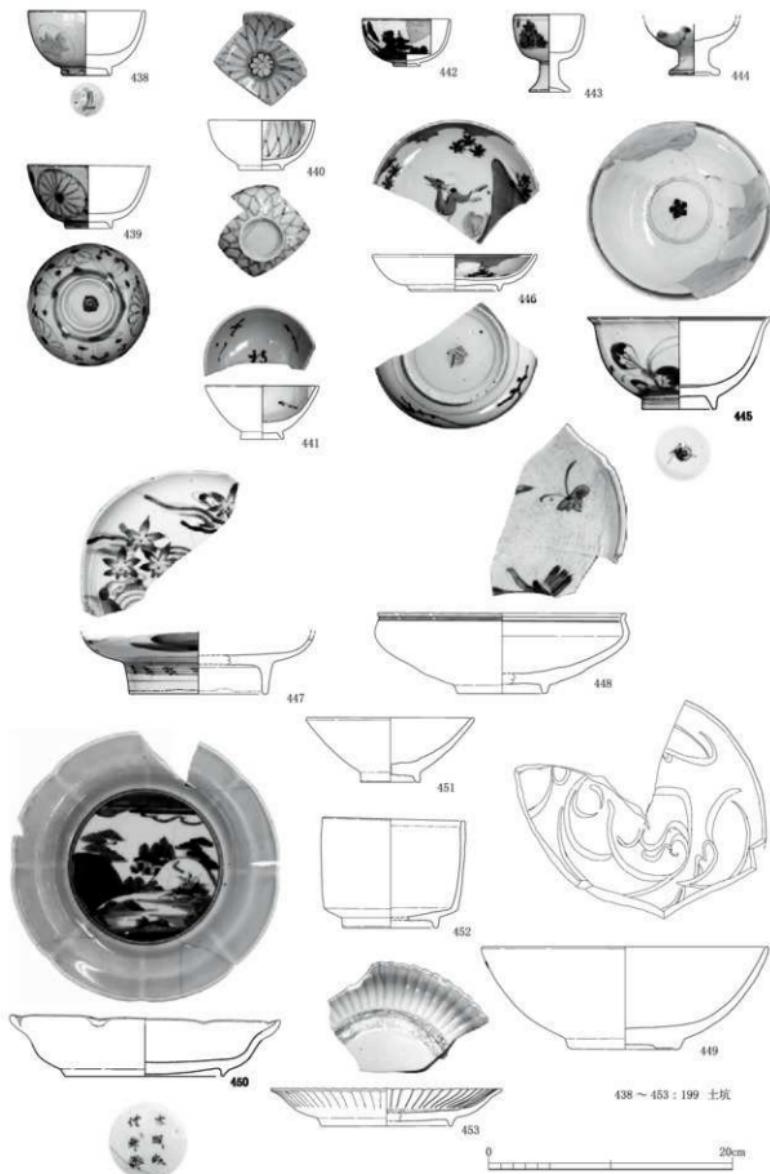


図67 3区第2面検出遺構出土土器10

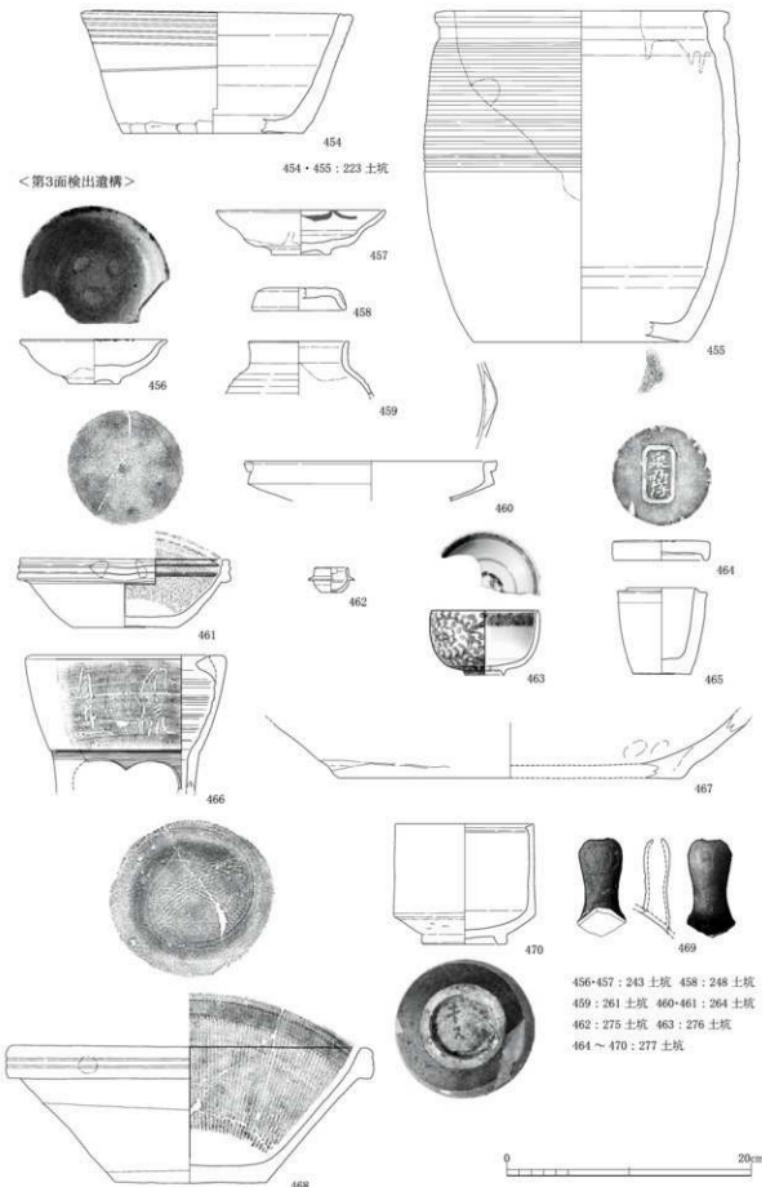


図68 3区第2面検出遺構出土土器11・第3面検出遺構出土土器

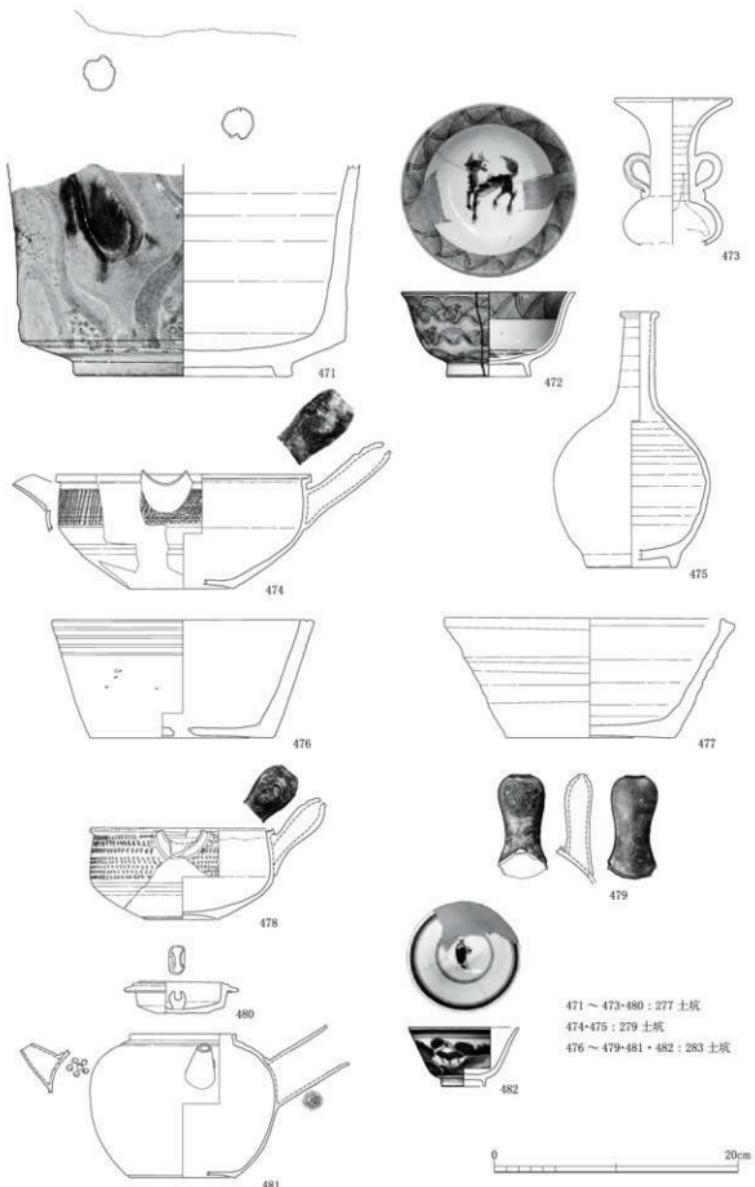


图69 3区第3面検出遺構出土土器2

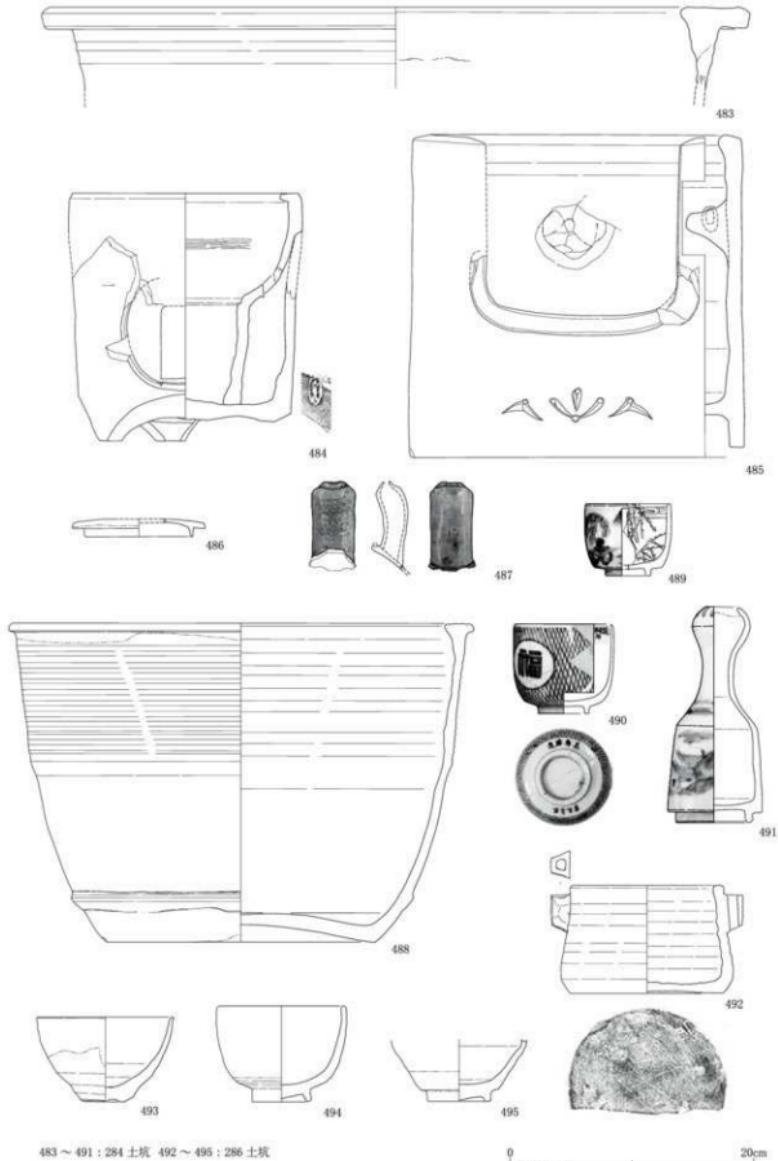


図70 3区第3面検出遺構出土土器3

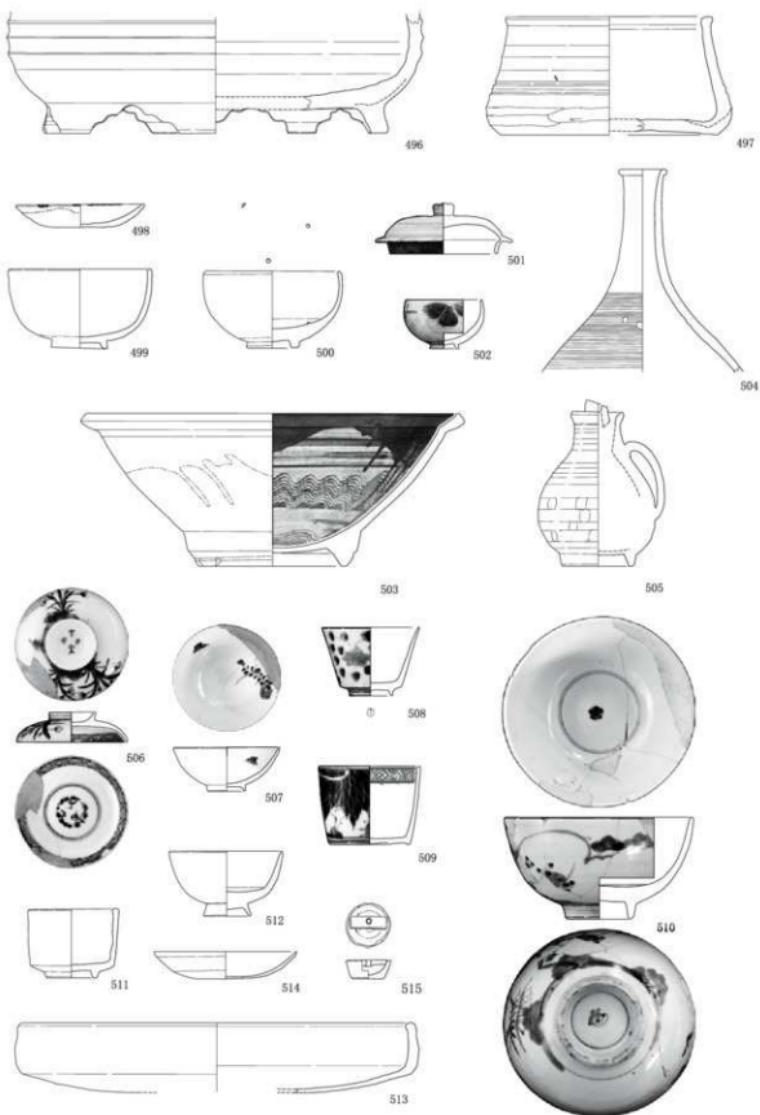
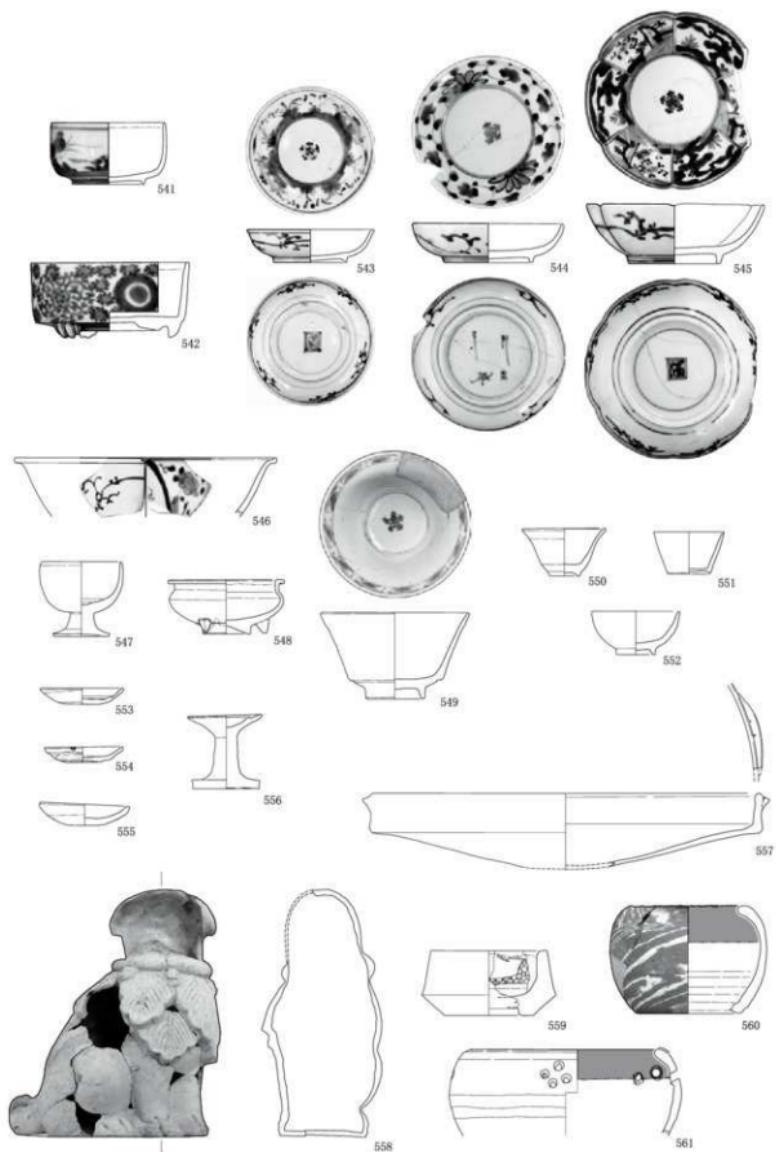


図71 3区第3面検出遺構出土土器4



図72 3区第3面検出遺構出土土器5



541 ~ 552 : 316 土坑 553 ~ 561 : 323 土坑

0 20cm

図73 3区第3面検出遺構出土土器6

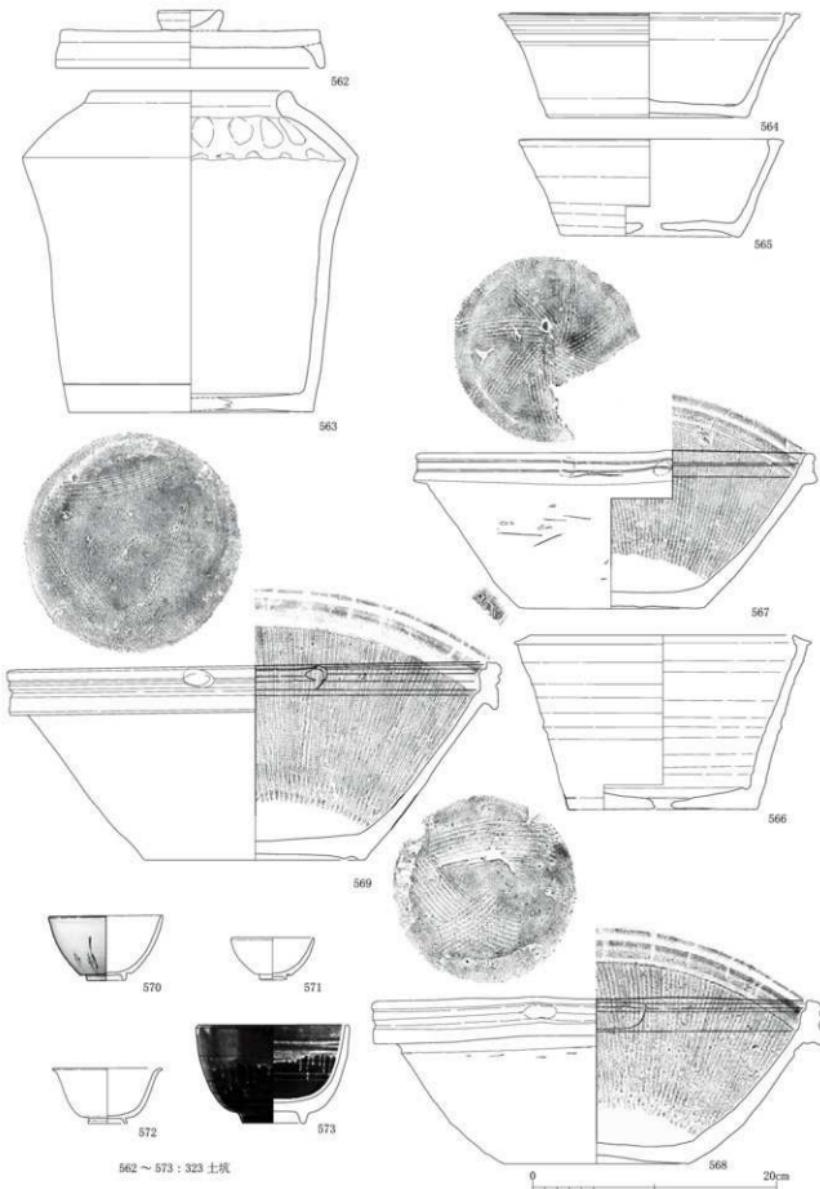
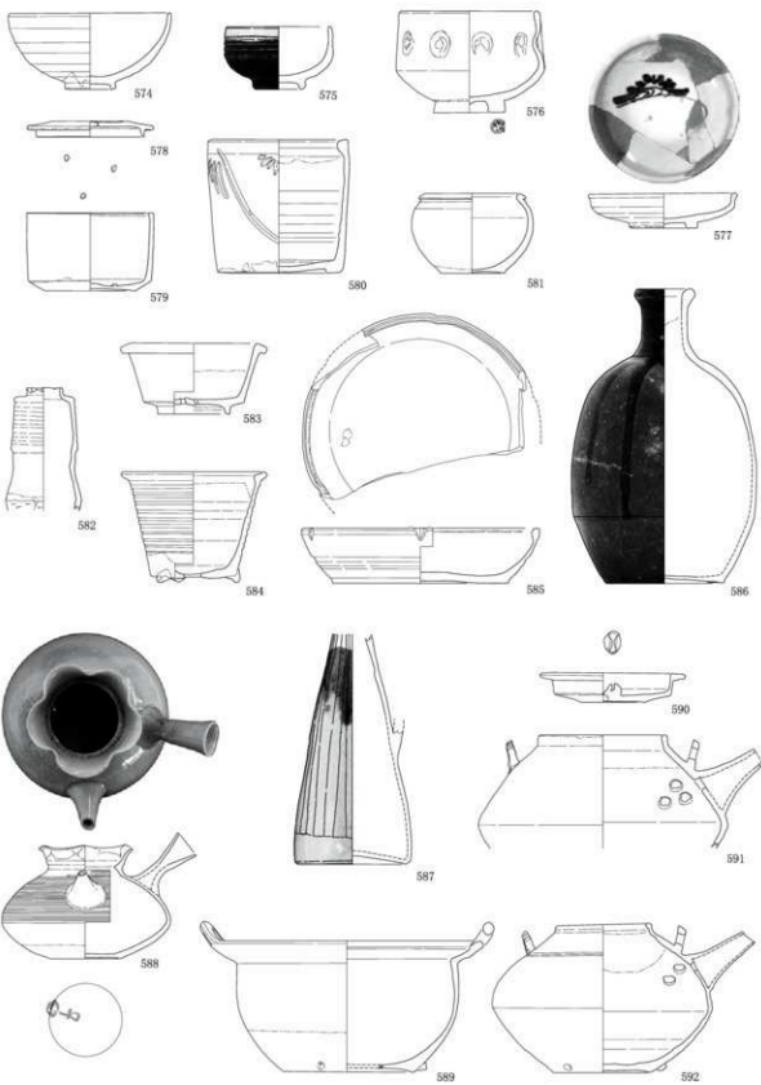


図74 3区第3面検出遺構出土土器7



574 ~ 592 : 323 土坑

0 20cm

図75 3区第3面検出遺構出土土器8



图76 3区第3面検出遺構出土土器9



612 ~ 616 : 323 土坑 617 ~ 621 : 324 土坑
622 ~ 624 : 327 土坑 625 : 336 土坑 626~627 : 345 土坑



図77 3区第3面検出遺構出土土器10

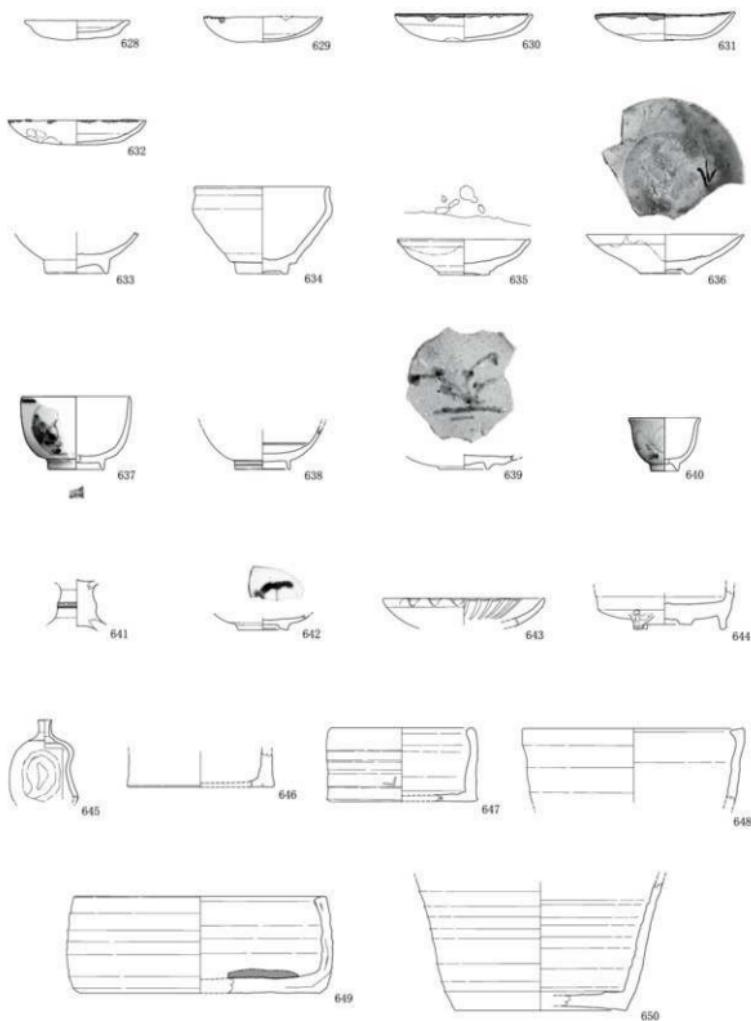
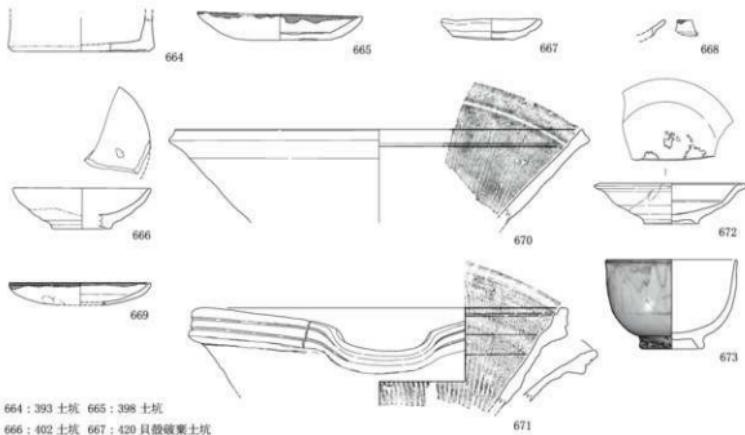


图78 3区第3面检出遗構出土土器11



651 ~ 654 : 374 土坑 655 ~ 663 : 378 土坑

<第4面>



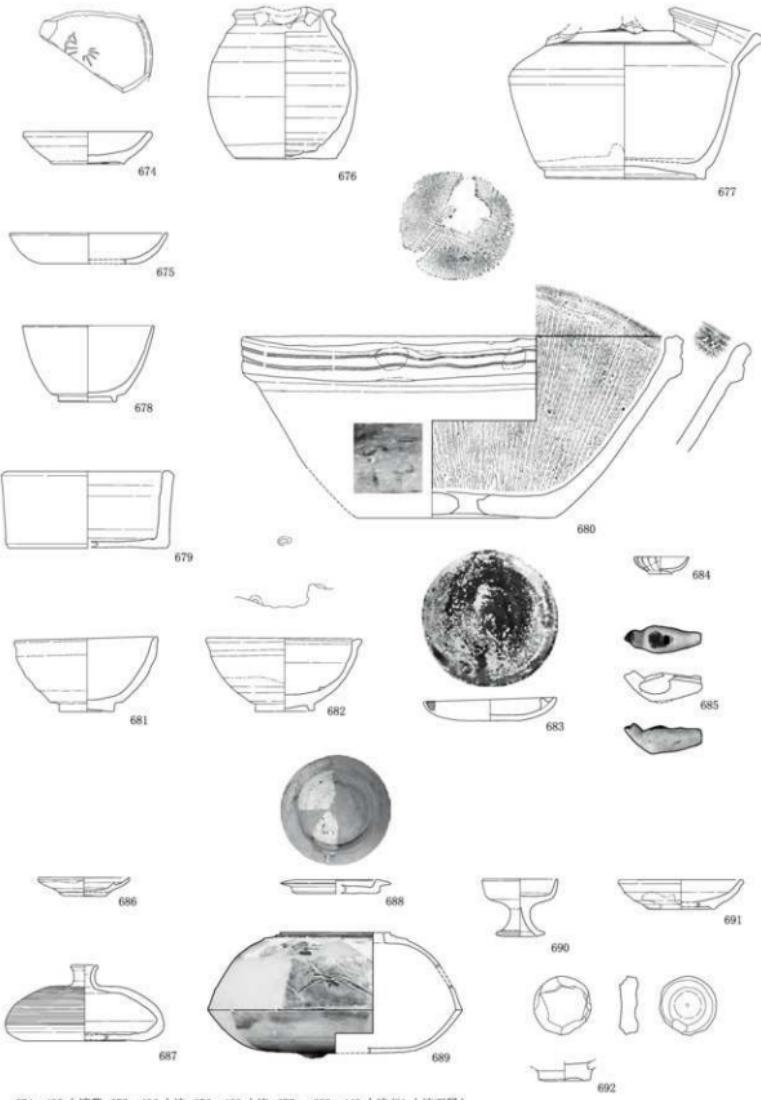
664 : 393 土坑 665 : 398 土坑

666 : 402 土坑 667 : 420 貝殼破棄土坑

668 : 421 土坡墓 669 ~ 673 : 423 地下室跡

0 20cm

図79 3区第3面検出遺構出土土器12・第4面検出遺構出土土器1



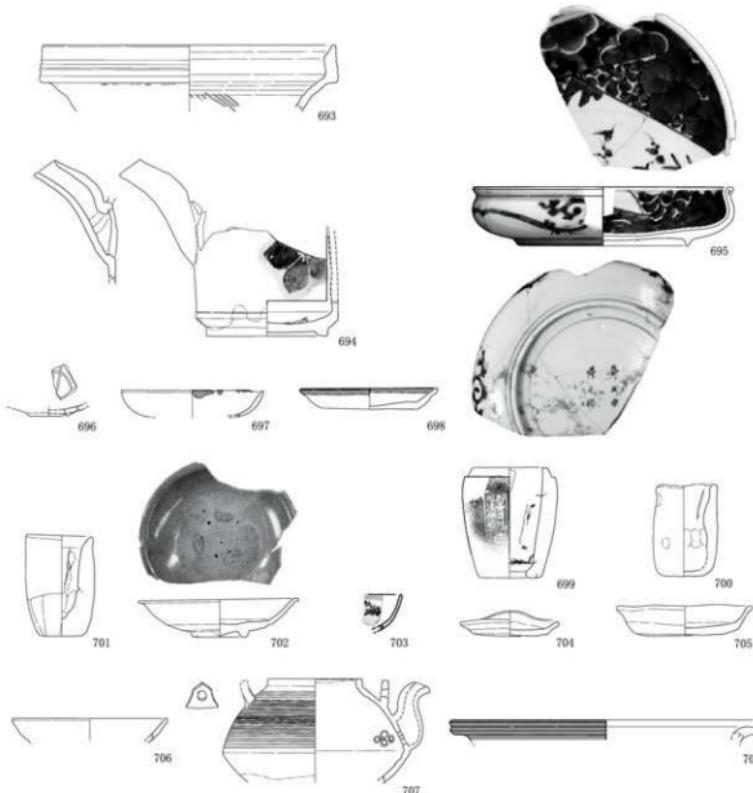
674 : 435 土壙瓶 675 : 436 土坑 676 : 439 土坑 677 ~ 680 : 443 土坑 (91 土坑下層)

681 : 444 土坑 682 : 454 土坑 683 : 456 土坑 684~685 : 457 土坑

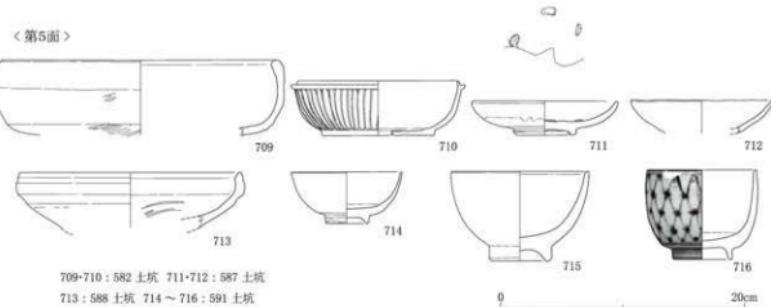
686 ~ 689 : 460 土坑 (82 土坑下層) 690 : 461 土坑 (82 土坑下層)

691 : 463 土坑 692 : 469 土坑

図80 3区第4面検出遺構出土土器2



693 : 492 土坑 694~695 : 499 土坑 696 : 516 土坑 697 : 526 土坑 698~699 : 530 土坑 700 : 532 土坑
701 : 533 土坑 702 : 534 土坑 703 ~ 705 : 542 土坑 706 : 554 土坑 707 : 559 土坑 708 : n1 地点土坑

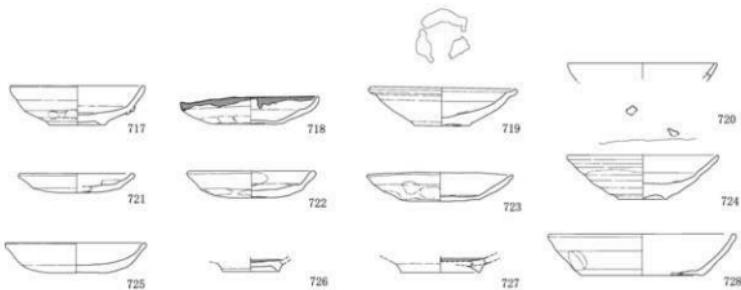


709~710 : 582 土坑 711~712 : 587 土坑

713 : 588 土坑 714 ~ 716 : 591 土坑

0 20cm

図81 3区第4面検出遺構出土土器3・第5面検出遺構出土土器1



< I 層及び攪乱 >

717 : 598 土坑 718-719 : 599 土坑 720 : 603 落ち込み 721 : 604 土坑
722 ~ 724 : 608 土坑 725 : 612 土坑 726 ~ 728 : 626 落ち込み

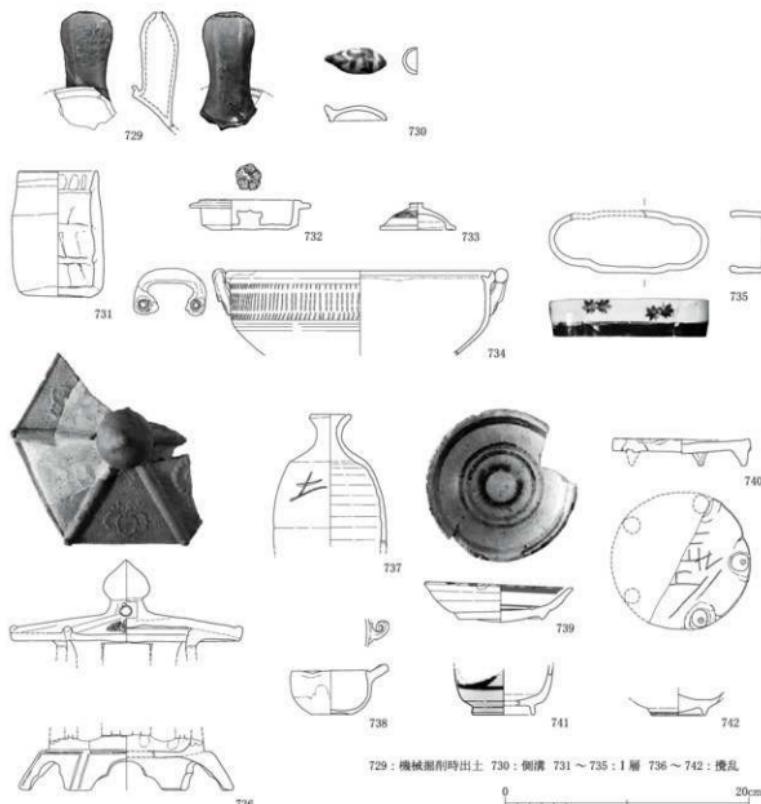


図82 3区第5面検出遺構出土土器2・I層及び攪乱出土土器

<II層及び第2面整地土（北西面敷地）>

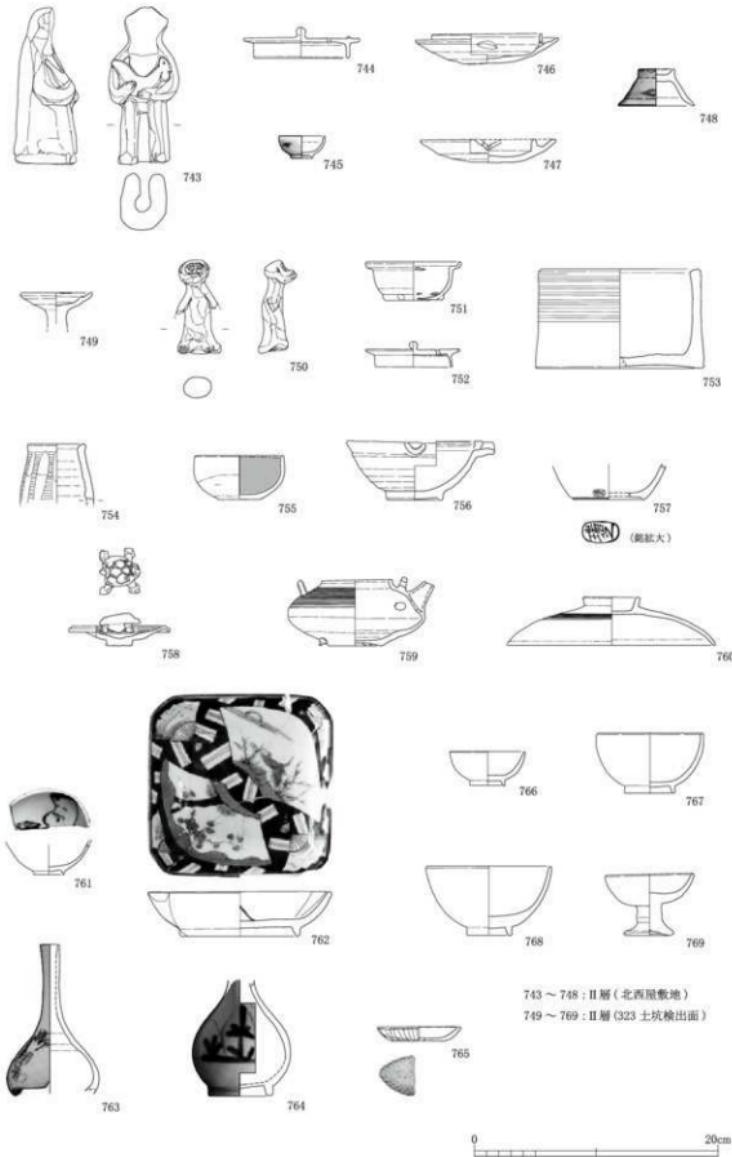


図83 3区 II層及び第2面整地土出土土器 1

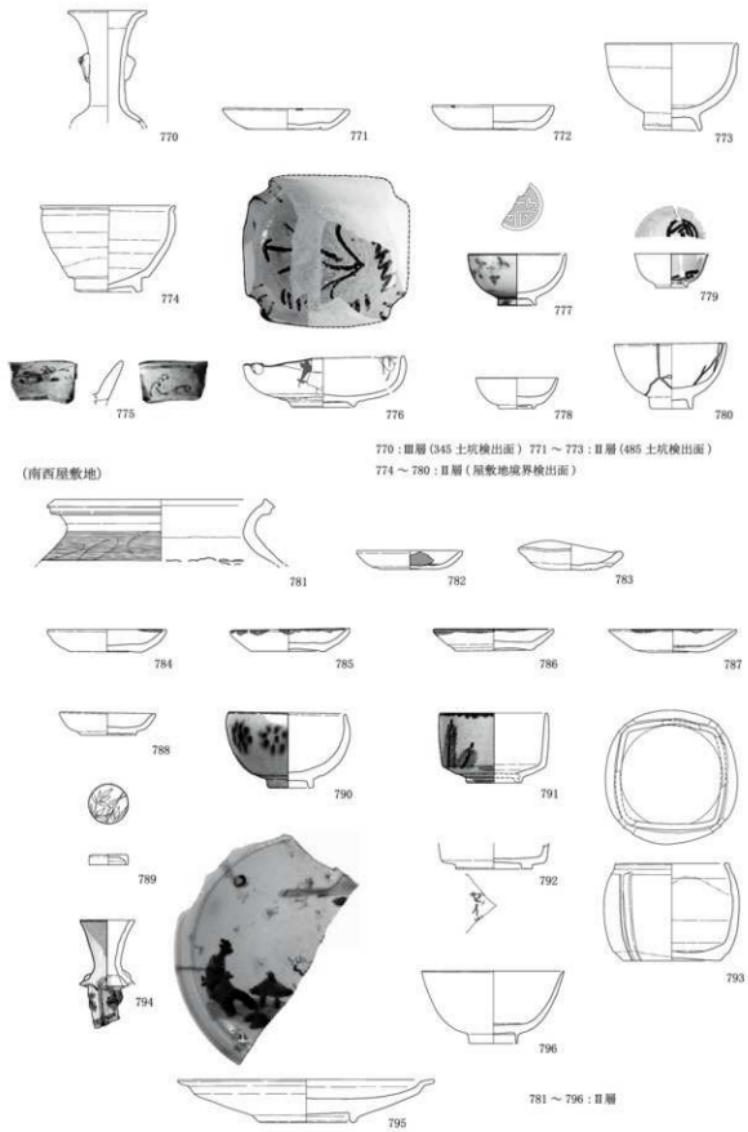


図84 3区 II層及び第2面整地土出土土器2

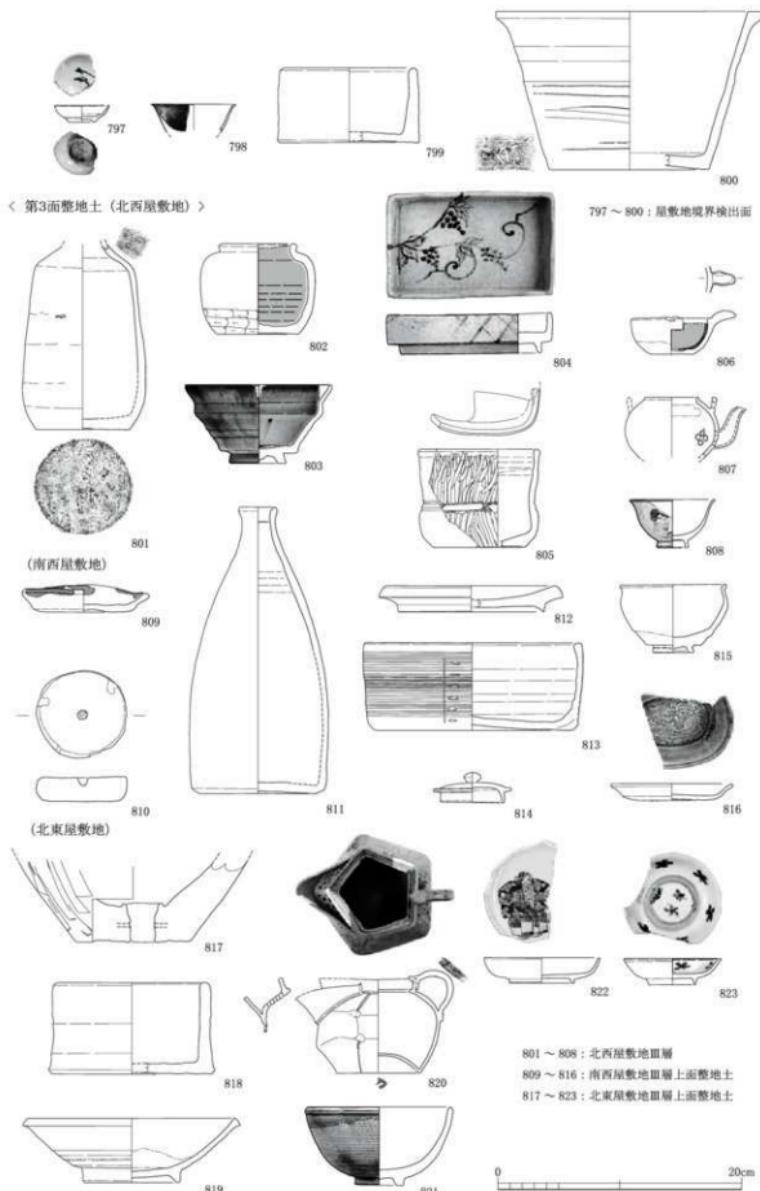
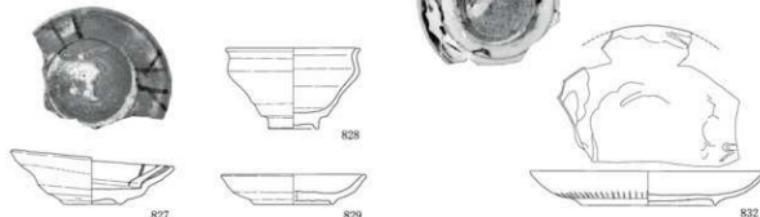
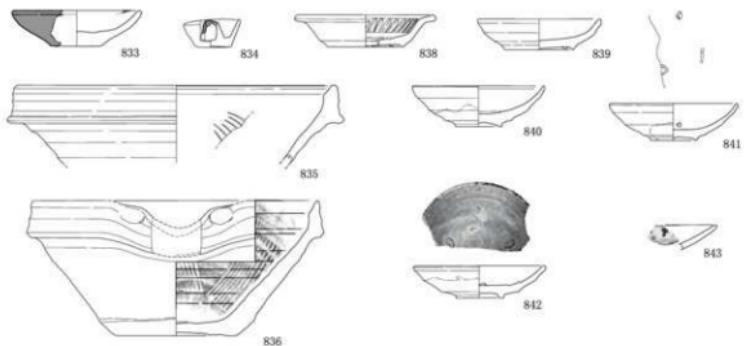


図85 3区II層及び第2面整地土出土土器3・第3面整地土出土土器

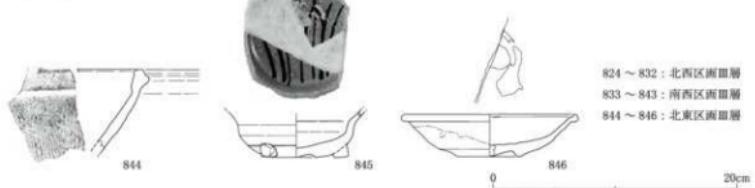
<III層(北西区画)>



(南西区画)



(北東区画)

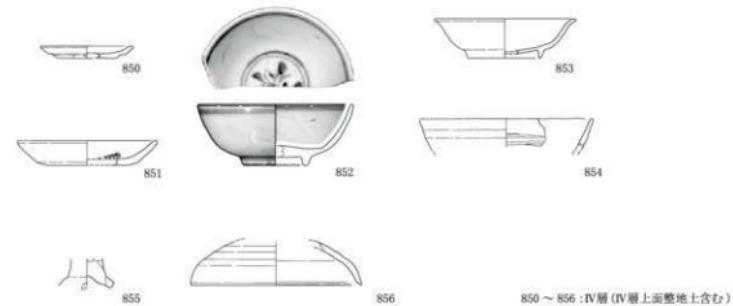
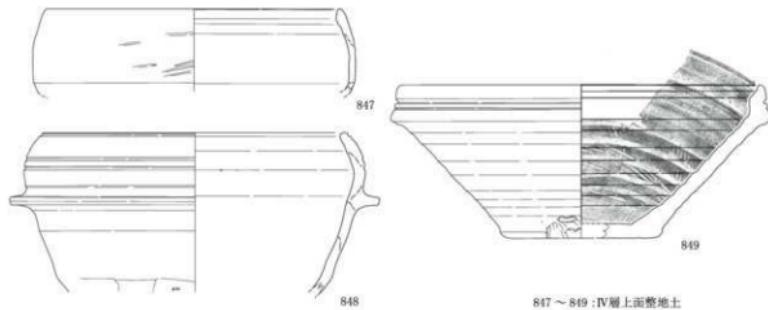


824～832：北西区画Ⅲ層
833～843：南西区画Ⅲ層
844～846：北東区画Ⅲ層

0 20cm

図86 3区Ⅲ層出土土器

△IV層



△第5面

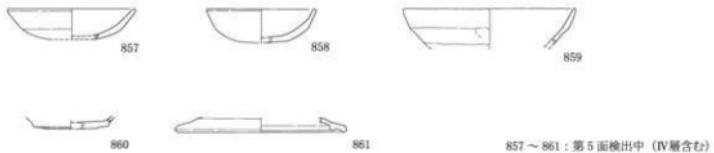


図87 3区IV層・第5面出土土器

第4節 墳輪

1. 円筒埴輪・朝顔形埴輪

862は円筒埴輪あるいは朝顔形埴輪の破片。突帯は低いM字状を呈し、外面タテハケ、内面はユビナデ。突帯上方がやや内湾する傾向がみられることから、朝顔形埴輪の可能性が考えられる。これらの他、円筒・朝顔形埴輪と推測される破片は6点出土しており、ハケメが確認されるものと確認されないものがある。

2. 形象埴輪

863・864は器財埴輪片。863はやや薄く平行する2本1対の沈線を鱗状に描く。やや薄く裏面は荒れており、形象埴輪基部の円筒に貼られていた器財埴輪部が剥離したものと推定される。弧状を描く平行線刻は周辺の古墳では石見形埴輪や鞍形埴輪でみられる特徴である。864は器財埴輪の破片で円筒基部から鱗状に貼り出した部分にあたる。上面ないし下面に向かって開く形状をしており、平行する沈線の間に竹管紋を押している。周辺の古墳では胡籠形埴輪等がこのタイプの埴輪であり注意が必要である。



862 : 3区 屋敷地境界溝状遺構 (I2地点) 863 : 1区 C-2 I層 864 : 3区 IV層 (o19地点)



図88 墳輪

第5節 瓦

瓦は出土遺物総量の半分弱を占め、土器類と混在して多数の遺構・包含層等から出土している。遺構別に詳述すると膨大な量にのぼるため、本書では各型式ごとに1、2点を選定して屋敷別にまとめて報告している。

1. 軒丸瓦

865～882は軒丸瓦。瓦当紋様は家紋が2点で、その他のほとんどは巴紋を飾る。

865～878は北西屋敷地の出土瓦。865・866は1区⑧-3トレチ56土坑出土。865は桔梗紋軒丸瓦の破片。桔梗紋は桑山家の家紋であり、1585～1600年に作られた瓦である。866は瓦当面全面に離れ砂が多量付着し、紋様は低い。巴頭は尖り、尾は長い。867は小型で巴が特に小さく、珠点が大きい。凹面に内タキ痕あり。868は巴紋の尾が長く、珠点数14。869は巴が立体的で尾が長く、珠点数20。凹面に斜めコビキ、布目痕、吊り紐痕あり。870は巴の尾が長く、珠点数15。871は147柱穴出土。872は3区155焼土坑から多量に出土している。径14.2cm前後で巴は左巻きで尾が比較的長く、珠点数16。瓦当面に離れ砂付着。874は巴の尾はやや長く、珠点数は15と考えられる。875・876は柱列2付近出土の大型の軒丸瓦。

877・878は北東屋敷地の出土瓦。877は「〇に三つ引き」紋軒丸瓦。瓦当面にキラコ付着。「和歌山古屋敷絵図」では出土地は17世紀に三浦助左エ門の屋敷地であることから（註4）、三浦家の家紋をあしらった軒丸瓦と考えられる。878は尾の長い三巴紋軒丸瓦で、外縁がやや広い。

879～882は南西屋敷地の出土瓦。879は1区E-1等トレチの13焼土坑から多量に出土した瓦。872と同范であるが、瓦当面に離れ砂が付かず、范の木目が浮き出しており、製作年代が若干新しい可能性が考えられる。880・881は879と共に伴するが、出土量が少ない。

2. 軒平瓦

883～910は軒平瓦・滴水瓦。

883～903は北西屋敷地出土の瓦。883は1区④グリッド20土坑出土。唐草の反転がほとんどない19世紀の瓦。884は1区D-2トレチ出土。唐草の巻きこみが大きい中世末ないし近世初頭の軒平瓦で、周辺で10点出土している。885は中心飾りがやや十字形になる。886は中心飾りが下向きの三葉で紋様に凹凸がある。887は中心飾り三葉で、唐草が2転する紋様の明瞭な瓦。895・898と同范と考えられる。

888～894は柱列3出土の瓦。888は中心飾りが横紋で、凹線を交えた唐草を展開させる。889は中心飾りの脇が屈曲し、范面に線刻画のようなものが掘られている。890・891は蓮華紋滴水瓦。外縁上面に「A」の刻印を押す。892は中心飾りが三葉紋の唐草紋軒平瓦。893は宝珠唐草紋軒平瓦。中世末期の瓦として知られる紋様の瓦である。894は888に類似する凹線表現の唐草紋軒平瓦。

896は155焼土坑内で大量に出土した唐草紋滴水瓦。同タイプの瓦が土坑内に詰まっており、建物1棟分の瓦の一部が埋められているものと考えられる。897は155焼土坑の上面の攢乱内で出土した蓮華紋滴水瓦。890・891に対して、脇部分の紋様が小さい。この瓦の紋様に類似する形状の中心飾りをもつ軒平瓦が多い。

899・900は中心飾りが楕円形に近い唐草紋軒平瓦。901は中心飾りが凹線で、脇が屈曲する。902は中心飾りが楕円形で脇が二又に分かれれる。903は中心飾りが十字。

904～908は南西屋敷地出土の瓦。

904は中心飾りが円形で、2本一対の唐草が回線状にみえる。905はE-1他13焼土坑出土。同遺構からは896・907と同窓の瓦片が多数出土するが、この瓦が最も新しい瓦片とみられる。906は唐草を回線で立体的に表現する。907は唐草紋滴水瓦で、896と同窓、E-1他の13土坑で多量に出土したほか、地下室跡423でも残存状態の良好な瓦が2点出土した。908は中心飾りが十字。

909は北東屋敷地出土の瓦。909は460土坑で出土した883と同系統の瓦。910は北東屋敷地と北西屋敷地の境界付近で出土した唐草紋軒平瓦。中心飾りよりその下の珠点を中心とする瓦当紋様の瓦である。

3. 丸瓦

911～914は丸瓦。

911・912は北西屋敷地出土。911は1区F-2の136土坑で出土した丸瓦で、凹面は斜めコビキ、布目、釣り紐痕が明瞭に確認できる。912は3区155焼土坑で多量に出土した凹面や斜めのコビキ、布目痕、ゴザ状圧痕、吊り紐の確認できる丸瓦。二次焼成を受けた瓦が多い。

913・914は南西屋敷地出土。913は1区E-1他13土坑で多量に出土した丸瓦。凹面にコビキB、布目痕が確認できる。914は423地下室跡で出土した丸瓦で、凹面にゴザ状圧痕がみられる。

4. 平瓦・棟瓦

915は865桔梗紋軒丸瓦と共に水切りの付いた平瓦。厚手で全面に離れ砂が付着する。916・917は155焼土坑出土平瓦。918は323土坑出土の平瓦あるいは埴。919は443土坑出土の棟瓦。920は3区h25区画の第3面整地土出土の線刻入り平瓦片。髪を結った武士とみられる人物が2人向かい合い、周りに「□□郎」「さゝイテ」と文字を配する。芙蓉手の染付や描鉢、現川窯の刷毛目茶碗等とともに出土している。

921・922は1区C-1の2井戸状遺構の瓦組で使われた平瓦と棟瓦。923は1区E-1他13土坑出土で多量に出土した平瓦。

5. 道具瓦

924～928は鬼瓦。924は1区E-8トレンチ2層出土の鬼面紋の鬼瓦。925は3区表土出土の菊紋鬼瓦。裁判所関連の瓦か。926は927と同じ瓦の可能性がある破片。927は三葉葵紋鬼瓦。高さ約22cm、復元幅約52cm。柱列2の143柱穴で多量の瓦とともに出土。928は鬼面の鬼瓦。

929は鳥糞の破片。930は丸瓦に瓦当が鈍角で接合する軒丸瓦。931は無紋の隅軒丸瓦。丸瓦を斜めに切り、半瓦当面を付ける。932は楕円形の窪みのある瓦ないし瓦質の道具。933は瓦を打ち欠いて作った瓦質の栓。934は面戸瓦で凸面に「泉州谷川濱中庄治郎」と刻印する。935は平瓦を転用した海鼠壁瓦。平坦で釘穴が4か所あけられている。936は隅軒平瓦で平瓦部が平面三角形に切られている。

〈北西星敷地〉

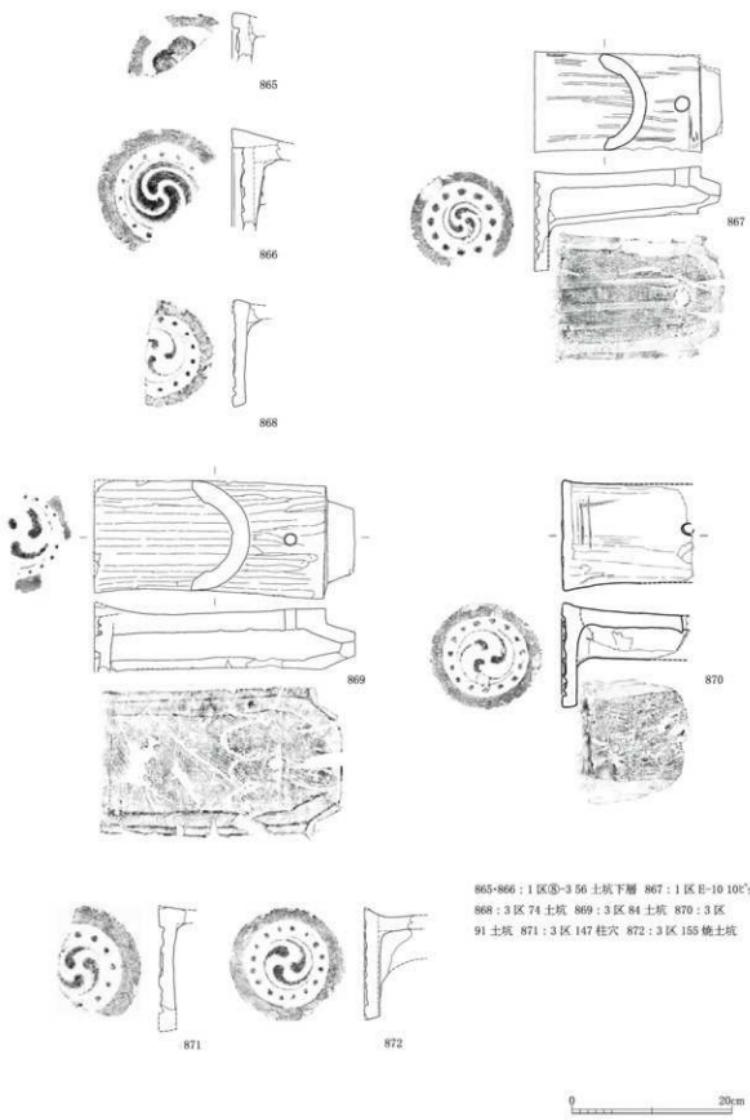


図89 瓦1 (軒丸瓦)

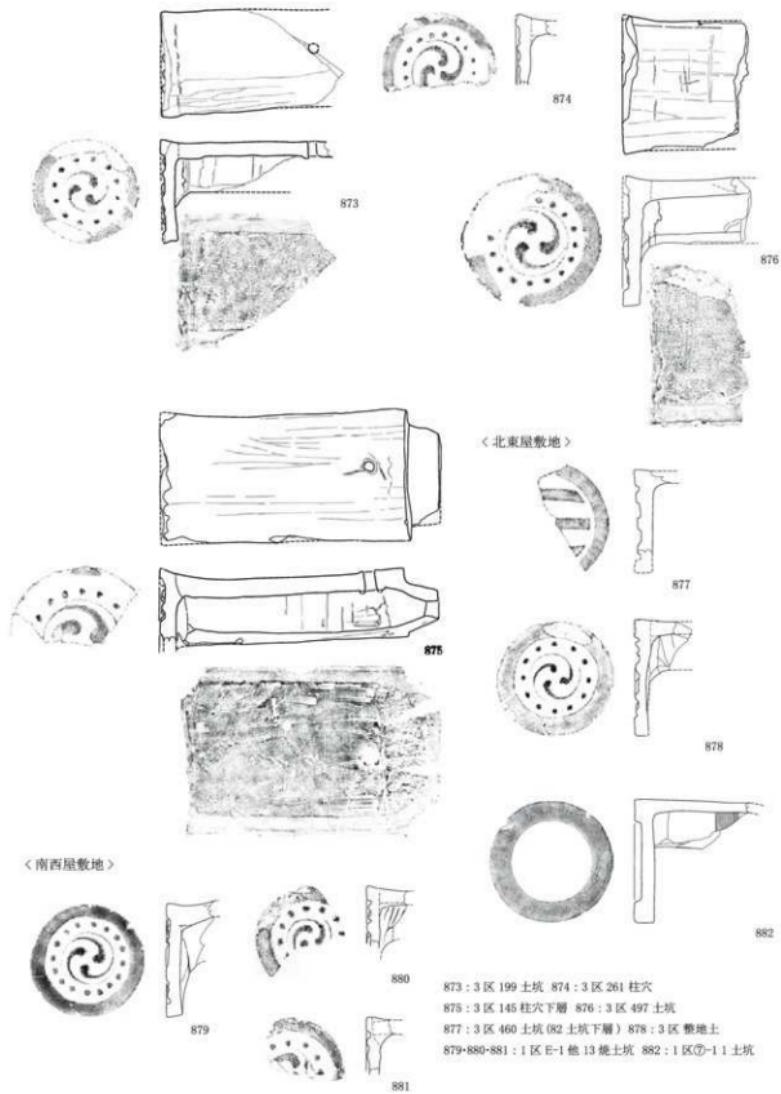
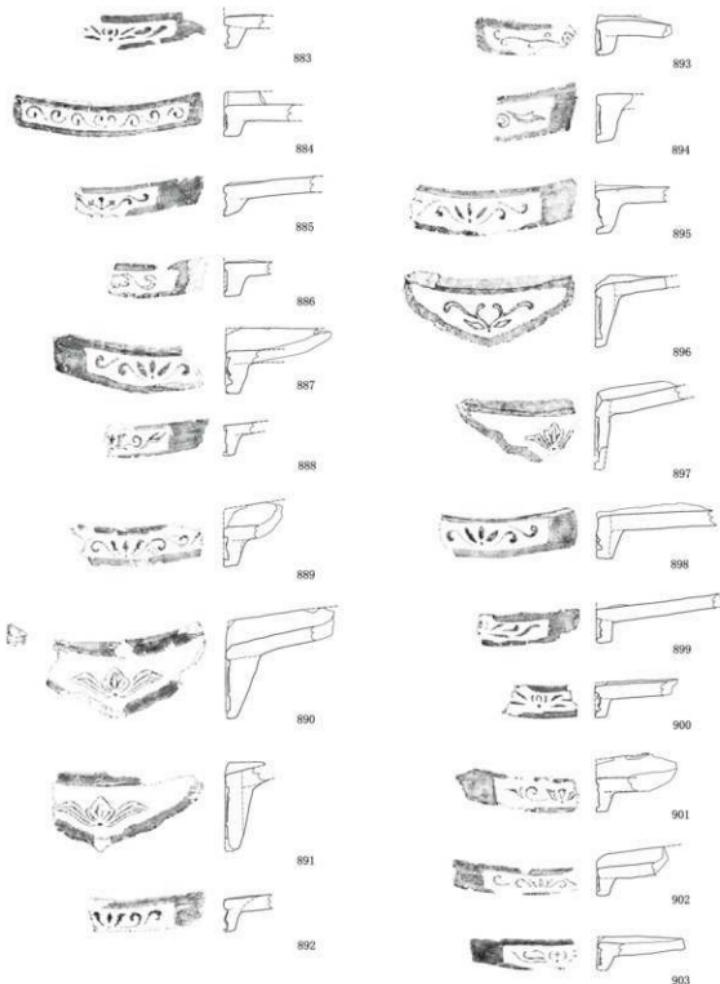


図90 瓦2 (軒丸瓦)

〈北西屋敷地〉

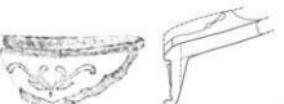


- 883 : 1区② 20土坑
 884 : 1区 D-2 12'井
 885 : 1区 E-10 2层
 886 : 3区 1土坑
 887 : 3区 74土坑
 888 : 3区 143柱穴
 889-890 : 3区 144柱穴
 891 : 3区 145柱穴
 892 : 3区 146柱穴
 893-894 : 3区 147柱穴
 895 : 3区 148柱穴
 896-897 : 3区 155壁上坑
 898 : 3区 148柱穴
 899 : 3区 345土坑
 900 : 3区 413土坑
 901 : 3区 143柱穴下层
 902 : 3区 443土坑(91土坑下层)
 903 : 3区 456土坑

0 20cm

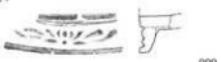
图91 瓦3 (軒平瓦・滴水瓦)

< 南西屋敷地 >



907

< 北東屋敷地 >



906



908

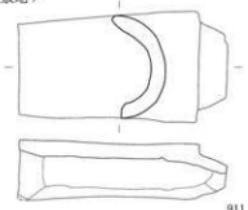


909

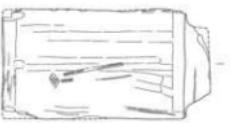


910

< 北東屋敷地 >



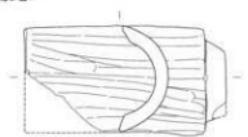
911



912



< 南西屋敷地 >



913



914

904 : 1区 G-2 2 增築 905 : 1区 E-1 他 13 烧土瓦 906 : 3区 Ⅱ層
907 : 3区 423 土坑 908 : 3区 534 土坑 909 : 3区 460 土坑 (82 土坑下層)

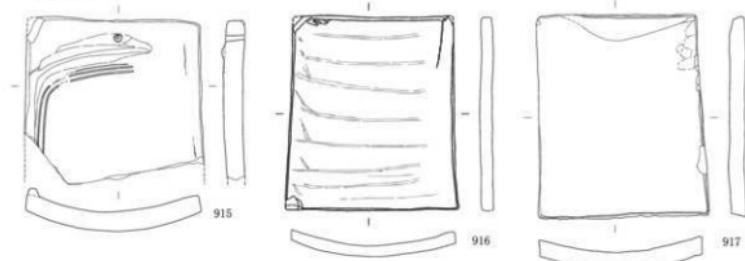
910 : 3区 整地土 911 : 1区 P-2 36 土坑 912 : 3区 155 烧土瓦

913 : 1区 E-1 他 13 烧土瓦 914 : 3区 423 地下室跡

0 20cm

図92 瓦4 (軒平瓦・滴水瓦・丸瓦)

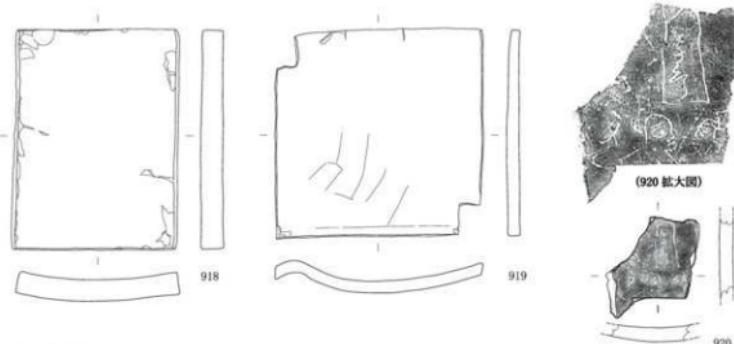
〈北西屋敷地〉



915

916

917

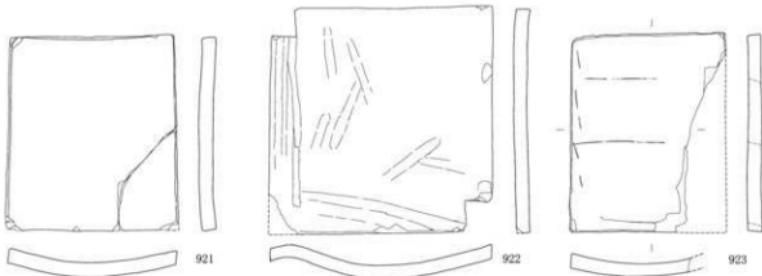


918

919

920

〈南西屋敷地〉



921

922

923

915 : 1 区 ⑤-3 56 土坑 916-917 : 3 区 155 烧土坑 918 : 3 区 323 土坑 919 : 3 区 443 土坑 (91 土坑下層)

920 : 3 区 整地土 (b25 地点) 921・922 : 1 区 C-1 2 井戸状遺構 923 : 1 区 E-1 他 13 烧土坑



図93 瓦5 (平瓦・棟瓦)

〈北西屋敷地〉

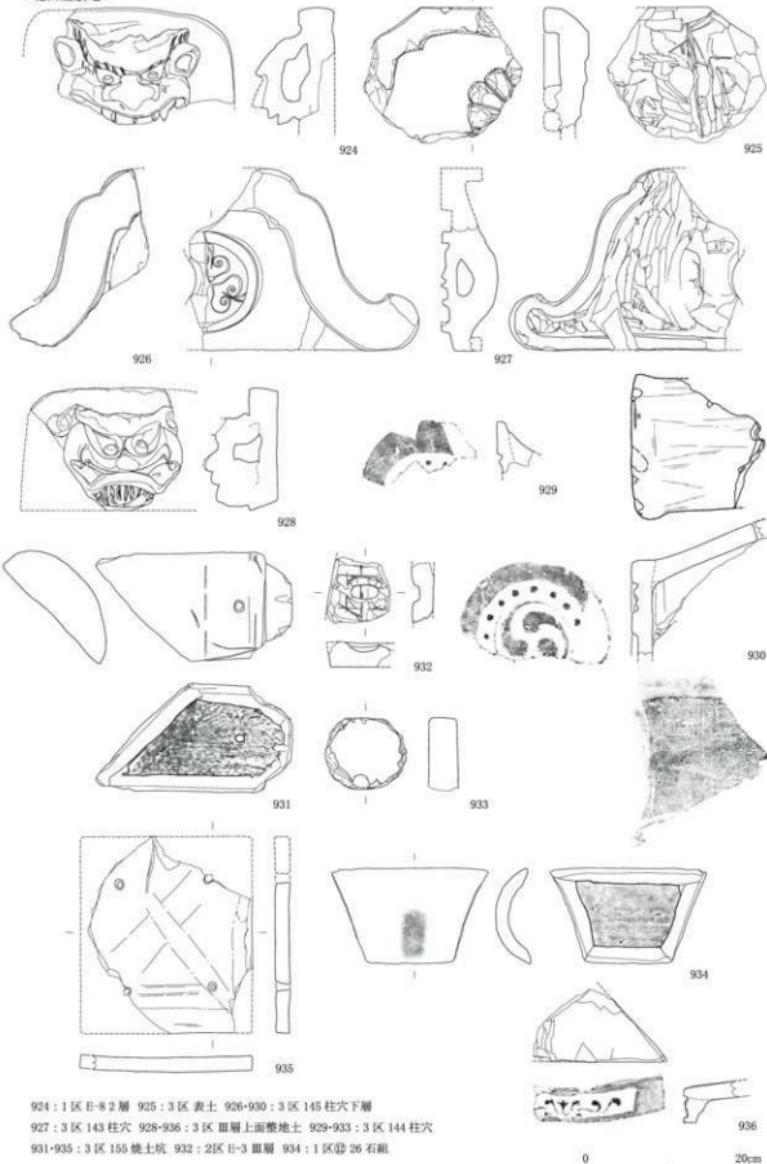


图94 瓦6 (道具瓦他)

第6節 石製品

1. 石臼

937～939は砂岩製の石臼。937は粉挽臼の上臼で、径約30cm、側面高さ約10cm。上面にもくぼりの孔、側面には長方形の孔を2か所あける。下面には8分画で各5本の溝があり、中央に鉄の軸痕が残る。1区⑩トレンチの3土坑から出土した。938・939は3区155焼土坑出土。938は粉挽臼の上臼で径約30cm、側面高約13cm。二次焼成を受けて破損している。939は石臼の欠片。938の下臼の可能性もある。他に側面のほぞ穴に合う石棒が出土している。

2. 砥

940・941は流紋岩類の長方形の硯。乳白色系の硯面には擦痕と墨痕がある。長さ約18cm、幅約7.4～7.7cmで、厚さ2.5～3.3cmと厚い。940は1区E-8トレンチ他の80土坑出土。

942～949は頁岩製の長方形硯。硯面には擦痕と墨痕がある。942は青灰色の小型品で、長さ13.5cm、幅4.0cm、厚さ2.2cmで、粗雑な作りをしている。323大型廃棄土坑出土。943は緑白色の中型の硯で、長さ11.5cm、幅7.0cmで、縁が丸く、硯面が大きく擦り減る。944は灰色の硯片で、374土坑出土。945は942と類似する硯の破片。599土坑出土。946は灰色の中型の硯で、長さ12.5cm、幅6.2cm。縁は丸い。947は青灰色の硯で、縁がすべて欠けている。硯面に大きな窪みがあり、砥石として転用した可能性がある。948は3区表土で出土した灰黒色の硯。長さ12.4cm、幅6.4cm、厚さ2.0cmで、近世の硯に石に黒味があり、角ばっている。裏面に「昭和三年 清水安太郎 和歌山地方裁判所勤務」と針書きが示されている。949は緑白色系で、長さ17.4cm、幅7.7cm、厚さ2.5cm。硯面に窪みをもつ。

3. 砥石

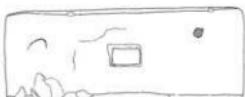
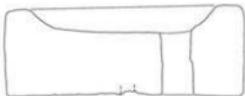
950～956は北西屋敷地出土の砥石。950～952は珪質頁岩製で、薄く細長い板状の砥石。950は8.2×3.6×0.85cm。1区F-2トレンチの20土坑出土。951は幅6.5cmとやや大きい。952は幅4.7cmで、3区155焼土坑出土。953は珪質頁岩製で形状不明の砥石。3区214土坑出土。954は砂岩製の大型品で、16.8cm×11.6cm×5.6cm。1区F-2トレンチの65土坑出土。955は953と同系統、956は950～952と同系統の製品の破片。955は3区300土坑、956は3区323大型廃棄土坑から出土。

957～959は南西屋敷地出土の砥石。957は流紋岩類の砥石とみられ、乳白色を呈する。断面一辺6.0～6.8cmの方形で、長さは不明、筋状の擦痕が多数入る。941のような硯の石材の可能性もある。1層出土。958・959は珪質頁岩製の板状砥石。959は3区165土坑出土。

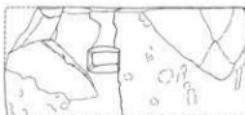
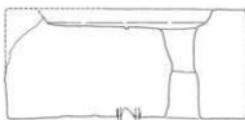
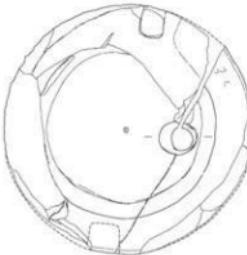
960・961は北東屋敷地出土の珪質頁岩製の板状砥石片。2区E-12トレンチの土坑群出土。

4. その他

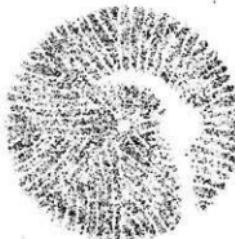
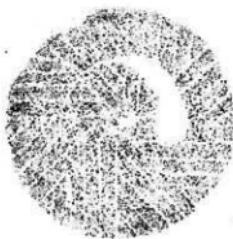
962～969は黒色珪質頁岩の玉石。962～967は1区G-5トレンチの37井戸状土坑で出土した墓石状の玉石。径は968・969より少し小さい。968・969は径2.2cmの墓石。970は石灰質の石。普通の石灰岩ではなく、釉薬に使う石灰石や陶石の可能性を考えている。そのほか、紀南で採取できる花崗岩片や、チャート片・琥珀片が出土している。



937



938



937 : 1 K@ 3 土坑 938-939 : 3 K 155 桶土坑

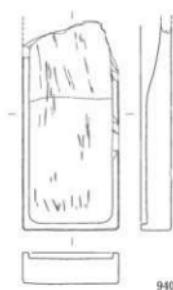


939

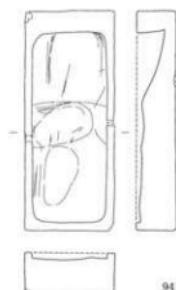
0 20cm

図95 石製品1(石臼)

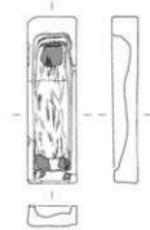
〈北西屋敷地〉



940



941

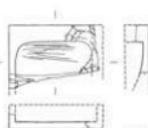


942

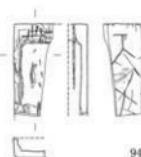
〈南西屋敷地〉



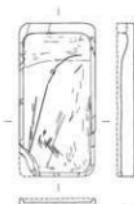
943



944



945



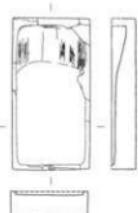
946

〈南東屋敷地〉

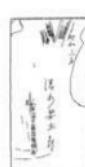
〈表土・擾乱〉



947



948



949

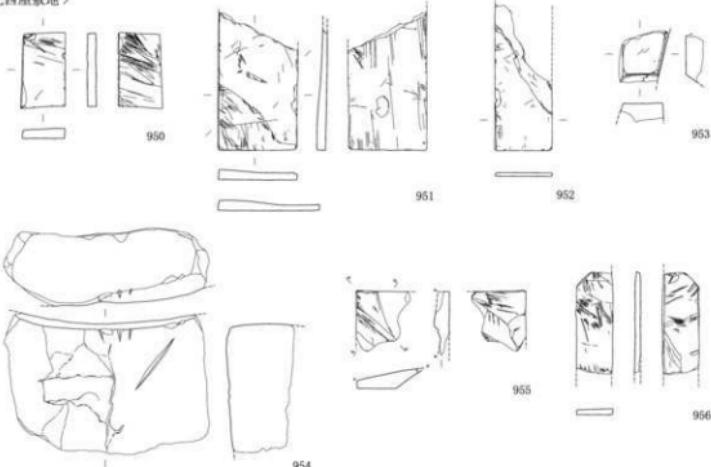
940 : 1区 G5 80 土坑 941 : 3区 2層 942 : 3区 323 土坑 943 : 3区 4層 944 : 3区 374 土坑

945 : 3区 599 土坑 946 : 3区 3層上面整地土 947 : 1区 E-6 整地土 948 : 1区 D-3 表土 949 : 1区 ② 土坑

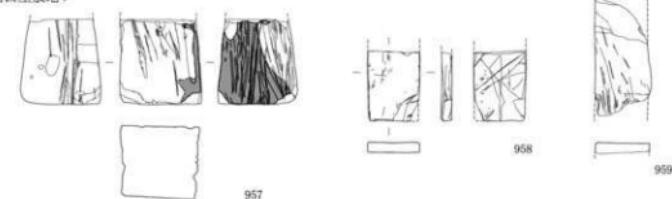


図96 石製品2（硯）

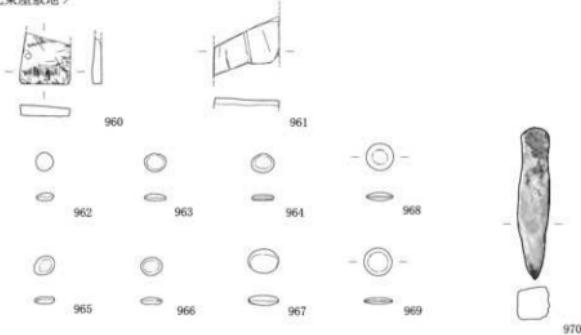
< 北西屋敷地 >



< 南西屋敷地 >



< 北東屋敷地 >



950 : 1 区 F-2 20 土坑 951 : 3 区 III 層上面整地土 952 : 3 区 155 焙土坑 953 : 3 区 214 土坑

954 : 1 区 F-2 65 土坑 955 : 3 区 300 土坑 956 : 3 区 323 土坑 957 : 3 区 1 层

958 : 3 区 II 層 959 : 3 区 165 土坑 960 : 2 区 E-12 18 土坑 961 : 2 区 E-12 24 土坑

962 ~ 967 : 1 区 G-5 37 井戸状遺構 968 : 3 区側溝 969 : 3 区 12 石数 970 : 2 区 E-12 側溝



図97 石製品3（砥石・碁石他）

第7節 金属製品・貨幣

1. 刀装具

971・972は銅製の切羽。973は銅製の鍔。974は金銅製の笄片。波状線刻と金箔下地の漆痕が残る。975～977は小柄で、鉄製刀子部分が若干残存する。975は金銅製品に真鍮と推定される金属を巻き、雀と笛を金彩で表現する。976は魚々子地と葡萄唐草紋を鋳出し、金箔を貼る。977は魚々子地と宝紋を線彫りする銅製の小柄。971・975は3区92土坑出土、972・973は3区155焼土坑出土、974は1区E-9トレンチの39土坑出土、976は3区144土坑出土。

2. 煙管

978～984は煙管（キセル）の雁首。979は途中に段差があり、982・984は火皿が残存する。982のように脂返しが短いものが多いが、984は長く彎曲が大きい。978は1区①グリッド45土坑出土、979は3区155焼土坑出土、980は3区166土坑出土。

985～988は煙管の吸口。すべて破損品であるが、985・986の中には、吸口と雁首を結ぶ羅字部分の木質が若干残る。985～987は羅字の観察される銅製品。988は口から断面八角形の部分が伸び、やや太くなる部分の肩部が若干残る。水口煙管の破損品と推定される。

3. その他の金具

989～991は有孔飾り金具。989・991は浅い「コ」字形の断面で表面に金箔を貼る。989は3区162土坑出土。990は銅製の飾り金具で、中央に折り曲げ痕がある。

992は銅製匙。993は曲った棒状銅製品。3区33石敷き出土。

994～996は銅線の吊り金具。土坑165出土。379～382のような土瓶の吊り手と考えられる。997・1002は鉄線とみられる吊り金具。997は灰釉土瓶、1002は鉄釉土瓶の把手に付く。997は3区283土坑。998は、鉄線を編み込んだ吊り金具状の製品片。999は吊手か引手状の銅製品で、324土坑出土。1000・1001は吊手状の用途不明製品で1層出土。

1003は銅製棒状製品で、中央に摘み状部分があり、両端が変色する。1004は薄い管状銅製品。1005は1区E-1トレンチ他13土坑の小環。1006は974笄の破片の可能性もある不明製品。1007は環状銅製品。1008は表面に菊紋と「歩」の文字の入ったワッペン状銅製品。1009は何かの部品か。1010は3区136土坑出土の環状製品。1011は菊花状の釦に一段僅む楕円形部がある組み合せ銅製品で、衾の引手金具と推測している。1012～1019は用途不明の銅製品で、1012～1016は近世の土坑から出土している。1020・1021は323大型廐乗土坑出土の鉄釘状の製品。

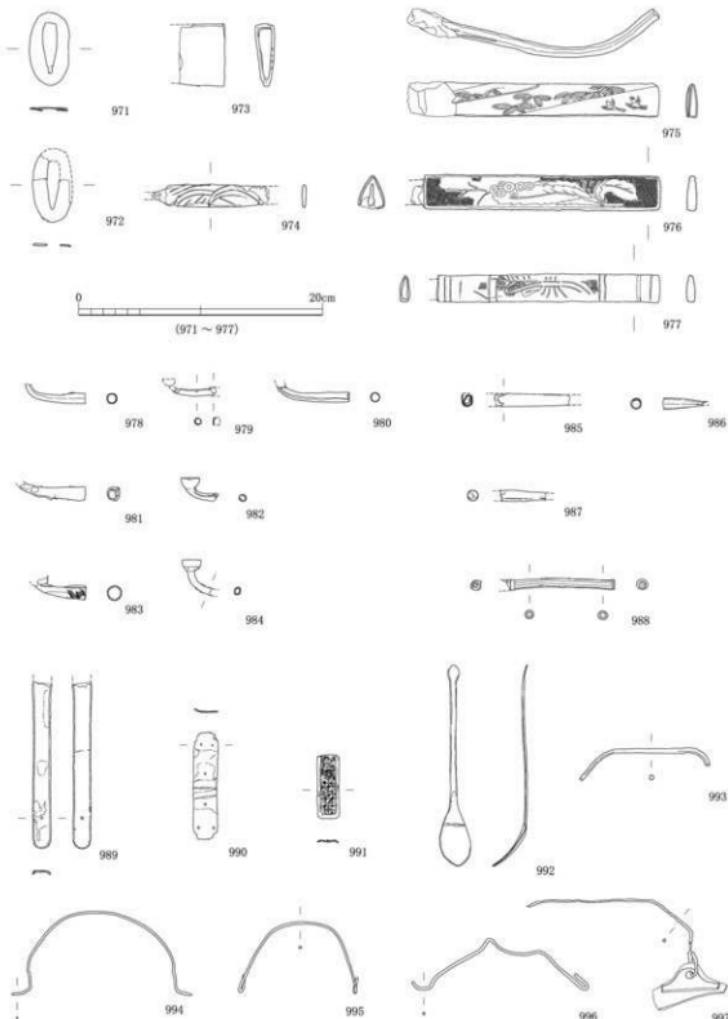
4. 貨幣

1022～1039は中国からの輸入錢。淳化元寶・咸平元寶・天聖元寶・皇宋通寶・治平元寶・熙寧元寶・元豐通寶・元祐通寶・聖宋元寶・洪武通寶・永樂通寶が出土した。1368年初鑄の洪武通宝が3区421土壤墓から6枚、第4面精査時に1枚出土したほかは、包含層等の出土品。

1040～1045は寛永通宝の古寛永。3区の91・216・323・460土坑等から出土。

1046～1054は寛永通宝の新寛永。1区E-9トレンチ74・80土坑、3区の39土坑等から出土。

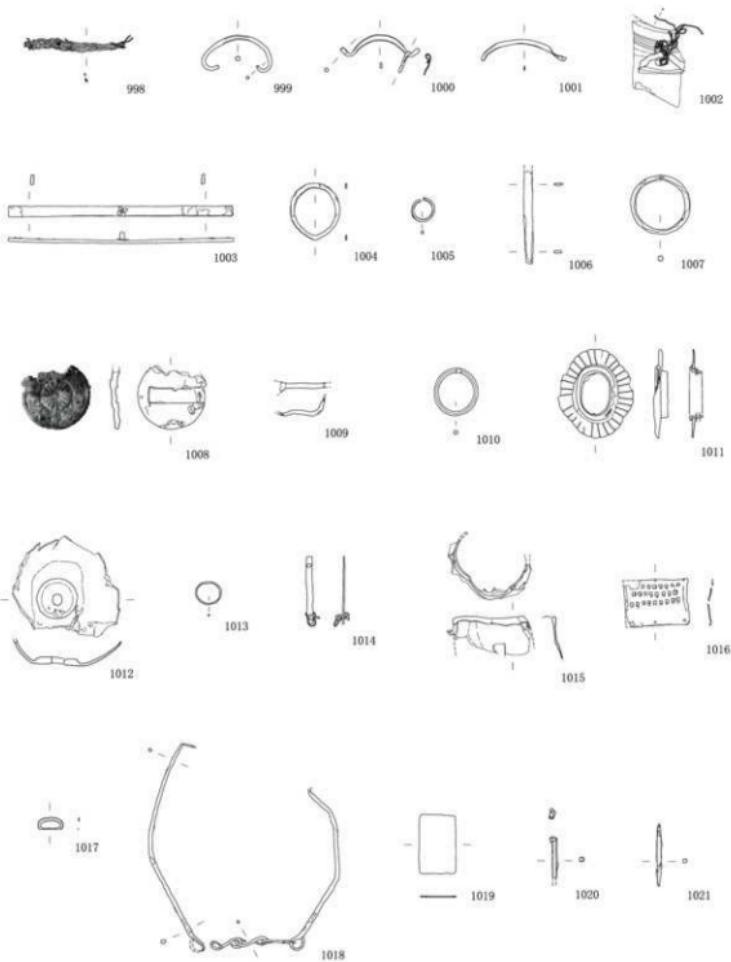
1055・1056は寛永通宝であるが詳細は不明。



971 : 3区 92 土坑 972-973-979 : 3区 155 烧土坑 974 : 1区 E-9 39 土坑 975 : 3区 92 土坑 976 : 3区 140 土坑 977 : 3区3面
978 : 1区 45 土坑 980 : 3区 166 土坑 981 : 2区 E-12 侧旗 982-987-988 : 3区 II 层 983-984 : 3区 III 层上面整地土
985 : 3区 347 土坑 986 : 3区 644 土坑 987 : 3区 162 土坑 990 : 2区 E-12 15 土坑 991 : 3区 I 层
992 : 2区 E-6 993 : 1区②33 石敷 994 ~ 996 : 3区 165 土坑 997 : 3区 283 土坑



図98 金属製品1 (刀装具・煙管・飾金具・匙・吊手金具)

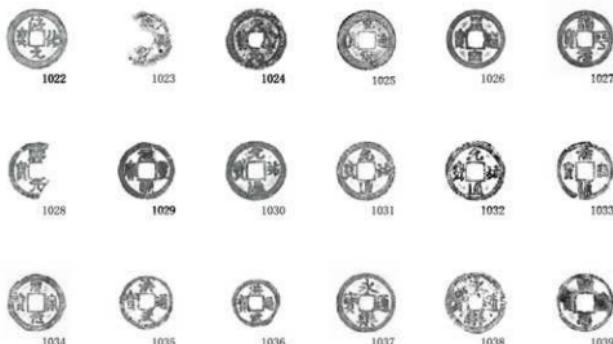


998 : 3区 300 土坑 999 : 3区 324 土坑 1000-1001-1017 : 3区 I 層 1002-1018-1019 : 3区 II 层 1003 : 1区①南東
 1004 : 1区②-2 28 ピット 1005 : 1区 E-1 13 土坑 1006 : 1区 G-5 34 石敷 1007 : 1区 H-3 1 土坑 1008 : 2区⑥ 1 土坑
 1009 : 3区 24 敷石 1010 : 3区 136 土坑 1011 : 3区 155 烧土坑 1012 : 3区 178 土坑 1013 : 276 土坑 1014 : 283 土坑
 1015-1016-1020-1021 : 3区 323 土坑

0 20cm

図99 金属製品2 (吊手金具他)

<中国輸入銭>



<寛永通宝>

(古寛永)



(新寛永)



(古・新不明)



(錢種不明)



1022~1024・1026~1028・1029~1032~1034~1036~1038~1039~1045~1046~1050~1053~1055:3区包含層
1025:1区②包含層 1027:1区③包含層 1030:1区C-3 57石敷 1031:3区284土坑 1035(貨幣6枚重なる):3区421土壤墓
1037:2区E-4包含層 1040~1041:3区91土坑 1042:3区216土坑 1043:3区323土坑 1044:3区460土坑
1047:3区39土坑 1048:1区E-9 74土坑 1049:1区E-8 80土坑 1054:1区E-1 13土坑 1056:1区G-5 37井戸状土坑



図100 金属製品3(貨幣)

第8節 木製品

木製品及び木片はコンテナ3箱分出土した。すべて深い土坑ないし井戸状の遺構から出土している。

1057は、136井戸状遺構南半出土の円盤状木製品。復元径18.0cm、厚さ1.9cm。厚手で板目取り。曲げ物の底板や蓋の可能性が考えられる。共伴遺物は18～19世紀。

1058・1059は284土坑出土。1058は漆塗り椀で、内外面黒漆塗り。底が厚手で、腰に稜線があり、残存高6.3cm。高台は径6.0cm、高さ1.6cmである。口径は11.5cm前後であろう。トチノキ製。1059は板状木製品。幅11.0cm、厚さ1.4cm、残存長11.2cm。一端の小口面が丸みを帯びる。片面が平滑で、上面にV字状の圧痕がある。表面がやや炭化している。共伴遺物は19世紀前葉で焜炉類・急須・湯呑や在地の行平鍋で、19世紀前葉の年代が与えられる。

1060は323土坑出土の結桶片。高さ24.1cm、復元径約21cm。底板は2枚を剥ぎ合わせ、博板は3枚残存しており、下方に瘤痕、底には削りこみが確認できる。共伴遺物の年代は18世紀後半～19世紀前葉。

1061は461土坑出土の板材。幅9.8cm、厚さ1.6センチで、残存長は76.0cm。共伴遺物の年代は19世紀。

1062～1064は591土坑出土木製品。1062は有孔漆塗椀で、内面朱漆、外面黒漆塗り。底が厚手で、腰に稜線があり、残存高9.0cm。高台は径6.2cm、高さ2.2cm。底部の孔は径2.0cm。ブナ属製。1063は露卯下駄。平面楕円形で、長さ21.4cm、幅8.0cm、厚さ2.4cm。台上に鼻緒孔と差歎の枘孔がみられる。差歎状の木片が2点出土しており、下駄の高さは5.7cm分確認できる。なお、和歌山は露卯下駄が幕末まで残存する地域として知られている。台はアスナロ属、歎とみられる破片はモクレン属製。1064は板材。幅10.0cm、厚さ2.2cm、長さ71.9cm以上。長さ約70cmのところで幅が半分になり、さらに伸びる形状をしている。共伴遺物は18世紀～19世紀前葉。

このほか、図化対象とはならなかつたが、以下の木製品片が出土している。

1区F-2 トレーナーの石組枠から一端を尖らせた丸杭が1本した。

3区の185木枠遺構では、長さ28.0cm・19.5cm・16.5cmの板が数枚ずつと多量の炭化した木灰片が出土している。

284土坑からは板片、591からは薄い板状片が出土した。

323土坑から結桶の博板片1枚(23.5×7.0×1.0cm)と板片(67以上×25cm以上×1.2cm)、

443土坑から結桶の博板片2枚(16.0cm以上×8cm×1cm)と両端近くに孔をあけた板状製品(14×3.4×1.2cm)1点が出土した。

また、443土坑からは桃核片が出土した。

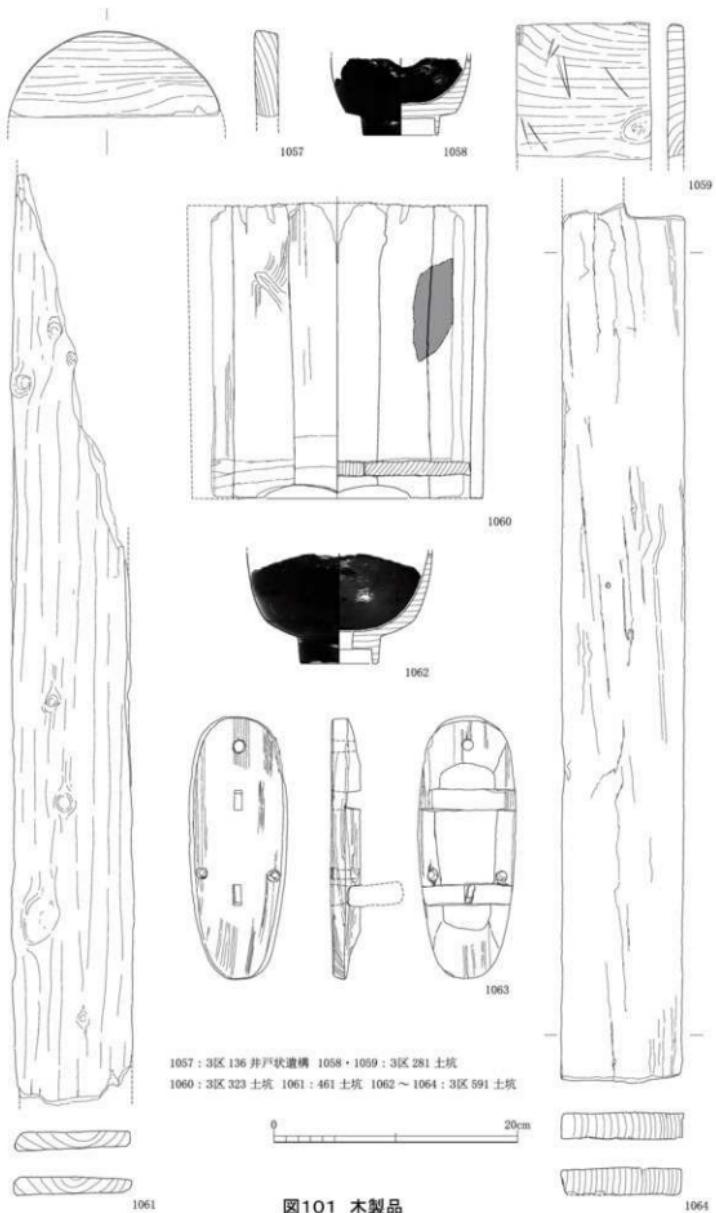


図101 木製品

第9節 その他の遺物

1. 骨類

人骨と獸骨が少數出土している。

3区420貝殻廃棄土坑内では、少數の獸骨も出土している。大型哺乳類の四肢の骨については、馬か牛の骨とみられる。また、亀の骨が出土しており、イシガメ類の骨と推定される。

3区土壙墓421からは人骨が出土した。全体に華奢であり、乳歯はなく、歯の擦り減りは少ない。若い女性の骨である可能性が高いものと考えられる。頸骨や歯及び四肢の骨は残存しているが、その他の骨は砂上に付着して輪郭が残存しているような状況であった。421土壙墓以外の周辺の土壙墓では人骨の残存を確認できなかった。

その他1区④グリッド59土坑、1区C-3トレント81土坑、2区E-12トレント10土坑、3区284・323土坑で獸骨が出土している。2区E-12トレント10土坑及び3区F6区画攪乱内出土の738餌猪口内からは魚類の骨と思われるものが出土している。

2. 貝類

中世末から近世にかけて、多数の貝が出土した。大半は食用とみられ、廃棄土坑から検出されたものが多い。マジジミは多量、サザエ・マガキ・ハマグリは多數、クロアワビ・サルボウガイ・バカガイ・コタマガイ・アサリ・スガイは少數、イボウミニナ・バイガイ・オキシジミ・ベンケイガイの仲間・テングニシ・ワスレガイは数点出土した。その他、サンゴが出土している。

3層上面（標高2.4～2.6m）では、径30～50cmのマジジミの貝殻廃棄ピットを多數検出した。これらの構造は1区F-3の18・21・23・25・31ピットと1区C-7の26ピット、3区410・411土坑であり、調査区の北側で確認されている。410土坑内に1点の土師皿が出土したほか土器が伴わない。中世土壙墓群より若干検出標高が高いことから、中世末期の廃棄土坑と推定される。

近世の陶磁器が多數出土した廃棄土坑からは、貝類も多數出土している。1区②グリッド29土坑ではサザエ・バカガイ、1区④グリッド19土坑ではサザエ・スガイ、1区④グリッド56土坑ではバカガイ・ハマグリ・サザエ・マジジミ、3区165土坑ではサザエ・マガキ・ハマグリ・スガイ・バカガイ・クロアワビ・バイガイ・サルボウガイ・マジジミが、3区176土坑ではハマグリ・サザエ・コタマガイ・オキシジミ・ベンケイガイの仲間、3区186土坑ではマガキ、323土坑ではハマグリ・サザエ・サルボウ・スガイ・マジジミ、3区490土坑ではサザエ・サルボウガイ・テングニシが出土した。基本的に食用の貝が廃棄されていることが分かる。

3. 炉壁・壁土

炉壁片が3区の74・82・374土坑等から出土した。193・241竈状構造に近く、これらは窯跡の可能性も考えられる。193の近くで出土したものは片岩クサリ礫を多量に含み、被熱により赤変し、緩やかにカーブを描く内面が薄くガラス質になる。241の近くで出土した炉壁は砂質で灰色を帯びており、内面は木炭が混じり凹凸が激しく、金属滓が厚く融着している。なお、金属滓の混じる土塊は492土坑等から出土している。

壁土は1区E-1等13焼土坑及び3区155焼土坑から、焼土や焼けた瓦とともに出土した。壁土は木舞を縦横にからめた粗い藁混じりの土で、漆喰を塗ったものはみられない。

第6章 総括

1. 調査成果の概要

和歌山城跡では三の丸武家屋敷地において、和歌山地方・家庭・簡易裁判所の新営工事に伴う発掘調査を行った。調査は平成23年度に実施し、整理作業は平成26年度に実施した。調査では、建物に付随する施設・配管部分のうち西側を1区、東側を2区として調査を進め、その後本体部分を3区として調査した。1区は3～5面、2区は2～4面、3区は5面の調査を行い、調査面積は2,760 m²。述べ調査床面積は10,879 m²、出土遺物は597箱分であった。

各調査区の代表的な成果をまとめると、次のとおりである。1区は調査面積594 m²（述べ1,904 m²）で、屋敷地境界施設や石組の井戸・枠・暗渠といった水周り施設等を確認した。2区は調査面積128 m²（306 m²）で、19世紀の窯道具や「瑞芝」「化物堂」銘入りの軟質施釉陶器類、その他の多量な在地産とみられるミニチュア土製品や土器・陶磁器類が出土した。3区は調査面積2038 m²で、第1面では明治19年建設の裁判所基礎とみられるものを検出した。第2・3面では4区画の武家屋敷地に伴う遺構群を確認した。第4面では中世土壙墓群が展開しており、第5面では平安時代後期から鎌倉時代の状況がうかがわれた。

2. 古墳時代から中世まで

和歌山平野の遺跡は標高3m程度の遺跡が低地の遺跡として認識されてきたが、近年では、標高1.5mより低い遺構面が和田遺跡、神前遺跡、鷺ノ森遺跡等で確認されている。今回の調査で無遺物の地山面が確認されたのは標高1.3mであるが、遺構は確認されていない。

調査地の南には石切り場として知られる小さな岡があり、片岡町という地名と式内社の刺田比古神社が残されている。この付近は『続日本紀』の神護景雲3年（769年）条で陸奥の大伴部の祖先が住んでいたという紀伊国名草郡片岡里の一角と推定される場所であり、神社の西側には岡の里古墳が築かれている。今回の調査地で出土した遺物は岡の里古墳の築造時期を含む6世紀前半から7世紀後半のものであり、埴輪を含んでいる。調査区付近には埴輪を樹立する古墳を含む古墳時代後期の古墳群があったものと考えられる。

標高1.8m前後の第5面では、須恵器・黒色土器・瓦器を含む南西方向への落ち込みが確認された。標高2.0m前後の第4面では粘土（シルト）採掘坑と思われる遺構が多数掘削されているが、出土遺物は微量である。4面と3面の間の標高約2.4～2.6mの砂層上面には6～8基からなる室町時代の土壙墓群が形成されている。土壙墓は長さ1.3m、幅0.8m前後で、中央を窪ませた墓壙の上に床面を作る。421土壙墓からは屈葬人骨に、1368年初鉄の洪武通寶が6枚供えられていた。また、北半部の砂層上面ではマジミの貝殻を廃棄したピット・土坑が8箇所確認された。

3. 中世末から近世初頭

調査地付近は雜賀衆の勢力圏内であったが、1585年に羽柴秀吉に制圧されて城の建設が始まる。和歌山城城主は羽柴秀長であるが、桑山重晴が城代として入り、後に藩主となっている。今回の調査地では桑山重晴の家紋である桔梗紋の軒丸瓦が出土している。この前後の年代の遺物と

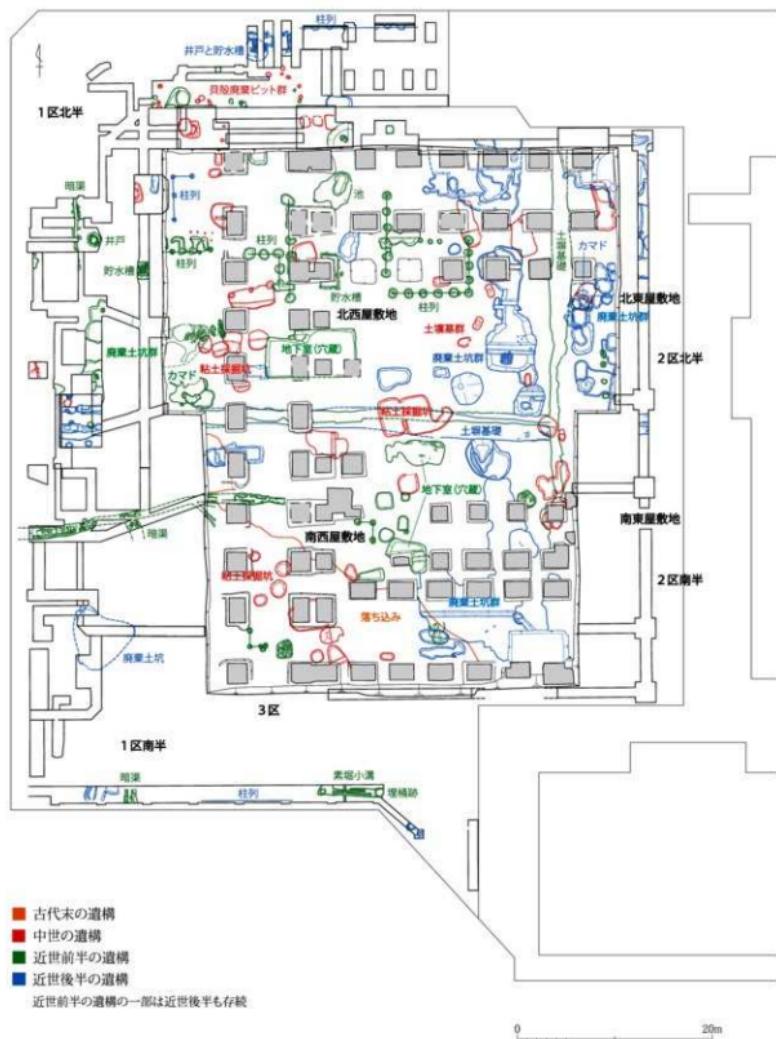


図102 調査区の概要

して、中国の景德鎮窯・漳州窯・徳化窯からの輸入陶磁や瀬戸美濃の皿や焰格等が出土している。

その後、1600年に浅野幸長、1617年には徳川頼宣が入城し、紀州55万石5千石の城下町として栄えている。桑山期から浅野期にかけての陶磁器は唐津のほか志野や織部がみられるが、17世紀の遺構面は削られており、その大半は18～19世紀の整地土中から出土している。各時期の遺構面や整地土下面から土取り穴とみられる深い穴が掘られており、災害にあう度に地表面の瓦礫と砂と地下の土を混ぜてかさ上げして、屋敷地の刷新を図った様子がうかがえる。

調査地西側の砂層上面では17世紀の遺構が多数残存しているが、東側では17～19世紀の土器が混ざった整地土が厚く堆積する。屋敷地を整地する際に砂をあまり混ぜたくなかったことが理由と考えられる。シルト質の土を多く混ぜるために、粘土やシルト質土の採掘坑は円形ないし隅丸方形で深く掘りこみ、その後には砂を入れている。17世紀までの採掘坑はほぼ砂で埋まり、18世紀の採掘坑の埋土は多様、19世紀の採掘坑の埋土は遺物が多量に混ざる廃棄土である。

4. 近世武家屋敷地の構造

当調査地では近世屋敷地の生活面が残らず、災害にあう度に削平と整地を繰り返して造成されている。標高2.6～2.8mの状態で繰り返し遺構面が形成されたものと推定され、広域に広がる整地土を除去すると、複数の時期の遺構と整地土が現れる。削平により礎石建ちの建物はまったく残っておらず、小型のピットの数も比較的少ない。一方、深く掘削する廃棄土坑や井戸、水溜め、暗渠といった施設は多数検出され、地中に掘りこんだ柱穴も複数箇所で検出された。砂地に造成された屋敷地であるため、屋敷地境界の土塀の下は溝状に掘りこみ、シルト質の土を充填して地盤沈下を防いでいる。

北西屋敷地では、母屋の跡は残されていないが、多量の瓦が出土しており、礎石建ち建物であったと推測される。敷地内は柵でいくつかのスペースに区切られており、屋敷の中央からやや奥にかけての遺構の少ないスペース付近に母屋が想定される。主屋に隣接する西側には北から順に池状遺構、石組枡、地下室（蔵か）があり、柵で区切られている。さらに西側には竈状遺構や小規模な柱列があり、オモテ寄りの場所に石組井戸・石組枡・暗渠などが検出される。母屋の奥には一辺1～2mの長方形の廃棄土坑があり、屋敷地の最も奥には巨大な廃棄土坑が繰り返し掘られている。

南西屋敷地では二つのL字形の柱列に囲まれたあたりが遺構密度が低く、その奥（東）側には巨大な廃棄土坑が掘られている。屋敷地の北側には地下室を伴う蔵を立て、オモテ（西）側には暗渠が多数埋設されている状況が確認できる。北東屋敷地や南東屋敷地においても屋敷地境界近くに多数の廃棄土坑を掘削しており、共通した土地利用の様子がうかがえる。

5. 出土遺物の傾向

土器・瓦が多量、石製品・金属製品・木製品が少量出土している。土器は古墳時代から室町時代までの須恵器・土師器・黒色土器・瓦器は微量で、江戸時代の土師質土器と陶磁器が多量に出土している。17世紀の主な土器類は、唐津の碗・皿、瀬戸美濃の天目茶碗・灰釉丸碗・皿、肥前系染付、備前擂鉢・焰格、土師皿等である。織部・志野なども少量出土している。18世紀の主な土器類は、肥前系染付丸碗・皿等、瀬戸美濃を中心とする灰釉・鉄釉陶器類、京信楽系・肥

前系京焼風の灰釉陶器等である。19世紀の主な土器類、肥前系・瀬戸美濃系の染付広東碗・端反小碗等、灰釉・鉄釉の鍋・土瓶類・香炉等、透明釉をかけた土師質灯明具、ミニチュア土製品、色絵磁器、窯道具等である。

陶磁器は產地別でみると輸入陶磁（景德鎮・漳州・德化）、肥前系陶磁器（唐津・現川・伊万里・波佐見・鍋島）、瀬戸美濃系陶磁器（瀬戸・美濃・志野・織部）、京信楽系、堺・明石・丹波・備前・大谷・郡中十錦・萩・南紀男山・瑞芝が確認できる。特徴的な器種の確認個体数をみると、紅皿が34点以上あり、外面型押しが圧倒的に多く、舟形と内面型押しが若干みられる。碗形やミニチュアの類似品も出土している。お歯黒用の鉄漿壺は焼締陶器の小壺で、鉄漿壺は小型鉄釉陶器を用い、各5点程度確認できる。鬢盤は瀬戸美濃系の鉄釉摺絵灰釉陶器が大半を占め、10点程度確認できる。文房具は水滴が25点程度あり、染付が多く、鳥形白磁製品が数点みられる。

茶道の道具は志野茶碗・備前水指・織部向付といった焼き物の破片があるが、少ない。それに対する煎茶道の道具は「瑞芝」「栗田」等の銘の入るものと含む多数の涼炉のほか、染付・朱泥・素焼き・灰釉の急須、京信楽系・瀬戸・伊予の郡中十錦といった煎茶碗が出土している。このほか、手びねりの軟質黒釉陶器の鳥形香合が出土しており、内面に金箔を貼って珍重していることから、藩主から拝領したお庭焼の可能性もある。

19世紀には窯道具のほか、「瑞芝」「化物堂」銘のある行平鍋や土瓶、素焼きの土器・ミニチュア土製品、無地の磁器・粗雑な上絵付けの製品などが多数出土している。ミニチュア土製品は施釉するものと土師質のものに分かれ、施釉するものには灰釉や鉄釉の行平鍋をまねて作ったミニチュア施釉土製品も確認できる。ミニチュア土製品は写真図版に掲載したほか80点ほど出土している。石灰石の出土も注目される。そのほか、炉壁や金属滓も出土している。

瓦は巴紋軒丸瓦と唐草紋軒平瓦が多い。瓦が多量に出土した二つの焼土坑では巴紋軒丸瓦と唐草紋滴水瓦、丸瓦・平瓦の組み合わせで、地下室状の遺構跡に焼土とともに埋められている。少量の海鼠壁瓦を伴っており、地下室を伴う蔵に葺かれた瓦がそのまま地下室に埋め立てられた可能性も考えられる。なお、桑山家・紀州徳川家・三浦家の家紋入り瓦が各1点ずつ出土している。このほか、戯画瓦が出土している。

石製品は石臼が3点、硯が12点、砥石が17点、珍しい石材として花崗斑岩・石灰石・チャート・コハク片が出土している。金属製品は、刀装具や煙管が多数出土した。木製品は、漆塗り碗・下駄が出土している。このほか人骨・動物骨・貝類が出土した。武家屋敷地造成前はマシジミ、造成後はカキ・サザエ・ハマグリ・クロアワビ等が食べられていた状況が確認できる。

本文註・参考文献

註1 図3では日下雅義 1997『紀伊漆と吹上浜』『和歌山の研究』を使用した。

註2 図4では和歌山県教育委員会 2007『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』を改変した。

註3 図5では和歌山市立博物館 2007『南海の鎮 和歌山城—その歴史と文化—』を改変した。

註4 註3文献を参照。

参考文献1 和歌山県文化財センター 2008『和歌山城跡一和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う発掘調査報告書一』

参考文献2 (公財)和歌山県文化財センター 2012『公益財團法人和歌山県文化財センター年報』2011

標本番 号	名目	地名	产地	通称	学名	特征	地名等(新・ 古)	備考
3859	8512	3	112525			白皮油松	1,000 m (1) 1,500 m (1)	樹皮(球果等)
3860	8513	3	112525			白皮油松	1,000 m (1)	日本(球果等)
3861	8560	3	112526	91	上坡	白皮油松	2,1	0.1
3862	8561	3	112519	91	上坡	白皮油松	2,4	0.1
3863	8562	3	112519	11	上坡(1)	白皮油松	2,5	0.1
3864	26068	3	112513	216	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3865	8514	3	112513	313	987 7 235	白皮油松	2,5	0.1
3866	8515	3	112513	900	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3867	8516	3	112520			白皮油松	2,5	0.1
3868	8515	3	112512			白皮油松	2,5	0.1
3869	8517	3	112512			白皮油松	2,5	0.1
3870	8518	3	112513	50	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3871	8519	3	112513	74	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3872	8520	3	112513	86	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3873	8521	3	112513	86	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3874	8522	3	112513	111	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3875	8523	3	112513	213	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3876	8524	3	112513	213	上坡	白皮油松	2,5	0.1
3877	8525	3	112513	213	上坡	白皮油松	2,5	0.1
		合計		357	上坡(29株)			

表 9 木製品観察表

標本番 号	名目	地名	产地	通称	特徴	地名等(新・ 古)	備考	
3867	2630	3	112524	136	上坡(2株)	1) 带皮之松脂	17.72	帶皮松脂(油)
3868	8513	—	—	294	上坡	带皮油松	17.8	帶皮松脂(油)
3869	8512	3	112524	294	上坡	带皮油松	26.5 (6.3)	日本(球果等)
3870	8516	3	112524	273	上坡	带皮油松	11.1	—
3871	8513	3	112524	301	上坡	带皮油松	26.5 (6.3)	日本(球果等)
3872	8513	3	112524	301	上坡	带皮油松	11.1	—
3873	8514	3	112524	301	上坡	带皮油松	26.5 (6.3)	日本(球果等)
3874	8517	3	112524	301	上坡	带皮油松	11.1	—
3875	8512	3	112524	301	上坡	带皮油松	26.5 (6.3)	日本(球果等)
3876	8512	3	112524	301	上坡	带皮油松	11.1	—
3877	8512	3	112524	301	上坡	带皮油松	26.5 (6.3)	日本(球果等)
		合計		397	上坡			

写 真 図 版

写真図版1 調査区全景



和歌山城（南東から）



調査前全景（南から）



調査前全景（西から）



三の丸東部屋敷地跡（西から）



天守閣と調査地（北東から）

写真図版2 調査区全景



天守閣と調査地（東から）



調査地から本丸を望む（東から）

写真図版3 1区北半グリッド



1区北半グリッド配置状況（南から）



①グリッド第1・2面（西から）



②グリッド3面（北から）

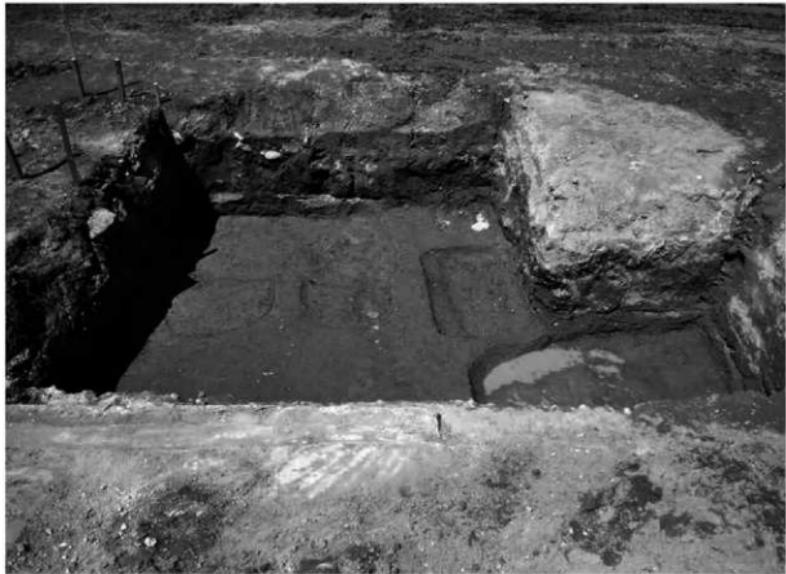


①グリッド3面（西から）

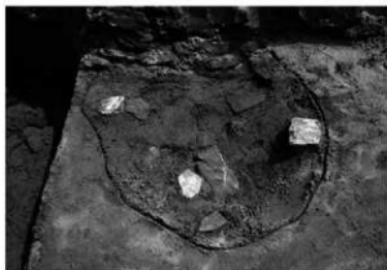


1区③グリッド4面（南東から）

写真図版4 1区北半グリッド



④グリッド4面（南から）



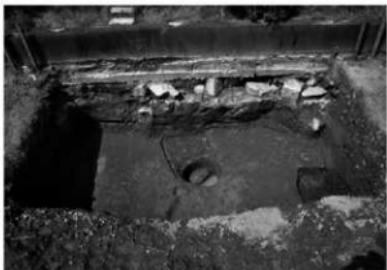
④グリッド59土坑（北から）



⑪グリッド2面（南から）



⑤グリッド5面（南から）



⑫グリッド4面（南から）

写真図版5 1区北半トレンチ



1区北半トレンチ配置状況（南から）



北部第2面（西から）



北部第3・4面（西から）

写真図版6 1区北半トレンチ



G-9・⑨-1・2 トレンチの石組遺構群（南から）



G-9 トレンチ 1 水溜め状遺構（西から）



G-9 トレンチ 38 石組井戸（南西から）



⑨-2 トレンチ 2 石組枠（北西）



C-7 トレンチ 26 貝殻廃棄土坑（東から）

写真図版7 1区北半トレンチ



南西部 G-6・F-2 トレンチ付近（東から）



北西部全景（南から）



G-6 トレンチ石組井戸（西から）



C-3 トレンチ石組溝（東から）



E-8・G-5 トレンチ 34・45 石敷（北東から）

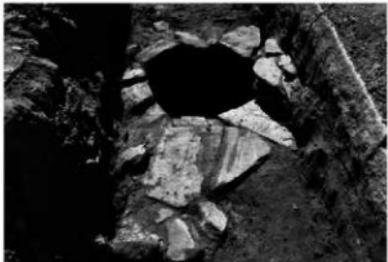
写真図版8 1区北半トレンチ



南西部全景（北東から）



F-2 トレンチ 23 石組枡（東から）



F-2 トレンチ 64 石組井戸（北から）



F-2 トレンチ 64 石組井戸（北から）



C-3 37 土坑周辺（北から）

写真図版9 1区南半トレンチ



1区南半トレンチ配置状況（北から）



西部全景（北から）

写真図版 10 1区南半トレンチ



E-2 トレンチ付近第2面（東南から）



E-2 トレンチ2暗渠（南東から）



G-2・3 トレンチ付近第2面（北東から）



E-2 トレンチ2暗渠内部（南から）



G-3 トレンチ礎石（東から）

写真図版 11 1区南半トレンチ



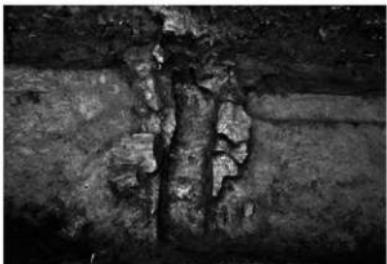
C-1 トレンチ（東から）



C-1 トレンチ 2 瓦組井戸状遺構（北から）



C-1 トレンチ南壁柱列（北から）



C-1 トレンチ 34 暗渠（南から）



⑩ トレンチ（北西から）

写真図版 12 2区



2区北半全景（西上空より）



E-12 トレンチ 10～19 土坑群付近（北から）



E-3 トレンチ付近（東から）



2区南半全景（北上空より）



E-12 トレンチ全景（南西から）



E-4・5・6 トレンチ（北から）



E-12 トレンチ 2 石敷き（東から）



E-5 トレンチ（西から）

写真図版 13 3区第1面



3区第1面全景（東上空から）

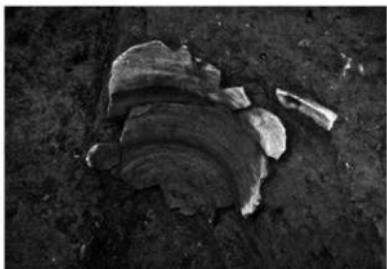


石敷全景（東から）

写真図版 14 3区第1面



石敷（南から）



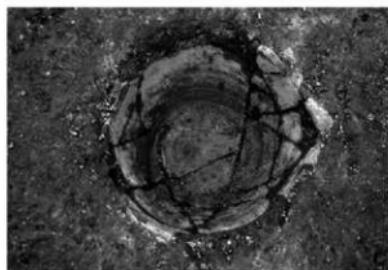
31 埋甕（南から）



建物基礎断面



31 埋甕接合状況（丹波焼）



26 埋甕（南から）



26 埋甕接合状況（大谷焼）



北西部第1・2面

写真図版 15 3区第2面



3区第2面（西上空から）

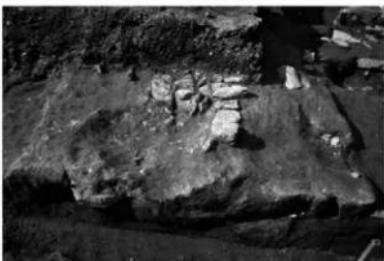


第2面全景（北から）

写真図版 16 3区第2面



3区西部中央第1・2面（北から）



屋敷境界の石敷き（1面）と基礎地形（2面）（東から）



境界上層遺構 87-88（第1面相当：南から）



境界下層遺構（第2面：東から）

写真図版 17 3区第2面



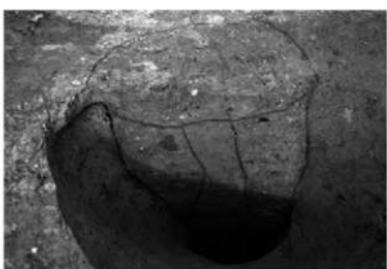
66 土器据え付け遺構（第2面相当・南から）



91・92 土坑（南東から）



68 暗渠（南東から）



100 柱穴（南から）



67・68 暗渠（東から）



109 池状遺構（白色化した範囲：東から）



81 容器据え付け遺構（南から）

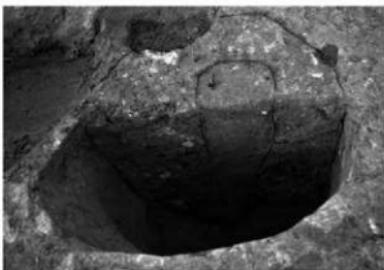


136 土坑（南から）

写真図版 18 3区第2面



北西屋敷地の遺構集中部（北から）



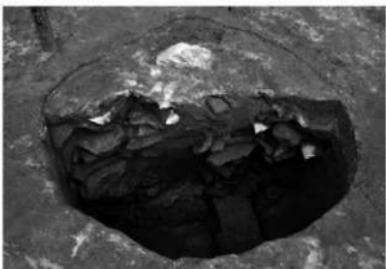
141 柱穴（南から）



142 石組枡（西から）



142 石組枡（北西から）

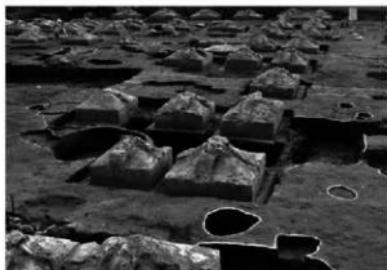


144 柱穴（南から）

写真図版 19 3区第2面



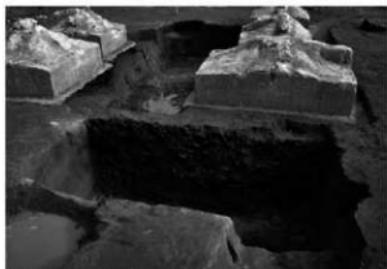
柱列2（北から）



155 焼土坑（北から）



185 焼土坑（西から）



155 焼土坑（西から）



186 壱殻廃棄土坑（南から）

写真図版 20 3区第2面



焼土坑・窯道具・在地産土器類集中地点（西上空から）



193 置ないし窯状遺構（北から）



焼土坑・窯道具・在地産土器類集中地点（南西から）



193 据え付け蓋



169 焼土坑（南から）



201 炭入り土坑（南から）

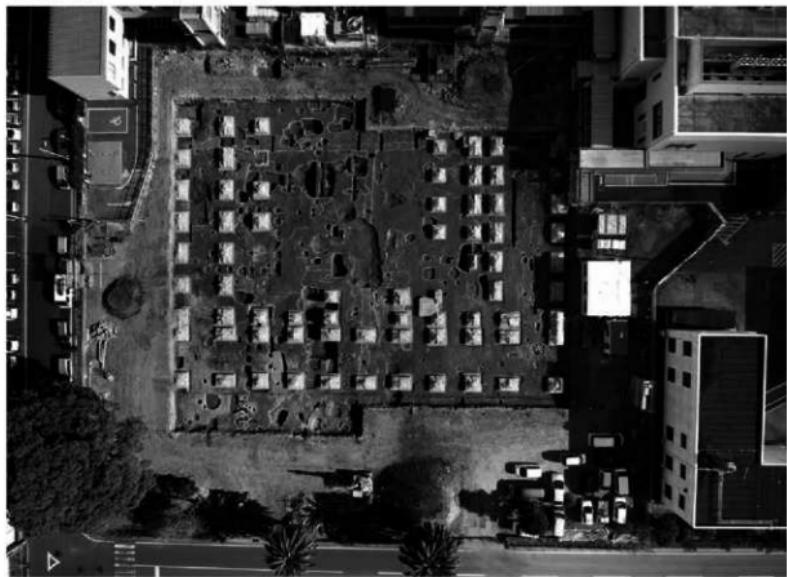


199 土坑上面焼土坑群（南から）



224 焼土坑（南から）

写真図版 21 3区第3面



第3面全景（西上空から）



第3面全景（北から）

写真図版 22 3区第3面



第3面全景（南西から）

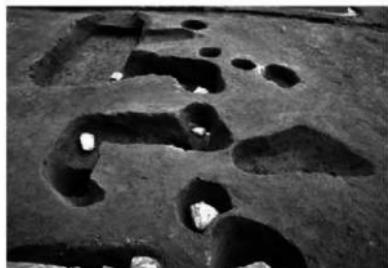


北西屋敷地全景（東から）

写真図版 23 3区第3面



柱列8（南東から）



柱列4・5（西から）



241・392周辺（北から）



柱列7（南から）

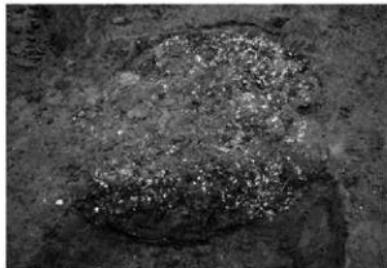


241・392竪状遺構（西から）

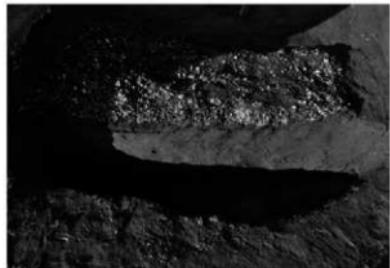
写真図版 24 3区第3面



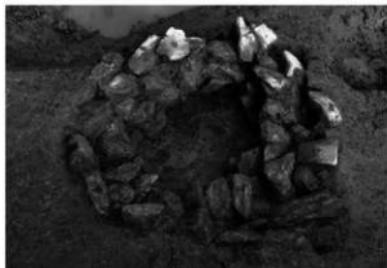
323 大型廃棄土坑（南から）



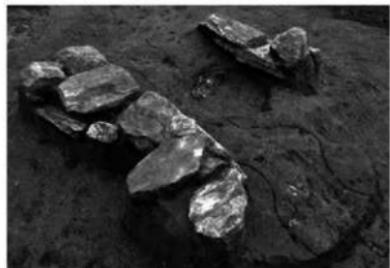
411 貝殼廃棄土坑（南から）



420 貝殼廃棄土坑（南から）



419 集石遺構（南から）



427 石組跡（南西から）

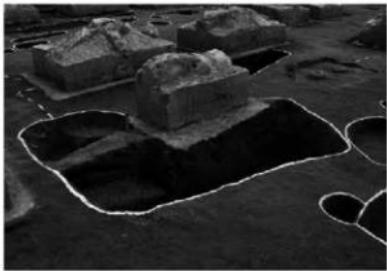
写真図版 25 3区第3面



北東屋敷地全景（南から）



屋敷地境界基礎地形トレンチ5（南西から）



378 地下室状遺構（北東から）



南西屋敷地全景（東北から）



423 地下室跡（南西から）

写真図版 26 3区第4面



第4面全景（東から）



土壤墓群（421・429・508・566）（南から）



421 土壌墓人骨出土状況（南西から）



421 土壌墓（南から）



421 土壌墓完掘状況（南南西から）

写真図版 27 3区第4面



土壌墓群（奥：434・手前：435）（南から）



柱列 12 周辺（南から）



497 容器据え付け土坑（南から）



429 土壌墓（南から）



498 方形土坑（南から）

写真図版 28 3区第4面



508 土壙墓（南から）



541 方形土坑（南から）



513 土壙墓（南から）



549 土坑（西から）



514～517 中世土坑群（南から）



556・557 方形土坑（北から）



540 土壙墓検出状況（北から）



566 土壙墓（南から）

写真図版 29 3区第5面以降



5面（西上空から）



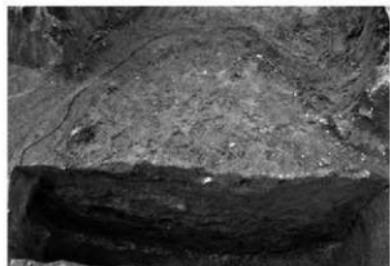
591 土坑（手前）（第3面相当：南西から）



604 土坑（南から）



602 土坑（北から）



612 土坑（南から）

写真図版 30 3区第5面以降



第5面全景（南西から）



603 落ち込み（北東から）



下層確認トレンチ①（西から）



626 落ち込み（北東から：白線より奥）



下層確認トレンチ②（南から）

写真図版 31 調査区壁面土層の色調



1区 E-1 トレンチ南壁



3区東壁南半（北西から）



1区 F-3 トレンチ南壁



3区中央擾乱内の境界基礎地形掘りこみ跡（西から）



3区西壁南部



3区西壁の626 落ち込み北端付近（東南から）



3区西壁北端部



下層確認トレンチ②の湿地状堆積（南から）

写真図版 32 焼土・被熱痕の色調



1区 E-1 他の 13 焼土坑（北東から）



199 堆積状況（西から）



E-12 土坑群の一部（北西から）



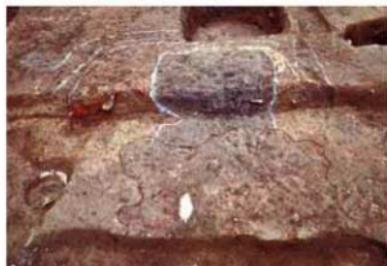
199 上面の焼土坑群（南から）



155 焼土坑（北西から）



k22 地点の焼土 ピット（南から）



193 窯ないし竈状遺構（北から）



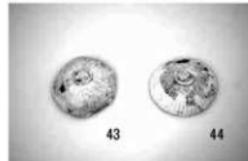
241・392 竈状遺構（西から）

写真図版 33 1 区出土土器



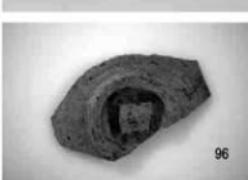
3・5はカラー写真図版 69 に掲載

写真図版 34 1 区出土土器



46・51はカラー写真図版 69 に掲載

写真図版 35 1 区出土土器



写真図版 36 1 区出土土器



98



112



120



102



113



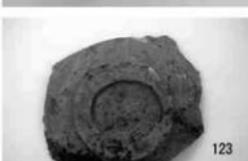
121



104



114



123



106



115



124



108



116



128



109



117



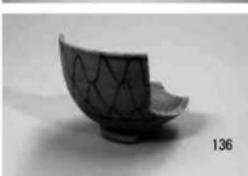
135



111

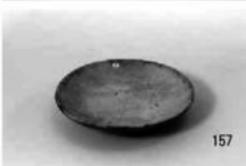


118



136

写真図版 37 1区出土土器



写真図版 38 1区・2区出土土器

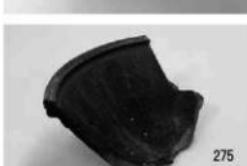
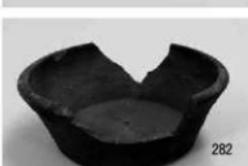
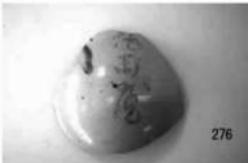


写真図版 39 2区出土土器



215・217・218・220～226・229～233・236・241・242・254はカラー写真図版70に掲載

写真図版 40 2区・3区出土土器



271 はカラー写真図版 70 に掲載

写真図版 41 3区出土土器

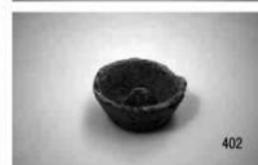
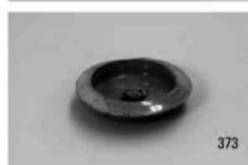


285 ~ 287 • 289 ~ 291 • 293 ~ 295 • 305 • 313 • 314 • 326 はカラー写真図版 70 に掲載

写真図版 42 3区出土土器



写真図版 43 3区出土土器

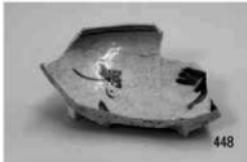
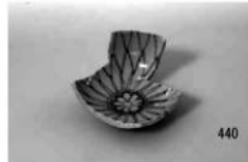


359・364・367・368・370・380・383・385～388はカラー写真図版71に掲載

写真図版 44 3区出土土器



写真図版 45 3区出土土器



449・450・462・463・469 はカラー写真図版 71 に掲載

写真図版 46 3区出土土器



479 ~ 481 • 487 • 491 と 492 • 493 • 502 • 503 はカラー写真図版 71 • 72 に掲載

写真図版 47 3区出土土器



520 ~ 522 はカラー写真図版 72 に掲載

写真図版 48 3区出土土器



写真図版 49 3区出土土器



560・573・575・582はカラー写真図版 72 に掲載

写真図版 50 3区出土土器



584



597



608



585



598



609



588



600



610



589



603, 604



611



593, 594



605



613



595



606



614



596



607



615

写真図版 51 3区出土土器



617



629



640



618



630



641



619



631



645



620



634



647



621



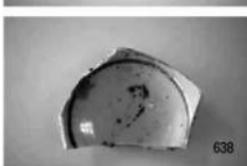
636



651



625



638



654



626



639



657

627・642～644・652・653・655と656はカラー写真図版72と73に掲載

写真図版 52 3区出土土器



674・676・677・681・685・688～690・694はカラー写真図版 73に掲載

写真図版 53 3区出土土器



703・710・728・732・734はカラー写真図版73に掲載

写真図版 54 3区出土土器



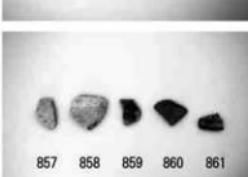
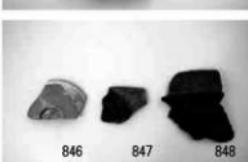
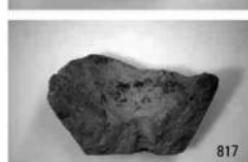
739 ~ 741 • 746 • 747 • 754 • 755 • 757 • 759 と 760 • 770 はカラー写真図版 73 と 74 に掲載

写真図版 55 3区出土土器



775・777・779・788・791・794・797・798・803・805・806・808はカラー写真図版74に掲載

写真図版 56 3区出土土器



816・820～823・830・838・843・852・853・862～864はカラー写真図版74に掲載

写真図版 57 瓦



865



872



879



866



873



880



867



874



881



868



875



882



869



876



883



870



877



884



871



878



885

写真図版 58 瓦



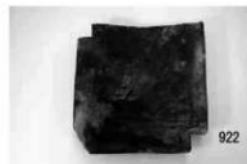
写真図版 59 瓦



907



914



922



908



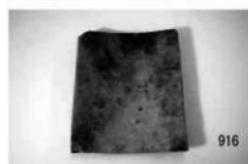
915



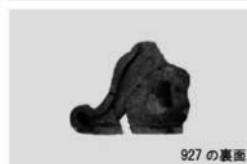
923



909



916



927 の裏面



910



917



933



911



918



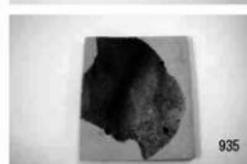
934



912



919



935



913



921



936

写真図版 60 瓦



920



928



924



929



925



930



926



931

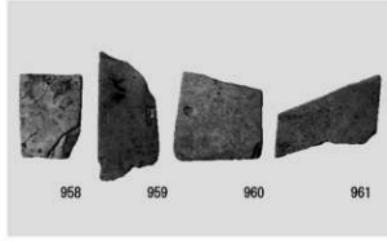
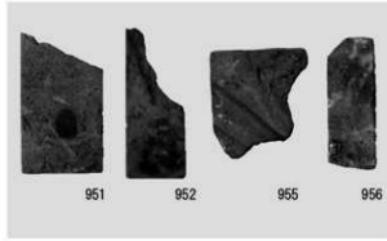
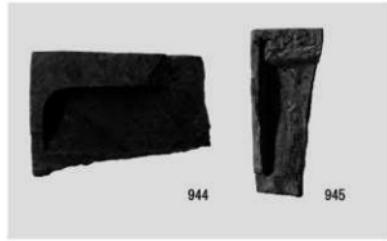
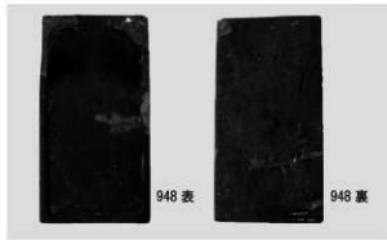


927



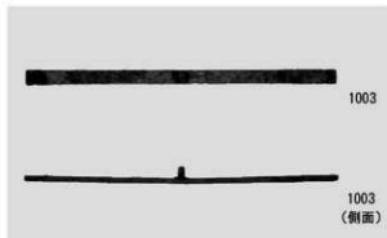
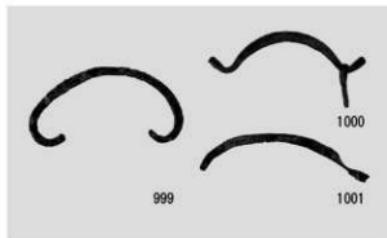
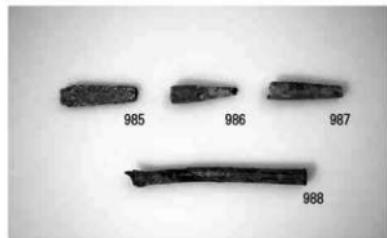
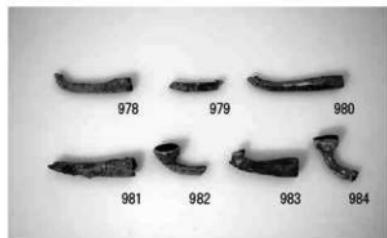
932

写真図版 61 瓦・石製品



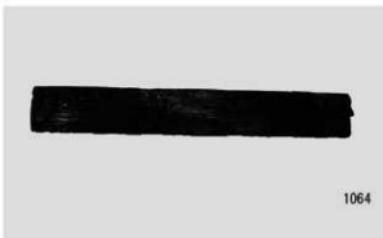
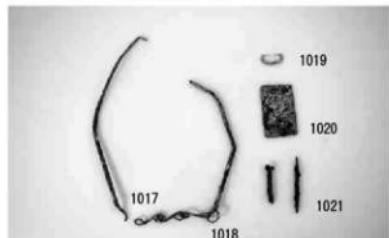
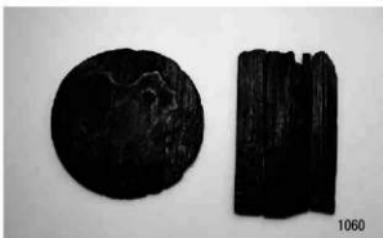
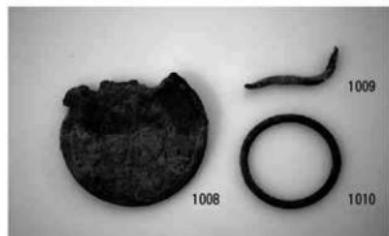
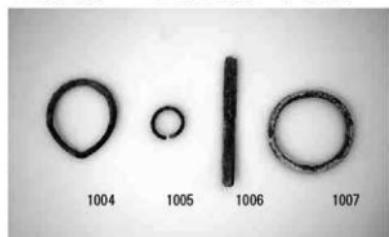
937・941～943・950・953・954・957はカラー写真図版75に掲載

写真図版 62 金属製品・木製品



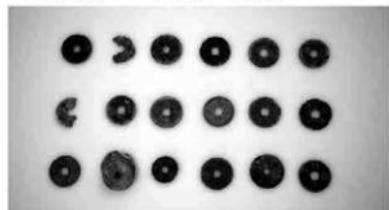
962 ~ 970 • 974 ~ 977 • 989 ~ 991 • 997 • 1002 はカラー写真図版 75 に掲載

写真図版 63 金属製品・木製品



1011・1058・1062・1063はカラー写真図版 75 に掲載

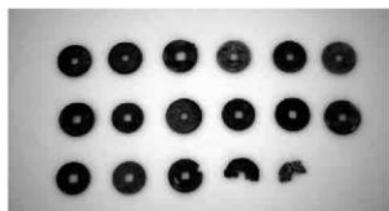
写真図版 64 貨幣・骨類



貨幣 1022～1039（左上から）



獸骨（2区 E-12 10 土坑出土）



貨幣 1040～1056（左上から）



大型哺乳類の骨（ウマ・ウシ類）の四肢（3区 420 土坑出土）



421 土墳墓の洪武通宝（1035）



カメの骨（ニホンイシガメか）（3区 420 土坑出土）



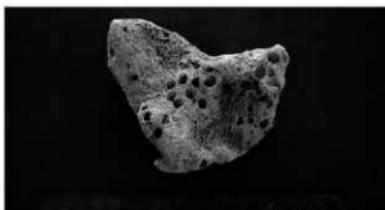
421 土墳墓埋葬人物の頭骨



飼猪口 738 内の骨



獸骨（1区 C-3 81 土坑出土）

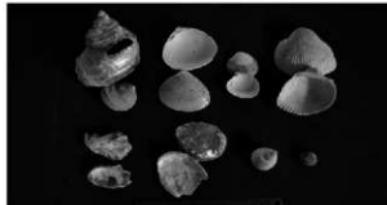


珊瑚（3区 153 土坑出土）

写真図版 65 貝類



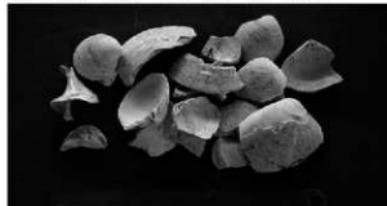
1区② 29 土坑出土貝類他（バカガイ・サザエ）



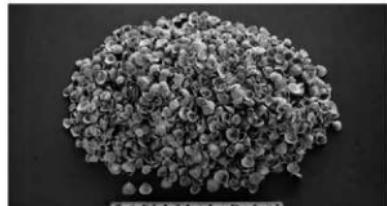
3区 165 土坑出土貝類（サザエ・ハマグリ・アサリ・
サルボウガイ・マガキ・クロアワビ・バイ・スガイ）



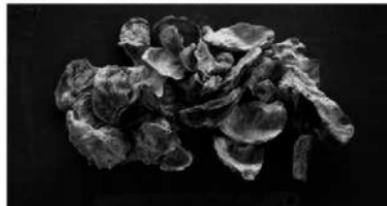
1区④ 56 土坑出土貝類（バカガイ・ハマグリ・マシジミ・サザエ）



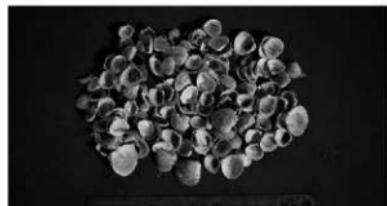
3区 176 土坑出土貝類（サザエ・コタマガイ・ハマグリ・
オキシジミ・ベンケイガイの仲間）



1区⑦ 26 ピット出土マシジミ



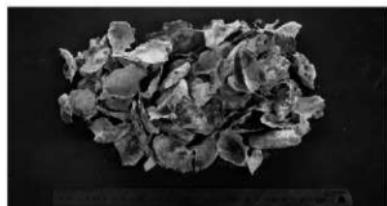
3区 186 土坑出土マガキ



1区F-3 23 ピット出土マシジミ



3区 199 土坑出土貝類（マシジミ・サルボウの仲間）



2区E-3 6 土坑出土マガキ



3区 490 土坑出土貝類（サルボウガイ・テングニシ・サザエ）

写真図版 66 陶磁器の銘・刻印・墨書



染付「大明年製」銘



左 清朝青花の外面
右 清朝青花の内面



通い徳利片の「通丁」



染付「太明」銘



染付「富貴長春」銘



灰釉陶器 757 の「瑞芝」銘



左 青花・染付 永楽年製銘
右 青花・染付 永楽年製銘の外面



染付「壽」銘



涼炉 340 の「瑞芝」銘



左 青花 宣德年製銘
右 青花 宣德年製銘の側面（鋸頭芯）



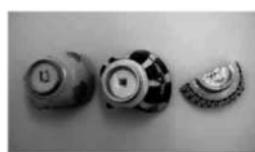
染付 電銘



刻印入り陶器



染付「宣明年製」銘



染付 その他の銘



刻印（上の写真に番号対応）



染付「大明成化年製」銘



染付蓋 173 内面の「南紀男山」銘計畫



鍋 (57) 底の墨書



染付「成化年製」銘

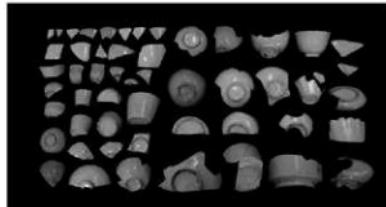


灰釉陶器蓋 (0196) の文字



灰釉急須 (588) 底の墨書

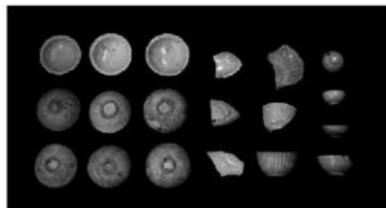
写真図版 67 各種陶磁器片他



白磁片



急須片



紅皿類



各種灯明具類



水滴片（染付・白磁）



椎木鉢片



散蓮華片（染付）



質盤片



小型陶磁器片



透い徳利片（丹波・大谷）

写真図版 68 各種陶磁器片他



窯道具の匣鉢状破片



ミニチュア土製品（素焼き・ままごと道具・箱底道具）



鉄釉・灰釉の鉢口片



泥面子



合子片



芥子面と面模



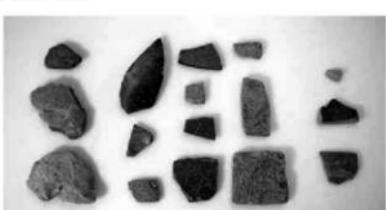
ミニチュア土製品（素焼き・人物）



焼塩壺各種破片

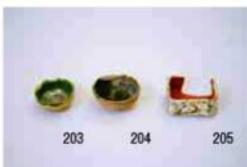


ミニチュア土製品（素焼き・動物）



埴輪・須恵器・瓦器片

写真図版 69 1区・2区出土土器



写真図版 70 2区・3区出土土器



写真図版 71 3区出土土器



463



写真図版 72 3区出土土器



写真図版 73 3区出土土器



755



754



757

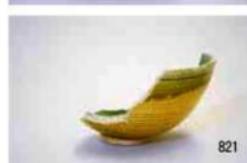
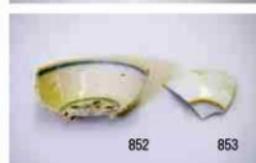


759

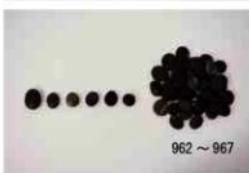


740

写真図版 74 3区出土土器・埴輪



写真図版 75 石製品・金属製品・木製品



写真図版 76 その他



色絵磁器片



ミニチュア軟質施釉土製品片



白磁・色絵の人物類片



行平鍋把手の「瑞芝」銘 (158・469・479)



色絵灰釉陶器片



行平鍋把手の「化物堂」銘 (370・369・487・729)



青磁片



その他の陶磁器片



鉄茶壺・壺片



炉壁・金属滓混入土・壁土片

報告書抄録

ふりがな	わかやまじょうあと							
書名	和歌山城跡							
副書名	和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う発掘調査報告書							
編著者名	丹野拓（編）・村田弘							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263-1 TEL073-472-3710							
発行年月日	2015年3月25日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
和歌山城跡	和歌山市二番丁	3020150	375	34°	135°	2011.7.19～ 2012.2.29	2,760 m ²	庁舎新設
				13'	10'			
				41°	32°			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
和歌山城跡	城跡	古墳時代～飛鳥時代		埴輪片、須恵器片				
		平安時代～鎌倉時代	落ち込み、粘土採掘坑	黒色土器片、瓦器片				
		室町時代～安土時代	粘土採掘坑、土壤墓群、貝殻廐棄土坑	人骨、貨幣、輸入陶磁片、貝類		土壤墓1基から人骨出土		
		江戸時代	石組遺構（井戸・枡・暗渠）、柱列、地下室跡、竈状遺構、池状遺構、土壙基礎地業跡、粘土採掘坑、廐棄土坑	陶磁器、土師質土器、瓦質土器、ミニチュア土製品、窯道具、瓦、石臼、硯、砥石、刀装具、煙管、貨幣、漆塗椀		桑山・紀州徳川・三浦家の家紋瓦が出土。在地の「瑞芝」「化物堂」銘入り行平鍋と窯道具が多い数出土。		
要約	和歌山城三の丸の武家屋敷地を調査した。下層はシルト質であるが、鎌倉時代から室町時代にかけて、厚い砂層に覆われている。砂層上面近くには土壤墓群と貝殻廐棄土坑群が確認された。近世の武家屋敷地は4区画分を調査した。屋敷の生活面は残されておらず、災害にあう度に整地しなおしている。遺構は整地土や削平面の下で検出し、地中に掘りこまれた水回り施設跡（井戸・溜槽・暗渠）と柱穴、土坑等を検出した。17世紀の遺物は整地土中からの出土が多く、18～19世紀の遺物は廐棄土坑からの出土が多い。19世紀の遺物には在地生産とみられる素焼や軟質施釉陶器類が多い。そのほか、近代の裁判所建物跡や防空壕跡も確認された。							

和歌山城跡

—和歌山地家簡裁庁舎建設に伴う発掘調査報告書—

2015年3月25日

編集・発行 公益財団法人和歌山県文化財センター

印刷・製本 白光印刷株式会社